
妖しい紅

月猫百歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖しい紅

【Nコード】

N16890

【作者名】

月猫百歩

【あらすじ】

泣いた親友が呼び寄せてしまった紅い鬼と契約した紗枝。

自分以外の友人達は無事に元の世界へ帰れたと喜ぶ反面、一切の日も射さない世界に日々侵食され、怯え、憔悴していつてしまう。

そんなある日、紅い鬼がなにやら隠し事をしている事に気がつく。

何かを探しているような。戸惑っているような。

紅い鬼は一体何を隠しているのだろうか。

元の世界に戻った親友達と何か関係があるのだろうか。

真相を究明するため紅い鬼との駆け引きが始まった。

序ノ怪 深紅の瞳

暗がりの奥で、気味の悪い笑みが浮かぶ。
その様子に思わずぞつとする。

「それで？意見を聞こうカナ？」

独特のなまりのある口調。常に弧を描く口元。
緊張で口の中が乾く。カラカラだ。
飲み込む唾さえ出てこない。

「口が利けなくなつたのカナ？」

手をヒラリ。

“紅”がおどけてみせる。

「わ……たし……は……」

やっとの思いで出たのは、裏返った、掠れた声。
それをニヤニヤと見つめる“紅い”影。震える手を隠すように背
中で拳を作る。

一体、何を言えがいいのだろうか？
下手な言い訳をすれば間違いなく今以上の窮地に立たされること
になる。

息がうまくできない。

「好きに話せば良いヨ。ただコイツが全部落ちるまでに」

そういつてコンと、青い砂時計をつつき、より一層、笑みを深め
「話さなければ、こちらから動くマデ」

相変わらず表情は変わらないが、確かに瞳だけは鋭く光った。

その鮮やかな、深紅の瞳が……

序ノ怪 深紅の瞳（後書き）

この小説に目を通して頂いた方、感謝いたします。

初小説ですが、がんばって日々精進していきたいと思います。

分かりづらい・誤字脱語などありましたら申し訳ございませんが
ご指導ご鞭撻いただければありがたいです。

今後もしよろしくお願いいたします。

第一怪 紅い嘲笑

私がよく映画や本で目にした不思議体験は鏡や扉、トンネルをくぐり異世界の冒険に出発するもの。

はたまたタイムスリップをして過去や未来へいくものや、怪談・ゾンビ・幽霊などのホラーものなど。昔ながらの陰気なものも知っていたけれど、それは幼いころ祖母に聞いた話で、数年もたてば思い出すことの無い御伽噺だった。

すべて作り話。自分とは無縁の世界。
そう思っていた。

しかし……

彼女は朽ちた神社で泣いていた。

お社の階段で身体をうつ伏せにし、身体を震わせて。
切ったばかりの髪はボサボサでグレーの制服は所々汚れていた。
私は彼女に声をかけ、帰ろうと肩に手をかけた。

パシッと、乾いた音が辺りに響いた。

友達が私の手を振り払ったのだ。

「分かんない……絶対に……」

“なにが……分らないの？”そう尋ねようと口を開いたとき、
友達は荒々しくポケットから何かを取り出した。

それは人型をした赤い折り紙だった。わけが分からずにいる私を

よそに、友達は無造作に転がっていた錆びた釘を握り締めると、突然激しく折り紙に打ち付けた。

「……だ」

「あつ！」

何かを叫びながら、大粒の涙を流しながら、何度も何度も、折り紙に打ち付けた。

昔、祖母が話してくれた丑の刻参りの女性のように……。

しばらく呆然とその様子を眺める私と友人たち。

ハッと我に返り、私はまた泣き叫ぶ親友の肩に手を置こうと手を伸ばす。

「ねえ……みっちゃん……」

その時、音も無くなんの前触れもなく突然闇が広がった。

ボロボロになった折り紙が音もなく踊るように宙に舞っていく。

私達はまるで金縛りにでもあったかのように誰一人身動きせず人型の折り紙を凝視していた。人型はフラリフラリと闇の中へと小さくなっていき、ポツと深紅の灯火へと姿を変えた。灯火は揺らめいて次第に大きく燃え上がると、ニヤリと笑った。

「ようこそ」

自分とは無縁だった世界が、真っ赤な口を開けて「おいで」と手招きしている。

私たちはただどうする事も出来ず、闇を受け入れるしかなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

落ち着いて……落ち着いて！

自分にそう言い聞かせ、深呼吸を繰り返す。あそこまで自分達の力で扉の前まで辿りついたんだ。何一つ責められる事なんて無い！相変わらずニヤニヤ笑う紅い鬼を見やり口を開く。手に汗を握りながら。

「い、意見も何も。私たちは自分で扉を開けてここから出ようとしただけ。貴方は私との約束を破った。助けてなんてくれなかった！だから私たちは自分達の力であの扉を開けただけ！」

身体全体が脈を打っているような感覚を持ちながら私は精一杯話した。

自分達に非はないと。なんら間違っていないと。

しかし紅い鬼はクツクツと笑い次第に大きな声で笑い始めた。

「……なにが可笑しいの？」

この時ばかりは恐怖を忘れ、ムツとして訊ねた。

「いやいやいや……。大変おめでたい娘かなあ。自分達の運と力だけであそこまでたどり着いたと思っている。まさに……。まさに滑稽カナ！」

ひとしきり大笑いした後でニヤリ笑い、また私を深紅の目で見据えた。

「大広間の騒動も、裏口の鍵も、門番も、全てこの俺がやったこと。お前達は俺が手を引ひいてあの扉まで連れて行ったも同然……」

一体この鬼はなにを言ってるのだろう。

あの大広間のバカ騒ぎも、裏口に落ちていた鍵も、酔いつぶれていた門番も。

この鬼が？

「な、なんでそんな遠まわしな」

「行灯もつてご案内でもするとも思っていたのカナ？」

私の言葉をさえぎり小馬鹿にしたように言った鬼は、おもむろに立ち上がった。

「いやいや、それでは面白みにかけているなあ」

また、手をヒラリとさせた。

その瞬間、まるで電撃が走ったように私は悟った。

ば、馬鹿にしている！

私たちが必死になって戦々恐々としながら、あの扉を励ましあつて目指しているのをこの紅い、腹立たしい鬼は、影でニヤニヤ笑っ

て見ていたということだったワケ！？

無事に扉まで行けたと喜び合ったのを見て滑稽だと笑っていたの
！？

きつと今、自分の顔はそこにいる鬼の瞳並みに紅潮しているのだ
ろう。

先ほどまで怖さで震えていた拳は今では怒りでふるふると震えて
いる。

そんな私をみて鬼はなだめる様に両手を振った。

「まあまあ、兎に角。約束は守った」

鬼はゆつくりとこちらへ歩を進めた。

一歩一歩、勿体ぶらせるかのように。

そのゆつくりした足取りは、今さっき燃えたばかりの私の怒りを
小さなものにさせ、かわりに恐怖の影を忍ばせた。

「さあて……」

紅の瞳を鋭く光らせ、その眼に宿っていた笑みを消す。

笑みと同時に部屋の明かりも消え、私の怒りの炎も消え一切の光
も無い真っ暗闇。

しんと静まり返った中、耳元で紅い声が囁いた。

「後はお前さんが守る番」

第二怪 紅い呪

暗闇の中、突然目の前に紅い目が現れ、顎を掴まれた。
身体は金縛りにあつたかのように動かない。心臓がひどく早鐘を
うつ。

「さあ……俺の目をよく見るんだ」

逸らす事を許さないという鋭い眼。
手の先がピリピリと痺れる。

その怪しく光る深紅の瞳に囚われ、次第に意識が朦朧としてくる。
貧血になったみたいに頭がクラクラし、頭の中がぼんやりとして
くる。

揺らめく意識の中でもがいていると、遠くの方から声が聞こえて
きた。低い、ゆっくりとした口調で頭の中にこだまする。

「お前の名は『鈴音』^{すずね}今持つ名を捨て『鈴音』とし、我に魂を捧げ
ろ。『鈴音』の呪を甘んじて受入れよ」

「鈴音……」

口から名前がこぼれる。

その途端、頭の中に甘い霧が蒸気のように立ち込める。
恍惚にも似た様な感覚の中、私はコクリと頷いた。

『そうか、これが私の名前なんだ』と。

「良い子ダ」

かすんだ意識の向こうで鬼がクツと笑ったのが見えた。
鬼は顎を放し、手の甲で私の頬を撫でると、ねっとりとした猫な
で声で私に問うた。

「お前の名は？」

「……鈴音」

口が勝手に動いて声が出る。
でも違和感はない。

「お前の主は？」

「……貴方様です」

鬼は満足そうに笑みを深め相変わらず頬を撫で続ける。
そして暫くこちらを眺めると、口を開いた。

「お前の捨てた名は？」

「捨てた名前……」

名前。捨てた名前。呼ばれていた名前。
混濁とした意識のなかを手探る。

……見つからない。

自分が生まれて初めてもらった名前。自分の存在示す名前。

記憶と心と頭の中を必死で探す。

だめ。

見つからない。

「……名前」

鬼は楽しげに私が名前を探すさまを眺めている。
猫が鼠をいたぶっている様な残酷な眼で私の瞳を覗いている。

「分からないの力ナ？」

もう一度記憶の中をまどろみながら探す。

ずっとずっと奥へと。ついこの間まで呼ばれていた名前を。
すると何かが深い霧の奥でキラリと光った。あれはなんだろう。
あの光っているのは。

光が溢れる深いところへ。深いところへ探す。

あれは

「さ……え……」

動いた唇に鬼が眉を寄せた。

ピタリと頬を撫でる手も止まり、ひどく怪訝な表情を浮かべて私を見つめる。

私は淀んだ頭の中にある霧を払いのけて口にした。

「紗枝……私の名前は、紗枝」

紅い鬼は顔を凍らせた。

頬を引きつらせ信じられないと言わんばかりに私の顔を凝視した。朦朧としていた意識は次第に晴れて行き、ハッと気がついた時には紛れもなく本物の『鬼の形相』というものが目の前にあった。

「いやあっ！」

溜まらず鬼から離れ、勢いのあまり尻餅をつく。

辺りはまだ暗闇で包まれていて、鬼の両脇にある鬼火が二人だけを照らし、鬼は表情を変えずに私を見下ろしていた。

私は一体何をされたんだろう？

鬼はどうして怒っているのだろう？

訳が分からずガタガタ震えながら鬼を見つめる。

しばらく鬼は微動だにせず顔を引きつらせたままだったが、ふと何かを考えるかのように顎に手を当てて唸った。

「おかしいナー……こんな事があるとは」

目を閉じ俯いた後、一呼吸いれてもとの意地の悪い笑みを浮かべた。

「まあ、いいサ。お前さんは今この時から『鈴音』ダ。これで一応契約終了カナ」

パンと鬼が手を鳴らすと部屋にある全ての蠟燭に灯りが戻る。未だに状況を把握しきれしていない状態のまま、私は呆然と明るくなった部屋を眺めた。すると突然身体が浮き上がり、驚きの声をあ

げる。グルリと視点は床へ移り、どんどん遠ざかる。どうやら鬼の肩に担がれたらしい。

「さあて。お前さんを入れる籠はもう用意出来ているんだ。今から連れて行ってやるからナ」

鬼は愉快そうに笑い、私を担いだまま歩を進める。

私はただただ鬼と契約した実感があまりない自分の鈍感さに半ば呆れつつも、もう二度と元の世界に戻れないのだと改めてかみ締めていた。

これからは日も射さぬ物の怪の世界で、いつ飽きられ食われてしまいかも分からない世界で怯え、戸惑う日々を過ごさねばならないのだ。

「……ッ」

おかしいな

後悔はしていないハズなのに。

鬼に気づかれないように、にじむ視界を何度も何度も擦った。

それでも視界はなかなか晴れてはくれなかった。

第三怪 白竹の鳥籠

後悔なんてしていなかった。

少なくとも友人達は元の世界へ逃げられたのだから。

みつちゃんも……彼女もきつとそのほうがよかったと思う。

これ以上、辛い目に遭うことは無い。あんな辛いことが立て続けにあったんだから。

先ほどから何度もそう自分に言い聞かせ、なだめていた。

未だに震える手。それを胸に抱えて深呼吸を繰り返した。

頭は驚くくらい落ち着いている。だけど身体は意に反して震え続けていた。

「憂いているのカナ？」

突然かけられた声にハッとして顔を上げる。

相変わらずニヤニヤ笑う鬼が一匹。

「……」

私はその姿を見るや否やフイツと顔を背けた。

正直あれから友達や、家族や将来の夢とか、色々考えてしまつて泣きそうに何度もなつた。でもこの鬼の前で泣いたりしたら大喜びする事間違いないだろう。

人の悲しみや苦しみが大好物な鬼のことだ。私がここに閉じ込められてメソメソ泣いているのを眺めて酒の肴にでもするつもりなんだ！

しかし……だからと言って泣かないなら喰つてやれ！ というのは勘弁して欲しいところなのだけれど。

「ご機嫌斜めなのカナ？」

竹がしなる音が背後ですと、この『鳥籠』に鬼が入ってきた。十畳ほどの和室には雀が隠れ鬼をしている絵が描かれている襖に淡い儚げな光を放つ灯籠、奥には三畳ほどの白い和鳥籠が置かれていた。もちろんその鳥籠の中に居るのは鬼と契約した私だ。

「私をどうする気なの？ 私なんか食べても美味しくないと思います」

震える手を隠しながら努めて丁寧に言う。

また先ほどの形相を見たいなんて思わなかったし、何より怒らせて酷い目に遭うのだけは避けたかった。

しかし自分の意見はしっかりと伝えておく。

「いやいや。食べるのは今のところ遠慮しておこうカナ」

私が怯えているのを悟ってか、薄ら笑いを浮かべながらズルリと赤黒い舌で口の周りを舐める。

“今のところ”

爛々としている鬼の目に思わず身体が強張る。

鬼は勢いよくその場に座ると、私にお酒の入った入れ物を押し付けた。

「酌をとりナ。今日はそれで勘弁してヤル」

腰に下げた皮袋から大皿ほどの盃を取り出した。おずおずと酒を受け取り、その漆塗りの大盃に注ぐ。

お正月の時に親戚にお酌をして回ったことがあったけど、まさかこんな所で役に立つなんて……。

これくらいで穩便に済むのなら安いもの。早く帰ってくれことを祈りつつ黙って従った。

「良い籠だロウ？特注品らしくてナァー」

上機嫌に注がれた酒を飲み干し、注げと言わんばかりにまた盃を乱暴に差し出す紅い鬼。勢いあまってコツンと酒瓶に盃が当たる。

「良い竹を使っているみたいダ。感触もいい」

酒を注ぎながら、横目で骨のように白い格子を撫でている鬼を見る。

赤黒い髪に蔦色の肌。屈強な身体に走る朱色の模様。口端からのぞく真つ青な牙。だらしなく胸元を開けている緋色の着物。

自分が赤鬼だと強調しているのだろうか。

赤・朱・紅ばかりだ。そして何より紅いのが……

「何を見ているのカナ？」

ハツとして顔をすぐに逸らす。

どうにもあの紅い瞳が苦手でしかたない。目が合うと身体がすぐんでしまう。

吸い込むような、射抜くような、怪しい瞳。

クツと鬼が笑むと無色透明の液体を赤い口に流し込んだ。

「上酒だナァー。実に美味いつ」

空いた盃にまた酒を注ぐ。

そんなに大きな酒瓶でもないのに注いでも注いでも無くならない。牙の間を酒が通り過ぎ、空いた盃にまた酒を注ぎ、赤い口に酒が

吸い込まれ、また盃に酒を注ぎ。

酒が消え、酒を注ぎ

酒が消え、酒を注ぎ……

こんなにガンガン飲んでも平気なのだろうか。酔った勢いで酒のつまみにされたら堪らないのだけれど……。

ハラハラしながら飲む速さを加速する鬼を見つめる。よほど機嫌がいいようで、鼻歌まで歌いだした。

「あ、の……」

鬼の目が虚ろになりだしたところ、勇気を振り絞って声を出した。鬼は聞こえていないのか、宙をとんとした目で見つめている。口からはだらしく真つ赤な舌が犬のように垂れて、恍惚とした表情を浮かべていた。

意を決してもう一度、既に消えかけている勇気を捻り出す。

「あの、もう、お休みに……なつたほうが」

よろしいのでは、と言う言葉は一瞬にして鬼の掌へと消えた。

何が起きたか分からなかった。気がつくとも顔の下半分は鬼に驚掴みにされ、その大きな手は耳まで届いている。

鬼は顔をゆっくり、ねっとり、こちらへ向けた。

後悔した。

何も言わなければ良かった。

このまま喰われるのだろうか。それとも殺されてしまうのだろうか。

何も読み取れない表情。しかし相変わらず焦点の定まらない深紅。手足は動き方を忘れたようだ。私は震えるのも忘れ、身動き一つせず涙を零した。

ズルリと生暖かい真っ赤な舌が目元を這い回る。まるで生きているみたいに。

顔を掴んだ手はズルズルと下げられ、人差し指を私の唇へと押し付け意地悪に笑った。

「お客さんのようだネ」

ちらりと向こうの襖を見据えた。

第四怪 金と黒

「あらん。こちらにいらしたのお？」

ねっとりとした声が聞こえたと同時に籠の向こうにある襖がゆっくり開いた。

格子に負けないぐらい白い手が見える。それがぬるりと襖から離れると、金と黒が印象的な、煌びやかな遊女が現れた。

まあ、遊女と言っても映画や漫画で見たくらいなので目の前にいる女性が本当にそうなのかは分からないけれど。

それにしてもなんて気持ちの悪い声なんだろう。一瞬にして鳥肌が立つ。

「鬼さんが籠に入っている姿なんてえ」

ふふつと笑い「なかなか見れない絵よ」と付け加えた。

応えるようにひらりと紅い手が揺れると鬼は相変わらず上機嫌で彼女に笑みを向けた。

「おお、蜘蛛の姫さんじゃあないか。久しいナア」

「鬼さんちつともいらしてくれないから、寂しかったわあ」

しなりと身体をよじらせて籠に近づく。

金色の空に黒い雲が漂っている着物の絵柄。よく見ると妖怪が人を襲ったり、それを見て笑っている鬼が描かれていた。

なんて悪趣味な着物なんだろう。この女の人も物の怪なのかな。大きく後ろで二つに結われた漆黒の髪に、桃色の羽が左右に飾ら

れ、銚色をした八本のかんざしは蜘蛛の足のように広がっている。

「あらん。なんて美味しそうな人の子なのかしらん」

そのセリフに私は思わず絶句した。その悲鳴を表すために、ぜひ「え」に濁音をつけて頂きたい。

じろじろ見てしまったことを不快に感じたのか分からないが、笑みを浮かべてはいるが、白目部分が段々と黄色くくすんだ色に変わって行き、文字通り獲物でも見るかのような眼を私にむけている。硬直した私をよそに鬼が「そうだろう」と自慢げに話した。

「この籠をもらってナア。入れる雀を探していたんだ」

ガシリと首根っこを掴まれた。……あ、熱い！

火傷するほどではないにしても、カイロをグッと押し付けられたかのようなだ。私を掴んでいる手が、人の体温とは比べ物にならないほど熱い。

さつき顔を掴まれた時はなんでもなかったのに！
ながく触られたら低温火傷でもしてしまうんじゃないのだろうか。

「ねえん。この子、私にくださらない？」

嫌な汗が背中をじっとりと濡らした。

首の熱さよりもこの女性から感じる絡めるような視線のほうがい。
怖い。

嫌だ。食べられたくない！

反射的に心の中で叫ぶ。

鬼はむうと唸ると怪訝そうな顔で彼女を見返した。

「だってお前さん。男しか喰わんのだろう？ コイツを貰ってどうするんだ？」

……え、そうなの？

その言葉を聞いて少し安堵する。この遊女に喰われる心配はなさそう。その点に関してはこの鬼より安全かもしれない。しかし次の言葉に完全にその望みは絶たれた。

「ワタクシだって、たまには柔らかい お肉を頂きたいのよ。お願い、鬼さん」

ぬめりと白い指が籠の中の鬼へと伸びた。

鬼の足の甲に白い手が這うように撫でる。鬼は特に嫌がりもせず、私の首を放し、盃を啜えてまたむうと考えをめぐらす。

ああ、やっぱり。

淡い期待がしぼんでいくのを感じる。

ここでは人間は遊び道具兼、食料でしかないのだろう。例え運よく食べられなかったとしても、殺されてしまう可能性だって十二分にあるのだ。

女性は艶っぽい声で格子にもたれ掛かり囁いた。

「だってね、鬼さん。このまえ天狗さんのところで美味しい人の子が宴で出されたそうよ。最近出される人の子は良い物を食べてるせいか、大変美味だそうで」

「ほほう。それは良いことだ。昔は骨と皮ばかりで不味いのばかり

出回った時期があつたからナァー」

「それに人間を飼うのも、それはそれは大変みたいよ。前に狒々ひつが人の子をさらって 飼っていたみたいなんだけれど、うるさくて我慢できずに食べてしまったって言うしい鬼婆さんは面白がついていじめ過ぎちゃって、人の子が鬼になって困ってたみたいだし」

鬼はそれを鼻で笑うと、盃をグイッと私に差し出した。
しかし私はそれに気づかず真っ青になり震え上がっていた。

「奴等は飼いが下手なだけだ。第一飼いならすなんて柄じゃないだロウ？ 物事を楽しむなんてこと、出来るとは思わなんだ。……おい、酒だ」

二人の会話を聞き、完全に思考が麻痺したようで何も耳に入らない。

……食べた？

いじめ過ぎて鬼になった！？

一体どうしたこと！？

いい加減この状況に耐え切れなくなり、瞳からまた涙が零れた。
手も身体もガクガクと震えてのが詰まる。心臓がドクドクいつている。

いつ酷い目にあうんだろう？

いつ弄られるんだろう？

いつ死ぬのだろう？

いつ喰われるのだろう？

もういつその事、発狂したい！

本当に今更、私は今いる世界に対して強く恐怖し、絶望した。

「かわゆいのう」

くつり。薄い三日月の口が笑った。引いた紅から鬼とは違つ、これもまた三日月のような牙が覗く。

音もなく遊女は立ち上がり凜と背筋を伸ばした。

「鬼さん、おねだり聞いてもらえないみたいだからワタクシ帰りますわあ」

踵を返した遊女にひらりと紅い手を振り

「おお、おお。すまないナア土の姫さん。そのうち埋め合わせをしようカナ」

鬼の言葉に「ええ」と頷き襖に手をかけて、ふと何かに気がついたように女性は肩越しに鬼に言った。

「それと。人の子と言えど、飼っているのなら身だしなみは大切。そんな低俗な服なんて剥いで、上等な召し物でも与えてくださいまし」

ズルリと粘着質のある声と共に、襖の向こうへと、彼女は消えた。鬼はそれを鮮やかな深紅の瞳で見送った。

第五怪 若草色の湯

「お前さん、湯浴みでもしてこい」

女の人が帰って一言、鬼が唐突に私に言った。
あまりにも急に言われたので思わず「え？」と聞き返す。

「小汚い雀なんぞ飼いたくないカナ。案内をやるから行つて来い」
鬼が手を鳴らすと籠の外の天井からいくつかの小さな影が降ってきた。
驚いて飛びのき、その何かを凝視した。

あ！ これは……子鬼だ！

私の膝くらいの身長にギョロリとした大きな目。
緑色の手足は骨のように細く、お腹は太鼓みたいに丸く出っ張っている。

腰には気持程度にしかない布が巻かれていて「きいきい」と古いドアが鳴る様な小さな声で鬼に挨拶し、頭をたれた。

「お前さんら、魚どもに湯浴みの用意をさせろ。あとそくだナァ」。
着物も用意させるように伝える」

子鬼達は頷くと籠の出入り口で整列し赤い鬼が籠から出るのを待った。

鬼は籠から出るとうんと伸びをしてこちらにくるりと向きなおる。

「さ、早くソコから出て子鬼の後についてイケ」

私はよろめきながら立ち上がると籠から出た。

子鬼はそれを確認すると小走りで襖の方へと走っていき「こちらへ」と私に手招きをした。

脱衣所に到着して一人になったところで、ふと、こないつつ何が起こるか分からない所で無防備（とは言っても服を着ていても同じなのだろうけど）な格好をするのには些か抵抗があった。どうしようかとモジモジしていると

「はよう……お入りい……」

喉がつかえている様な低い声が背後から聞こえ、思わず叫び声をあげる。

後ろを振り返ると魚の頭をした浴衣姿の人物が目に入った。

腰を抜かして口をパクパクさせている私を見て、ゆっくりと手に持っていたカゴを私の手前にそっと置いた。

「紅の鬼様のお、お屋敷でえ、勝手な行動をとる者はありません……。安心してえ……入られると宜しいかとお……」

淀んだ目を私に向けてそう言うとなソノソと歩いて脱衣所から出て行った。はあーっと思わず安堵の息を漏らす。一体今のは何だったんだろう。

ともかく、今の魚（それとも魚人？）さんの話を聞いても安心できなかつたけれど、このままモタモタして鬼の機嫌を損ねるのも良くない。それに『小汚いのは飼わない』と言っていたから、もし入

らなければそれこそ酷い目に遭わされた拳句、喰われてしまうかも。その考えにぞっとして慌てて制服の上着を脱いだ。

もう二度と学校に行くこともないんだろつなと、しんみりしながらも黙々と脱ぎ、丁寧にたたんで足元のカゴにそっと入れた。

脱衣所の奥にある籠が彫られた大きな引き戸。

これがお風呂の入り口なのかな？

やや重い引き戸を両手で開けて中を覗き込んだ。

「うつわぁ……すごい露天風呂！」

目の前に広がる光景に思わず声を漏らしてしまった。

向こうに見える手入れをされた和庭園には優しい光を放つ灯笼に立派な松の木。岩と言う岩は鏡のようにスベスベしていて黒曜石のよう。

温泉の中央には本物そっくりの白虎の石造がとめどなく口から温泉を出し、瞳は猫の目をした宝石がはめられている。

漆黒の空を見上げると線香花火のような妖しくも美しい満月がこちらをぼんやりと見下ろしている。

風が通るたびに踊る湯気の中を進み岩風呂へと恐る恐る近寄ると若草色をした温泉が見えた。あまりにも濃い色だったので少し躊躇したが、手でお湯をすくい身体にかけて、ゆっくり身体を温泉に浸からせた。

いざ温泉に浸かれば恐怖心が和らぐものだ。

しばらくの間、何も考えずにただ大きく息を吸って吐き出すのを繰り返した。

身体が温まってきたせいか睡魔がゆっくり頭の中に忍び足でやってくる。

そつえば今は何時だろう？みんなどうしているのかな。うとう

としながら、元の世界の事を思う。

今頃みんな心配しているのかな。

みっちゃん達は無事に帰れたのかな。

様々な事が思い浮かぶも、次第にまぶたが重くなり、それに任せて目を閉じる。思考がだんだん遅く鈍くなってゆく。

呼吸もだんだん深いものになり、ついに睡魔は私をとらえたようだ。

意識は深いところへ深いところへと沈んでいった。

第六怪 漆黒の始まり

「一緒の高校に行けなくなっちゃった」

弱々しく微笑んで、夏休みの終わりに彼女は私にそう告げた。

伏せた目が寂しさをより感じさせていた。

みっちゃんは私にとって妹のような存在だった。口数の少ない内気な子だけど、笑うととても可愛い思いやりのある子。

学校が始まり、テストが終わり、そして文化祭の時期が来た頃。

みっちゃんのお母さんが希望した高校に行かせてくれない理由を知った。

バイトが出来ない事、そして高校卒業後にすぐ就職して欲しいのがその理由だったみたいだ。

文化祭も無事に終了した黄昏時。

文句ばかりいう男子2人と他のクラスの女の子、そして私とみっちゃんの五人で図書館に本を返しに行った帰り道。通りかかったコンビニでピタリとみっちゃんが足を止めた。彼女の目線の先には学校の先輩達の姿。その中に、彼女と仲の良い男の先輩が見えた。

みっちゃんはクラス問わず男子から何度も何度もかわれ、すっかり男子嫌いになっていたけれど、その先輩には心を開いていた。

「あの先輩、落とした荷物を拾ってくれたり、傘を忘れたとき貸してくれたんだ。それにね、廊下ですれ違ったら話しかけてくれたの」

ある日の下校途中で、その先輩の話を彼女は嬉しそうに話してくれた。その時の、はにかんだ笑顔はとても可愛らしくて顔中にその先輩は特別だと書いてあったほど、嬉しそうに笑っていた。

私もその先輩とは一度だけ話をした事があった。

文化祭の準備がまだ忙しい時で帰りが遅く、たまたまその先輩と帰り道が一緒になった日のこと……。

「先輩は遅くまで、どうされたんですか？」

「いやさあ、美術の課題のオルゴール、先生の提出が終わったから持って帰ったんだけどよ。文化祭に出展するのすっかり忘れちゃったさ」

「え。どうして持って帰ったんですか？」

「自分流にアレンジしたくてさ。そうしたら……」

先輩が言いよどむので私が目で先を促すと、ガシガシと頭をかきながら苦笑いして、ぶっきらぼうに言った。

「そしたら失くしちゃったんだよ。で、さっきまで美術の先生にこつてり絞られてたワケ。まったく……だっせえよなあ」

みっちゃんと同じ屈託のないその笑顔を見て、先輩はきつと彼女を大事にしてくれてる。と、なぜだかそう思えてならなかった。どこかガサツだけれど、優しい表情がとても印象的な先輩だった。だけれど……。

夕闇が迫るコンビニ。店内の明かりが浮かび上がるその前で、友達と座り込む先輩達の会話は彼女にとって最悪なものだった。

「なあ、なんであんなダサい後輩と仲良くしてんだよ」

「うるせーな、だから言っただろお。罰ゲームなんだって」

「そうそう、コイツこの前ゲーセンで負けてあのキノ子に10回優しくする事になってんの。この間なんか頭撫でてやったんだよなあ」

「ほつとけよ、見てんじゃねー！でもあと4回かあ。面倒くせーな。」

みつちゃんの髪は近くに住んでいる親戚のおばさんがいつもカットしていた。

何故かいつもマツシールムカットで背が低い上に目と口が小さい彼女がその髪型にすると、より真つ黒な髪が全体的に大きく見えてしまいとてもアンバランスにうつったのだ。

いつからか、誰かが『光子じゃなくてキノコだ！』と笑い飛ばしたのをきっかけに、彼女のあだ名は悪意ある「キノ子」になったのだ。

コンビニで笑い転げる先輩達。それを呆然と見つめるみつちゃん。私がなんと声をかけて良いか分からないでいると、彼女はボロボロと涙を流しそのまま駆け出した。

「待つて、みつちゃん！」

慌てて私は後を追った。

彼女を捕まえようと手を伸ばす。

「待つてよ！」

伸ばした手は空を掴んでばかりで彼女に届かない。

おかしい……足は彼女より速いはずなのに何故か追いつけない。それでも必死で追いかけると、見えた先には鬱蒼とした山道の入り口。その山道は神社の裏へと続く階段。あの紅い鬼が笑った場所に続く階段。

「ねえ、ダメ！ そっちに行っちゃダメ！」

一体どうしてなんだろう？

追いかけても追いかけても、何故か追いつかない。

彼女 はどんどん遠ざかる。小さくなつて見えなくなる。

お願いだから行かないで！ そっちに行ったらダメ！

ねえ、お願い！ 戻つてええ！！

泣きながら叫ぶけれど、口からは掠れた声すら出てこなかった。辺りは真っ暗闇。何も見えない。何も無い。

「みつちゃん……」

息を切らしながら走るのをやめて辺りを見回す。

やはり何も無い。誰もいない。

「そんな……みつちゃん！ みつちゃん！」

暗闇に自分の声がこだまする。

その叫んだ声に応えるかのように、どこからか笑い声がきこえる。人をあざけたような、嫌な笑い声。

どこから聞こえるんだろうと辺りを見回す。注意深く見回したとき、視界の端に何か捉えた。ゆらゆらと陽炎のように揺らめく背中。

「みっちゃん？」

呼びかけるが返事はない。駆け寄って「ねえ」と呼びかける。声にびくりと人影が反応しゆっくり振り返った。振り返ったその顔は鬼の顔をした親友だった。

第七怪 震える緋色

突如顔に水が掛かった感覚を覚え、慌てて手足をジタバタさせる。どうやら温泉につかったまま寝入ってしまったようだ。むせびながら顔にかかったお湯を手で拭う。

それにしても嫌な夢だったな。みんな無事に帰れたのに、なんだか不吉……。

途中までは記憶どおりの夢だった。けれど彼女を追いかけて行くあたりからは違った内容だった。

追いつかなかったのは不思議な力が働いたわけではなく、ただ運悪く信号が赤になってしまい彼女との距離が開いてしまったのだ。しかも最後のみっちゃんのあの顔……。

生暖かい風が頬を撫でる。お湯に入っているにもかかわらず、背中に悪寒が走った。

そろそろ出よう。なんだか気分が優れない。

ここに残ると決めてから、おそらく一日も経っていないハズのに、もうすでに心が病み始めている。

お湯から上がる前に髪と身体を洗おうと辺りを見回したが、石鹸の類は一つも見当たらない。シャワーすらない。

気休めだけれど温泉のお湯をすくって頭からかぶり、髪をすすいだ。何もしないよりは良いよね。

これからどうなるんだろう。

意味もなくお湯をすくって指の間から零れさせる。言いようのない不安。ふうとため息をつく。

このままここにしても仕方がない。答えのない漠然とした思いで立ち上がり、脱衣所へと足を向けた。

.....

編みかの中には制服の変わりに三枚の手ぬぐいが置かれていた。枚数に意味があるのかわからなかったが、湯冷めをする前にそれで身体を拭くことにする。

それにしても着替えはどうすればいいのかな。何か着る物は……。

「お待たせえ致しましたあー」

のんびりした口調とは逆に勢いよく脱衣所の扉が開く。裏返った叫び声を上げて飛び上がるが、格好が格好なのですぐにうずくまる。なんでこの、さ、魚さん？はいつも突然声をかけるんだろ。ついでに扉の開け方が何故激しかったのかも疑問だ。

「こちらをどうぞぞ」

相変わらずぐもった声で、丁寧にたたまれた何かを突き出す。差し出された物を手に取り広げて見ると、薄い生地 of 浴衣だった。これだけ？とも思ったが、裸のままで居るわけにもいかないのさつそく羽織る。真っ白でなんの模様も無い。

「あの、帯や下着は……」

おずおずと聞くと、魚さんと私の間にいつの間にか脱衣所に入ってきた子鬼達が私の裾を引っ張り、付いて来る様に促してきた。私は魚さんにぺこりと頭を下げ、小鬼たちに囲まれながら脱衣所を後にした。

・・・・・・・・・・・・・・・・

驚が描かれた屏風と龍が描かれた屏風の間に立つ。

最初に着ていた浴衣は身体についたお湯を吸ってぐっしりになり、子鬼に脱ぐよう言われてすでに手渡していた。

子鬼はきいきいと言いながら、私に白いシャツのような短い和服を着せ、紅色の袴をはかせ、最後に山吹色の刺繍が見事な緋色の着物を羽織らせる。

あ、この格好ってどこかで見たことある。

自分の着ている着物を角度を変えたりして眺める。これは百人一首のカルタに描かれていた女性と同じ着物だ。

平安時代だったかなと、当てにならない知識で思い当たるイメージを上げてみる。袖を広げたりして着物を観察していると、子鬼が座れと合図をしてきた。

おとなしくその場に座ると子鬼が後ろに回り、櫛で背中まで髪をとき始めた。するりするりと何度かくと、香料を髪に滲ませた。髪から微かに梅の香りがする。

子鬼が手招きをして襖を開けた。手には行灯を持っている。

これからまたあの紅い鬼のところへ行くんだろ。そう思うだけで気持ちが悪くなる。

正直もう会いたくない。だけれども契約をしてしまったんだ。私が残らなければみんな鬼の腹の中。我慢しないと。

子鬼たちが中々立ち上がらない私をつつき、早くするようせつづく。

いい加減行かないと。ぐつと自分に言い聞かせ、深く息を吐いて立ち上がる。

裾を踏まないよう足元に気をつけながら、私は襖の向こうへと足を進めた。

.....

「おお。よく似合ってるカナ」

紅い手がヒラリと踊る。向こうの一つ上の段にいる紅い鬼は身体を横たえ、上機嫌そうに笑っていた。

振った手にはまた酒瓶が握られていてタプンと中の酒が波打つ音が聞こえる。

私はと言うと、紅い鬼の言葉に喜ぶはずもなく、口を真一文字に結び襖の前に突っ立っていた。

「何をしているのカナ？ こっちに来ナ」

鬼は酔っているのだろうか。ニヤニヤというよりもヘラヘラしているようだ。

私はそんな鬼を見て硬直していた。疲れが出始めた身体と心は一時の休息を得て完全に降伏状態になった。

どちらも、もう一度休ませてくれと悲鳴を上げている。足もガクガクしていた。お風呂に入る前まではお酌までしていたのに、今は足が疲れと恐怖でずくんでいる。ギュツと歯を食いしばっていないと歯まで鳴り出しそうだ。

でも行かなくちゃ。鬼の機嫌を損ねる前に行かなくちゃ……！
焦って心臓も強く脈を打ちはじめた。しかしどうしても身体が動

かなかった。

鬼はしばらく黙ってそれを見ていたが、大きく酒を一口飲むと、ゆっくりと身体を起こしあぐらをかいた。頬杖をしてちらりと深紅の瞳をこちらへ向ける。先ほどまで笑んでいた顔は今や無表情だ。

「どうした？ 来いと言っているんだガ」

「……」

「聞こえないの力ナ？」

「……」

私は完全に俯いてしまった。もうこの場から逃げたい。休みたい。鬼のいない場所に行きたい。

そんな考えばかりが次々と浮かぶ。みんなと一緒に座敷牢から逃げ出してから今に至るまで、一度もきちんとした食事も睡眠も安息もなかったのだ。

もう嫌、もう限界！ 私は心の中で叫んだ。

「鈴音え……」

鬼がつぶやくような小さい声で名前を口にする。しかしその声には威圧するものがあつた。ドクツと心臓が強く鳴る。

顔がゆっくりと上がり、視界に映る景色が顔の動きに合わせてゆっくりと変わる。

鬼と目が合う。何度も見た妖しい紅の瞳。

「来いつ、鈴音え！」

低く轟く声が部屋の四方に響く。すると身体は痙攣したかのようにビクツと震え、足が勝手に動き出した。

最初の一步は引きずるように。しかし二歩目からはしっかり畳を離れ着地する。

「やつ、……嫌っ！ 止まって！」

慌てる私をよそに足はどんどん鬼へと歩いていく。顔だけは自由がきくようで、無意識に顔を左右に必死で振るがそんな私を無視して足は止まる気配を一向に見せない。

鬼は無表情のまま視線を逸らさずにじっとこちらを見つめ続けている。

だんだん近くなる紅い鬼の姿。額からは鋭い象牙色のツノが二本生え、その下にはあの妖しい瞳。

こちらを一瞬たりとも逸らさない眼。

怖い。もう嫌だ。家に帰りたい。ボロボロと涙が零れた。緋色の生地に涙が吸い込まれる。

かすむ視界に映る紅い影。もうこれ以上近寄りたくない！

「やめ……て……やめてええ！」

叫んだ瞬間、突然足の束縛が解けた。私は突然の事にバランスを失い、斜め後ろに倒れこんだ。畳みに激しく身体をぶつけ呻き声を上げる。

鬼はほんの少しの間微動だにしなかったが、またむうと唸り顎に手を当てる。そして視線を目の前の緋色へと戻し、腰を上げた。私は恐る恐る目を開いた。映るのは未だにぼやける視界。映っているのは畳の緑色だけ。身体に力を入れ、立ち上がろうとするが

「……痛っ」

腕をついた途端、痛みが走った。倒れた時、とつさに身体を庇った腕の手首が捻挫したようだ。

痛みを顔にしかめたとき、自分に影が掛かった。ハッとして顔を上げると目の前には紅い鬼が腕組をして立っていた。

「あ……あ……」

後ずさるうとしたがすぐに手首の痛みにもた顔をしめて抱え込む。

鬼は無言でしゃがみ込むと、痛む手首を掴み上げ口を大きく開けた。悲鳴を上げる間もなく手首は鬼の口ですっぽり覆われた。

その時に口から見えた牙を見て怖くなり、反射的に強く瞼を閉じる。

鬼は牙を立てることもなく手首をもごもごと含むと、口から放しベロンと舐めた。

「どうだ？ マダ痛いかな？」

「え……」

鬼から放された手首を曲げてみる。痛みは感じられない。先ほどまでの痛みが嘘のようだ。信じられない。

しばらく驚いていたが、すぐに私は手首が治ったことと、鬼が治してくれたという事実戸惑った。

「飼っている人の子の怪我くらい簡単かな。今度から俺の言うことは最初から聞け」

すっと立ち上がり、私の腰に腕を回すとひょいと肩に担ぎ上げた。

視界がグルリと回る。

「今日はもういい。一眠りして、これからの事をもう一度よく考える」

あきれた口調で私に諭すように言い、襖を足で器用に開ける。

鬼が薄暗い廊下を歩き出すと先ほどの部屋から漏れる光が遠ざかっていく。それにつられて限界だった私の意識も次第に遠ざかっていく。

意識の端で鬼が何かを喋っているのが聞こえる。でも何を言っているのか確かめる前に私は意識を手放してしまった。

こうしてとても一日とは思えない長い時間に、私はようやく終わりを迎える事が出来たのだった。

次に目を覚ました時、私に一体何が待ち受けるんだろう。

せめて眠りにについている間は、穏やかな気持ちでいたいと切に願った。

第八怪 溜息茶雀

浅い眠りの中。しんとした時間帯。

古い扉が鳴るようなきいきいという子鬼の鳴き声に混じって聞こえる話し声。

『紅い……さま……しそびれ……』

『儀式は……失敗……』

『逃がし……と……言う事か？』

一体誰が話しているんだろう。何の話をしているんだろう。そう思いながらもまた眠りの渦に巻き込まれ、意識は沈んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

意識が浮上して、目を開ける。見慣れない天井と、そこを横切るいくつかの白い線。

一瞬どこだろうと思考をめぐらす。

……そうだ。

鬼と約束して、それで、私はこの世界に残って……

恐る恐る身体を起こす。どうやらいつの間にか失神して寝かされていたようで、着ていた着物も今は薄い生地 of 浴衣に変わっている。今まで自分が寝ていた小さめの敷布団には梅の模様。掛け布団には不気味なくらい白一色が広がっていた。

視線を布団から部屋全体に向ける。目の前には自分を囲む白い格子。握って強く揺するがビクともしない。

ふと遠くのほうで誰かの笑い声や悲鳴が聞こえた。

心なしか低い唸り声や何かを引きずるような音、三味線等の和楽器を鳴らして、お経のような唄を歌う声まで耳に入ってくる。

やだ、気味が悪い。

両腕で震える身体を抱きかかえる。

当たり前だけれど夢じゃないんだ。

おばあちゃんが昔話してくれた、物の怪の世界に今いるんだ。

失神する前の記憶が呼びおこされる。

友達に神社に鬼に妖怪にお風呂にお酌……。

色々なことが目まぐるしく起こりすぎて現実味が無い。かえってそれがより恐怖を煽る。

「怖い……」

誰に言うわけでもなく呟いて唇を噛む。

すると突然天井から駆け抜けるかのような足音が聞こえて、思わず裏返った変な悲鳴をあげると、心臓と一緒にになって飛び上がった。乱暴に内側から叩く心臓。激しく上下する胸をおさえて息を潜める。

天井の一部がゴトリと開いた。籠のすみに背中をおしつけて一心に天井を穴が開くほど見つめ続ける。

なんだろう。何が起きるんだろう。

瞬きもせず、目を向け続ける。やがて四角い闇の中から二つの小さな光が何度か瞬いたのを目にしてゴクリとつばを飲み込む。

風呂敷を抱えた子鬼が一匹、宙返りをしながら狭い闇から降りて

きた。きいきいと鳴きながら私を警戒するように一瞥し、風呂敷を畳の上に降ろす。

警戒したいのはむしろ私のほうだよ。と、心の中でばやくが、恐ろしい妖怪ではないことに幾らか緊張をといた。

「お目覚めになりましたかあ」

籠の近くの襖が開いたのを目の端でとらえ、さっと素早く目をやった先には、脱衣所にいた魚の人がそこに立っていた。相変わらずのそのそ歩いて籠の手前まで来ると、さっき天井から降りたばかりの子鬼から風呂敷を受け取り、濃い紫の風呂敷を丁寧に広げていく。中には真四角の桐箱が置かれていた。

あの箱はなんだろう。

興味ができてきて格子のそばによる私。

まじまじと見つめる私の目の前で箱の蓋が開かれ、魚さんが箱の中に水掻きのついた手を入れて何かを引き上げた。箱の中から白い袴と褐色に黒斑点の着物が次々と出てくる。

一体どんな仕組みなんだろう。興味津々にその様子を眺める。

「あのお……お名前はあ？」

「え……」

突然声をかけられ、思わず声を漏らす。

箱から目の前の暗い青に視線を移すと、相変わらず淀んだ目が見つめ返してくる。少しばかり居心地悪く感じて身じろぐが、黙っているわけにもいかないので「紗枝です」と名乗る。

その途端、魚も子鬼も目をカッと見開き、ぶるぶる震えだした。

「な、なんと……恐ろしい」

「恐ろしい？」

子鬼がきよろきよろと辺りを落ち着かない様子で見渡しながら、私に何か文句を言ってくる。そうはいつても私の耳には「きいきい」としか聞こえないので首を傾げるしかない。

私の名前がなんで恐ろしいんだろう。

きよとんとしている私に、魚さんが籠に近寄って手をバタつかせながら口を開け閉めして言った。

「そのような名前……おお、鬼様が？」

「え？ いえ……違います」

ワケが分からず、眉をひそめる。

魚さんが突然格子を勢いよく掴んできた。あれだけビクともしなかった格子がしなる。驚いて思わず後ろへ飛びのく私に魚さんは声を押し殺していった。

「宜しいですか……ワタクシはあ……その名を聞かなかったことにしますっ！ 良いですか!？」

「え？ ……ええ、分かりました」

目をぱちくりとさせながら、魚さんの剣幕におされて、ワケが分からないながらも何度か頷いた。

その様子に魚さんはほつと安堵の息を漏らし、脱力したようにずるずる格子に寄りかかった。

一体何だって言うのだろう？

「俺は聞いたがナァー」

言うが早かったか子鬼が『ギイー』という金切り声を上げた。魚さんも私もそれぞれ短く悲鳴を上げて飛び上がった。

一番むこうの襖には紅い影。手にはさっきまで籠の近くにいた緑の子鬼の頭を鷲掴みにしている。

いつの間に……。

驚いている私を妖しい紅が睨み、チラリと魚さんへと視線を滑らすと

「さあて……なにが聞こえた力ナァ。おい、その魚。言ってみろ」

気がつくと、いつの間にか籠のそばで、土下座して震える魚さんが目に映った。震えが格子を伝わって、私の格子に触れている肌に波紋のように響いた。

魚さん達は、ただ単に紅い鬼が怖くて震えているわけじゃない。

私がかいけないことを口にしてしまって、鬼の機嫌が悪くなったから二人とも怖がっているんだ。でも一体なんで？

「口がきけないわけじゃあ、ないだろう？」

「な、なにも聞いて……お、おおりません」

たたみかける鬼に震える魚の人。震えるたびに鱗が水面のようにキラキラと光る。魚さんの声には震えと怯えが混ざっていて、哀れな雰囲気より漂わせていた。

紅い鬼は歩を進め籠の手前までやってくる。緑の子鬼は観念したように手足をダラリと垂らして震えていた。見ていて痛々しい。

キロツと妖しい紅が私を捉える。その瞬間背筋に悪寒が走った。

「なあ、お前サン。お前はこいつ等に名乗ったの力？ 一体なぐんで名乗ったんだ？教えてくれない力ナア」

にいと口の端がつりあがる。そこから鋭い牙が覗く。

「あ、その……」

声を詰まらせ、目を泳がせる。なんて言えば良い？ 名乗ってないと嘘をつく？ダメだ。鬼は聞いていたみたいだから嘘はつけないだから怒っているんだろうし。

そういえば子鬼達は私の名前を聞いてひどく青ざめていたみたいだけれど、いけなかったのかな。でも他に名前なんて……。

「名を忘れたの力ナ？」

意地悪そうに笑う鬼。じんわりと額に汗が浮き出る。

口は笑っているけれど目が笑っていないとは、まさに今の鬼の様子そのものだ。状況は良くない。早くなんとかしないと。

焦ってもつれた紐のようになっていて頭の中心を必死で解くと、ふとある記憶がよぎる。

そういえば昨日、鬼に名前を付けられていた気がするけれど、もしかしてその名前？ なんて名前だっけ。

確か、鈴なんとか。えっと……鈴音？ そうだ、鈴音だ！

「あの、鈴音です」

上ずった声だけれど、きちんと鬼の耳に入るように少しばかり大きな声で答える。これで違った名前だったらどうしよう。それこそ逃げるしかない。ああ、けれども今は籠の中で逃げるに逃げられないし。

一人で焦っている私をよそに鬼は面白くないと言わんばかりに鼻

を鳴らして、今まで掴んでいた子鬼を放した。

子鬼は何かを叫びながら壁を伝い、四角い闇の中へ飛び込んで天井裏へと一目散に消えていった。

「おい、魚。お前も下がれ」

「は、ははあゝ」

時代劇で偉い人に頭を下げるお侍さんみたいな返事をする魚さん。鱗をキラキラと輝かせながらそそくさと直ぐ近くの襖から部屋を出て行った。鱗が光っていたのは汗が出ていたからなんだろうか。

残ったのは私と籠越しに睨んでくる紅い鬼。鬼は腕組をして仁王立ちし、無表情でいる。

……この鬼は何でこんなに不機嫌なんだろう。まったく見当がつかない。

つくとしたら名前なのだろうけれども、それすら怒る理由がよく分からない。

気まずいのと怖いのが絵の具のように混ざってひたすら俯く。

「危なかったナア 鈴音」

「え？」

「もしお前サンがもう一度違った名を言うもんなら、舌を切り落として塩漬けにでもしようかと思っただがナア」

「舌を!？」

慌てて両手で口を押さえて、舌を口の奥へ引っ込める。舌を切り落とされたりしたら死んじゃう!

鬼はニヤリ笑うとその場にいささか乱暴に座り、頬杖をする。たくましい胸元からみえる鎖骨が何故か妖艶に見えた。こんなに敵つい鬼なのに、そう見えるのは物の怪だからなんだろうか。

「良いか、鈴音。他の名前を二度と口にするなよ。人間の世界にいた時の話も一切無しだ」

ドスの利いた低い声でぴしゃりと私に言い放つ。

私は必死に頷く。ほかに出来ることも無いのでとにかく素直に頷いておく。

「よし。わかれば良い」

胸を反らし満足げに笑う鬼。とりあえず機嫌はよくなったようだ。

「そうれじゃあ、鈴音。お前さんはこれからは俺の言うことをよく聞いて、そうだな、しばらくは酌でもとっておけ。俺が呼んだらすぐに、ダ」

「は、はい」

嫌だと言えるわけがない。

取って喰われるより、塩漬けにされるよりずっとマシだ。

鬼はこの後も延々とあれをしろこれをしろと言い続け、一向にその紅い口がとまる気配はない。

怖さがある程度薄らいだ頃、鬼の話がいつになったら終わるのかと、そればかり考えてしまう。とにかく鬼の話が学校の校長先生並みに長いのだ。いや、それ以上かも。

最初は真面目に返事をしていた私だったが、いい加減疲れてきた。

集中力を切らさないよう奮闘する私とは裏腹に、鬼が自分の昔の武勇伝まで話し始めた。

その様子には気づかれないよう、こっそり小さくため息をついたのだった。

第九怪 赤く染まる

日の光とは違う明かりに顔を照らされ、目を開ける。

籠の向こうにある灯籠が、眠る前に小さくした灯を元の明るさ戻したようだ。

眠い目をこすって上体を起こす。今ので何回目の起床だったかな。一つ二つと指折り数えてほしい十二回目。

この部屋には窓も時計も無い。

なので今が朝か夜かの区別がつかないし、一日経過したのかも分からない。

でも鬼の話を聞く限りではこの世界は常に夜のようなので、昼か夜かを知るに限っては例え窓があったとしても意味は無いのかもしれない。

やや小さめの布団一式を籠の隅に片付け、薄い生地 of 浴衣からもう何度か着たことのある緋色の着物に着替える。未だにもたつくけれど、最初の頃に比べればマシになったものだ。鏡がないので、視点を変えて自分の目で確認する。一応、きちんと着れているみたい。ただ下着類を何も身につけていない為、心なしかスースーする。

この感覚はやっぱりまだ慣れないあと一人眩き、手ぐしで髪をといっていると子鬼が部屋に入ってきた。

その小さな両手で抱えている桶には、濡れた手拭いとクシが入っていて、子鬼がそれらを取り出すと、格子の間から私に手渡した。

私は受け取った冷たい手拭いで顔を拭き、クシで髪をとかす。それを格子の向こうからから眺めてじっと待つ緑の子鬼。その小さな身体なら無理をすれば入って来ること出来るのだろうけれど、どうやら紅い鬼から籠の中に入るなど言われているみたいだ。

「ありがとう」

お礼を言って手拭いとクシを返す。子鬼はそれを受け取ると小走りですぐ部屋から出て行った。

私はそれを見送り紅い鬼を待つ。

今日はきちんと来てくれるだろうか。本当なら顔を合わせなくてすむのなら大喜びするところなんだけれど、そもいかないうちが事情が出来たのだ。

廊下のほうから床がきしむ音がする。

それが次第に大きくなると襖が開かれ紅い大きな手が見えた。

「起きているカナ？」

苦手な鬼の瞳とは、やはり目を合わせることが出来ない。とりあえず軽く頭を下げておく。

部屋に入った鬼の手には懸盤^{かけばん}。その上には質素だけれどちゃんとした和食が並んでいる。

私が鬼に会わないと困る理由はこれ。私の全ての食事はこの鬼が握っているのだ。起きている間に二回。起床してから直ぐと、お酌をした後だ。

鬼は何度か私の食事を忘れた。

一昨日もお酌の後に食事を与えられないまま籠の中に戻され、昨日の就寝前になっても紅い鬼は私の前に現れなかった。

その間私は食事を与えられず、ずっと空腹と不安に襲われていた。動いていないとはいえ、起きている間は多少の緊張状態が続く。その上一食足りないのだから、なおの事お腹の減りが早かった。

「いやいや。すまなかつた力ナ。すっかり忘れていてナア」

鬼が懸盤を下ろし籠の鍵を開ける。

久しぶりの食事。やっとご飯にありつける。

すっかり餌付けされている自分に嫌悪感を感じるが、食べなければ飢え死にしまう。

死ぬのは嫌。鬼は怖いし嫌いだけれど、やっぱり酷い目に遭うのも嫌だった。

ふらつきながら籠から出ると、置かれたた食事の前に座り手を合わせる。懸盤の上には白いご飯に具のない味噌汁、焼き魚と漬物が並んでいた。

私が食べ始めると同時に子鬼が天井から降りてきて、手には薄い紫色の巻物を握っており、一度宙返りをすると思の上に着地した。紅い鬼は私に『構わず食べる』と合図し、子鬼から巻物を受け取るとするりと広げ、しばらく黙って眺めた。

私が食事を半分ほど食べ終えた頃、鬼が視線を巻物から外さずに口を開いた。

「ん……他には？　なにか言うことはナイカ？」

その言葉に子鬼は申し訳なさそうに首を左右に振る。紅い鬼は不機嫌に鼻を鳴らすと子鬼に巻物を投げた。

器用に子鬼がそれを空中で受け取ると、壁を這って天井裏へと戻っていった。

何かあったんだろうか。このところ、頻繁に何かを調べているみたいで子鬼が来るたびに『何かないか』と訊いている。前に見た夢も気になっていたせいで、根拠もないのに『友人達になにか関係があるのでは』と勘ぐってしまう。

しかしすぐに頭を左右に振ってその考えを否定した。

縁起でもない事を思い浮かべるのはよそう。無事に逃げたんだか

ら。だから私はここにいるんだから。

そう自分に言い聞かせて黙々とご飯を食べる。

「なあ、鈴音」

突然の呼びかけに思わずむせる。口を押さえながら咳き込み、胸を押さえながら汁を飲む。

鬼は気にせず言葉を続けた。

「まだ元の所へ帰りたいと思っているの力ナ？」

まだ軽く咳き込みながら、どう答えていいのか分からず目を泳がせた。

正直に『帰りたいたい』なんて言っただろうか。なにか引つ掛けるつもりなんだろうか。

答えに悩んで私が黙っていると、鬼は興味が失せた様でごろりと懸盤の向こうに寝そべった。

この状況にまたもやどうして良いのか分からずしばらく考えていたが、鬼が何も言わないので静かに食事を再開する。

「ごちそうさまでした」

両手を合わせて軽く頭を下げる。目の前の横たわっている鬼を盗み見るが先ほどから微動だにしない。

寝ているんだろうか。顔が懸盤に隠れてよく分からない。

確かめようかとも思ったがそんな勇氣はなく、正座して鬼が動くのを待った。

「鈴音」

どれくらい経ったんだろう。

鬼は相変わらず横たわったままの状態で、突然口を開いた。名前を呼ばれてビクツと肩を震わす。

鼓動が激しくなるのを感じて胸の辺りを手で強く握った。ゆつくりとした動きで上体を起こすと、鬼は私をまっすぐ見据えた。私は反射的に目を逸らし俯く。

「お前は俺の眼が恐ろしい様だなあ」

終えた食事を間に挟んで、向かい合う。

鬼は腕を伸ばすと手の甲で私の頬を撫でた。

「それで良い。お前は俺を畏れ、怯えていれば良い」

目を閉じてなされるがままにする。

鬼はそれを満足したように笑むと立ち上あがった。

「さあ鈴音、籠の中にお戻り」

籠の入り口を開けて手招きする。

今出たばかりなのに。心の中で不満を口にするが鬼に背中を押されて大人しく従う。

籠に入ると背後で鍵のしまる音が聞こえ、振り返ると格子の向こうに紅い鬼がこちらを向いて手を振った。

「俺はちよいと出かけてくる。お前はそこでいっ子にしてるんだ。帰ったら構ってやるからナ」

鬼が部屋から出て行くのを絶望にも似たような感覚で見送る。

私は一体いつまでこんな空虚な日々を続けることになるんだろう。鬼の気まぐれで食事を与えられ、籠から出され、お酌をひたすらする。それ以外何もない。

外にも出られないし、窓もない。自由に飲める水さえない。ひたすらせまい籠の中でずっと過ごす。

ため息を吐きながら畳まれた布団の上に腰掛け、ひざを抱えた。遠くから喧騒が聞こえてくる。子鬼たちが忙しく働いている音なんだろうか。

自分だけなんだか別の次元にいるみたいで無性に心細くなってまた溜息をつく。灯籠の色が柔らかな桃色から黄色い光へと変わった。部屋も照らしている光が変わったせいか、雰囲気を少し変えた気がする。

「……え!？」

ぎょつとして目を見張った。

自分の左手の色がすこしばかり違って見えたのだ。見間違いではないかと目を凝らしてよく見る。

右手と比べると、左手は灰色がかった桜色になっている。

どうして?なんで肌の色が……。

そう思つてを思い切り左の袖をまくり上げる。

うそ。肩までもが変色している。

突然の異変に、急に怖くなって立ち上がったが、すぐによるめいて転ぶ。痛みに顔をしかめると、次の瞬間また恐ろしい事実に気がついた。

「まさか……足が……弱つてる?」

籠に入れられ、お酌をして。今考えればずっと座りっぱなしだ。足が弱つていても無理もない話だった。

私は途端に焦った。

このままこんな生活をしていたらいずれ満足に歩けなくなる。そしたらどうなる？ 動けなくなったら私をあの手はどう扱う？ 考えるだけでも冷や汗が出た。早く何とかしないと……。

.....

「いやあ〜今日も上酒力ナ」

嬉しそうに笑う紅い鬼。隣にいるのは正反対な面持ちの私。あれから色々策を考えたものの、何一ついい案は浮かばなかった。

「どうした鈴音。暗い顔をして」

「いえ、なんでもないです」

差し出された盃にお酒を注ぐ。

お酌なんかしている場合じゃないのに。焦りと苛立ちで顔が歪むが鬼に悟られないよう顔を伏せる。

「そうかそうか。それならいいガ」

上機嫌に酒を飲み干す紅い鬼。

今日は随分、機嫌がいいようだ。その様子に少しほっとする。何度目かのお酌の時、鬼がいささか不機嫌だった事がある。

無表情でお酒のすすみも悪く、こちらをじいっと探るように見て一言も話さなかった。結局何も無かったのだが、あの時は本当に生きた心地がしなかった。

ふと、ある考えが浮かぶ。

考えといっても大変危ない考えなのだが、賭けてみる価値はありそうだと思う。

鬼は今この上なくらい機嫌がいい。そのうえ酔っている。今ここで上手く交渉して『外で少し歩きたい』とお願いし、許可が下りれば足腰が弱るのを防げるのではないのだろうか。

一応、この鬼は酔っていても記憶がとぶことはないみたいだから、後日『記憶に無い』という心配もない。

……約束を守るかどうかは別だけれど。

でも、何もしないでこのまま歩行不能な状態になるまで待つなんて絶対嫌だ。多少の危険を冒してでも動かないと！

横目で紅い鬼を盗み見ると、ごくりと生唾を飲み込む。

酒瓶を掴む手に力が入る。急に緊張してきて心臓が激しく鼓動してきた。

なんだか息苦しい。

「どうした？顔が赤いみたいダガ」

鬼がへらりと笑いながら盃を差し出す。

目は焦点が定まっておらず、危険な輝きは見えない。よし、言うのなら今だ！

「あの、お願いが……あるんですが」

「ほう、珍しいカナ。言ってみナ」

うん、鬼の反応は良い様だ。もう一度唾を飲み込む。

緊張で顔が火照り、手と顎がガクガクするが、一度息を吸い込ん

でぐつと震えを抑える。

「あの、そ、とに」

お酒を注ぎながらさりげなく言うつもりだったのだが、うわずって上手く言葉が出ない。お酒の入れ物と盃が小刻みにぶつかって何度も小さな音を立てる。

乱れそうな呼吸を悟られないよう、一度息を吐く。

そして『言っんだ！』と自分を叱咤して鬼に顔を向けた。

「あの　　っ」

言いかけて止まる。

顔を上げた先には、いつの間にかすぐ目の前に紅い鬼の顔があった。

口元は笑っているが爛々と輝く妖しい紅は笑っていない。

「あ、の……」

鬼と目が合った状態で固まる私。

紅い鬼のほうは特に何も言わずにじっと見返し、溢れそうになる盃で酒瓶をゆっくり起こす。

「あ……の……」

目を逸らしたいがまるで固定されているかのように動かせない。鬼は視線を外さないまま顔を離し、片方の眉を吊り上げ首をかしげる。

「なにカナ？　　お願いがあるんだロウ？」

「あ、あ……の」

「おう、なんだ」

「えっと……そ、とに……」

「さっさと言わないかな」

ああ、もう！

言っんだ、わたしっ……！

ぐっとお腹に力を入れて声を出す。

「あ、あの！外に！そ……と、と、トイレに行ってもっ……えっと
……い、イイデショウカ……」

「……」

「……」

しばらく沈黙が続いた。

鬼は珍しくきょとんとして目を何度か瞬かせた。一方私というのは隣の紅い鬼も驚くぐらい顔を真っ赤にさせていた。

「あー……っつと」

鬼はしばらく思考をめぐらすと何かを悟ったようで、手を叩いて子鬼を呼んだ。襖から遠慮がちに子鬼が顔を覗かしたのを確認すると

「子鬼について行きナ」

どこか拍子抜けした感じで私に言い、子鬼を指差した。

私は耳まで真っ赤になりながら鬼の言葉に黙ってうなずいた。

第十怪 紅と交渉

「はー……何をしてるんだろう。私」

薄暗い個室の壁にもたれかかりながら、ため息を盛大に吐く。
すごく疲れた。その割には何の成果もないのだから更にぐったりする。

緊張に耐えられなくなり咄嗟に出た言葉だったけれど、とりあえず怒らせなくて良かった。本当に良かった。

深呼吸を繰り返しているうちに気がつく。

そのまま『外に出たい』なんて言ってもあの紅い鬼のこと。すんなり出してはくれないんじゃないだろうか。んー、だけれど他に案なんて浮かばないし……。

仮に『足が弱っているから』と説明を付け加えて話したらどうなるのだろう。考えられる反応を思い浮かべる。

考えられる可能性その一。『なるほど。それもそうだな』と、案外あっさり承諾する。

これは楽観的過ぎると思う。まずなさそう。

その二。『知らない力ナ』と、放置。

これはあり得る。食事まで忘れるくらい興味がない時があるみたいだし案外これが一番可能性が高いんじゃないかな。

その三。『ぶわかめえ！それなら喰ってやるまでダア！』

……

……

特にいう事はないし、言いたくない。想像したくもないっ！

扉が激しく叩かれる音に我にかえる。

子鬼が『まだか』と催促しているみたいだ。

慌てて扉を開けると、行灯を持っている子鬼がいきいと文句を言う。手に持った行灯が揺れて光が踊る。

「ごめんなさい」と頭を下げると子鬼は鼻をふんと鳴らし歩き出した。

暗い長い廊下を子鬼と進む。子鬼が足元を照らしてくれているおかげで、暗くても何とか歩ける。行灯を持っていなければきっと真っ暗闇になるんだろうな。この廊下を何度も通ったが辺りを見回してもやはり窓らしいものは一つもない。

故に光がどこからも入らず、時折見かける鬼火と子鬼が持つ行灯以外、廊下を照らすものはなかった。窓がないのは屋敷の中心部だからなのだろうか。

お酌をしている部屋も時代劇に出てくるお城みたいに外を見渡せる部分があっても良さそうなのだけれど、生憎雨戸のような分厚い板が並んでいるだけで外は見えない。

私は籠に入られてから一度しか外を見ていなかった。ここに残ると決めてから間もなく通された露天風呂。漆黒の空にあの線香花火のようなぼんやりとした赤い月。綺麗に整った和庭園。あの光景には恐怖すら忘れた。

ちなみにあれ以降、お風呂はというと二畳ほどの狭い石畳の部屋に連れて行かれ、そこでお湯の入った大き目の桶と手拭いを渡され、それで身体を洗えといわれたのだった。文句を言うわけにもいかず、それですつと身体を洗っていた。

「あつ」

露天風呂という言葉を出して、ある案が頭に浮かんだ。

あの露天風呂からみえた庭園を褒めたおして「もう一度見たい」とお願いしてみよう。そう、ずばり「ほめ殺し」だ。

大変単純な作戦だけれど、昔祖母に聞いた話では、鬼は虚栄心が強いらしい。それを利用すればうまくいくかもしれない。

昔話だってこれに似たような話でうまくいった例は幾つかあるわけだし。

よし、そうと決まれば！ と拳を作り、見えてきた金色の襖に顔を向け、一人奮い立った。

-

.

-

「先ほどは失礼しました」と、手について頭を下げる。

それを紅い手がひらりと応えると手招きした。

鬼の反応に安堵しつつも、私は内心緊張しながらスツと鬼の隣に座り酒瓶を手に取った。

いつ、どうやって話をしようか。なんの脈絡が無いままいきなり褒めだしたらおかしいし……。頭の中でごちゃごちゃ考えていると、鬼の大きな手が酒瓶を持っている手を瓶ごと掴んできた。驚いて後ろにのけぞるが、肩に腕を回され阻まれる。

「酒はもういいかな」

酒瓶がするりと手から離れる。

紅い手が瓶を脇に置くと、空中を小さくなぎ払った。
何が起ころんだらうと部屋を不安げに見渡した。すると部屋がだんだん薄暗くなり、部屋の向こう側がハッキリと見えないぐらい明

るさが落ちた。薄暗い部屋の中ではつきり見えるのは対の妖しい紅のみ。

「鈴音。お前さん、さっきは違う話をしようとしていたんじゃない力？」

何の前触れも無くかけられた言葉にぎくりとする。

急激に上がる心拍数。そんな自分に落ち着けと言い聞かせ、首を振る。

「いえ、そんなことないです。全然、そんな」

「そおかー。いや、美味しい酒を飲んで気分がいいもんだから、せっかく聞いてやろうかと思っただがナァー。いやいや、そりや残念だ」

言葉をさえぎり鬼がふうーと息を吐く。心なしか鬼の吐いた息が煙草の紫煙にも見える。

鬼の言葉に一瞬思考が止まり、頭の中が真っ白になった。見え透いた鬼の態度にも関わらず、何故か私は慌てて口を開いてしまった。

「あ、あの、ただ、外に出たくて」

「なんだ、やっぱり違うじゃない力」

またもやさえぎられた言葉にぐつと声を詰まらせる。それをニヤリと見て笑う鬼。今度もまたふうーと勢い良く息を吐く。

馬鹿だ。本当に私は馬鹿だ。

自分の単純さ……というか馬鹿さを呪い、ギリりと奥歯をかみ締

める。

「ほお、そうか。外にでたい力」

肩を抱く腕に力が入り、鬼のほうに身体を寄せられる。

鼻に癖のある香りがまとわりつく。何か吸っているんだろうか。激しく鼓動する心臓を鬼に気づかれまいと、鬼と自分の間に腕を入れる。

「な〜んで外に出たい？ 何か気になる事でもあるの力ナ？」

「あ、いえ。ただ籠の中にいてばかりでは、足が弱ったり」

「足が弱ってるの力？」

きょろつと紅い目が面白そうに私を眺めるのを見て、慌てて言葉を付け足す。

「い、息も詰まるんです。何もすることがないので。だから、ほんの少しでもいいから外を歩きたいんです。外がダメならお屋敷の中でも構わないです」

早口で訴え、鬼の返事を待った。

鬼は向こうの闇を見つめてしばし考えると、両の口端をにいつとつり上げた。それを見て背中に寒気を覚えた。ぶるつと身震いする。

「そうだなあ〜。聞いてやれないこともないが、ただ聞いてやるのも詰まらんナア」

そう言って私の耳元に顔を寄せてくると、ひっそりと声を潜めて

囁いた。

「どうだ？　これから少しの間、お前サンが身動き一つしなかったら籠の出入りを自由にしてやるというのは？」

だらしなく開けている懷に手をつ込み、いつか見た青い砂時計を取り出すと、くると空中で一回転させる。

『少しの間動くな』って？

いかにも怪しい。むしろ怪しさしか感じない。さすがの私もこの条件に眉を寄せた。

「あの、『少しの間』というのはどれくらいですか？」

「ん〜」と少し唸り

「茶を一杯飲むくらいだな、大体。別に無理強いはないゾ？やりたくないなら、それはそれで構わんヨ」

今度は『お茶を一杯飲むくらい』だって？　はつきり何分とか何秒とか言ってくれないの？

その事を聞こうとしたが、鬼はそっぽを向いて『返事はマダか』という雰囲気を作っている。まだ一つしか質問していないのに。

どうしようかと悩んだ挙句、この疑問に対する答えで決めることにした。

「私がじっとしている間、何をするんですか？痛い目に遭わせるんですか？」

「また質問か。まあ、手は上げないカナ。そんな色気のないことはシナイ。もう問いには答えんゾ」

とりあえず乱暴されることはないみたい。それでも不安が完全に払拭されたわけではないのだけれど。

紫煙の息を思い切り吐くと鬼が私を見下ろした。

「どうする？　してみるか？　それともしないか？」

「……し、しますっ！」

考えてたって仕方がない！せつかくのチャンスだもの。

奮い立ち、挑むように鬼を見上げる。そこにはどこか満足げな紅い鬼の顔があった。

第十一怪 灰梅に染まる

自分の足元を紅い鬼火が囲み、円を作る。

円の中には私。円の外には青い砂時計を持った紅い鬼。

「よし、じゃあ始めるゾ」

鬼がクルリと砂時計をひっくり返す。

細かい真つ青な砂が上から下へとこぼれ始めるのと比例して、私の心臓の脈も次第に早足になる。

円の近くに砂時計を置き、鬼が二、三步後退して小さく手をなぎ払う。まるで墨汁が水に零れたみたいに闇が広がり、辺りは真つ暗になった。

紅い鬼も襖も天井も闇に溶け込み、見えなくなる。足元の鬼火だけが目の端でぼんやりと光っているのが見えるだけだ。

両脇に下げた手でギュツと着物を握り締める。

これさえ耐えれば籠の自由を獲得できるんだ。がんばらないと。

闇の向こうで何か動くのが見えた。目を凝らしてよく見るとチラチラと光る、鶏のようなものが見える。首を前後に動かしてこちらへくる。

なんだかおかしい。輪郭がぼやけているせいかと思ったが、全体がハッキリ分かる頃に、ようやく違和感の原因が分かった。鶏はこちらに近づくとつれてどんどん大きくなり、目の前にきた時にはダチョウほどの大きさになっていた。

トサカはかすんだ赤で、目は人の目玉みたいにギョロギョロ動く。くすんだ茶色の羽を盛んに羽ばたかせて、紫色の長い尾羽が畳の上を引きずっていた。

もうこれは巨大な鶏というよりも怪鳥にしか見えない。

見たこともない恐ろしい怪鳥を前に、足が震えるのを我慢しながら息を呑む。

鶏が目と鼻の先まで顔を寄せ、私をひと睨みした後、つんざくような鳴き声をあげた。老婆が断末魔の叫び声を挙げるような金切り声が辺りに響く。耳を塞ぎたいのを我慢してぐっと耐える。しかし頭の芯が叩かれた鐘のように震え、お腹の中が滅茶苦茶に掻き回されたような変な感覚を覚える。

き、気持悪い！頭が痛い！

普段の自分ならすぐさま降参しているところだ。けれども、今は自由が掛かっているのだ。すぐさま音を上げる訳にはいかなかった。

やっと鶏が叫ぶのをやめると、突然何の前触れもなく、鶏が紅く燃え出した。そしてグルグルと私の周りを旋回してひと鳴きし、顔すれすれのところを横切っていく。熱いものが耳を掠めて声を上げそつになるが、それもなんとか我慢した。

通り過ぎた鶏は後ろからもう一度叫び声をあげながら横切ると、闇に消えていった。辺りは先ほどまでの騒音がまるで嘘のように静かになる。

ちらつと足元の砂時計を盗み見る。砂はさらさらと下へ零れて、上の砂は中心に穴をあけるほどになっていた。

あともう少し。あともう少しだ！

思いのほか早く終わりそうだと気を抜いたその時。視線を目の前に戻すと紅い鬼が不敵に笑って目の前に立っていた。

「ほう、なかなかやるナア。意外と耐えるじゃナイカ」

嬉しそつに目を細める鬼を目にして身構える。

今度はなにがくるのかな。砂時計を見た感じ、あと十数秒。本当

にあと少し！

興奮のあまり酸欠状態になる。頭がくらくらして、全身が脈打っているのを感じる。

きつと今、自分の顔は興奮しているせいでトマトみたいに赤くなっているんだろう。頬が火照っているのがよく分かる。

突然何の前触れもなく鬼がガシリと顎を掴んできた。

一気に身体が強張る。乱暴はしないんじゃない？ と口の代わりに心の中で悲鳴をあげる。

妖しい紅がまた三日月のように細くなると、鳶色の顔を近づけてきた。口の端から見える牙に『食べられる！』と恐怖し、ギョツと目をかたく閉じた。

口が何かでふさがれた。

一瞬、窒息すると慌てたが、鼻で息をすることを思い出し自分を落착かせる。

次に唇の間になにか生暖かいぬめりとした物が強引に入り込んできた。両手で拳を作って暫く耐えたが、それが齒列を舐めたのでたまらず目を開けた。

目の前には鳶色とその上を走る朱色の線があるだけ。

他には何も映らず呆然とする。

この光景は一体何？ 真っ白な一瞬の後、唇の裏に何かが食い込んだ。

そこで初めて自分の身に何が起こったのか分かった。

そう、鬼に口付けされただけでなく、唇を噛まれたのである。

過去今まで出したことも無いような大絶叫を上げる。

反射的に挙げた手を、鬼は「おっと」と言ってヒラリ避けた。

私は肩で息をしながら口を手で押さえた。

何か言いたいのだけれど言葉にならない。何が起きたかもよく分からない。

ただひどく、ショックなことが起こったのは確かだ。その場にヘタリと座り込み、円からはみ出る。

鬼はそんな私を見てどこか子馬鹿にした口調で言った。

「大げさだナァ。甘噛みしたダケじゃあナイ力。痛くなかったろう？」

『そういう問題じゃありませんっ！』と、叫びたかったが、やはり口元が震えて声にはならない。心臓がばくばくいってあまりの激しさに吐き気まで覚える。

「惜しかったナァ。あと少しばかり時間が残っていたみたいだ。百歩譲って円から出なければ良い事にしようとしたんだが、それもダメみたいだな。残念デシタ」

紅い手が砂時計を拾い上げ懷に閉まった。

ようやく呼吸の乱れが治まり始めた時、鬼の馬鹿にした物言いにカチンときて睨みつけると『手を出さないって言ったじゃない！』と、非難の声を上げる。

鬼はそんな私にひょいと肩をすくめて

「いやいや。『手をあげない』とは言ったが『手を出さない』とは言っていないゾ。ま、どっちもあんまり違わないガナ。それに乱暴はしていないだろう？」

「噛んだじゃない！ 嘘つき！ 鬼！ 悪魔！」

「そりゃ、光荣カナ」

今思いつく限りの悪口をありったけ言っただけだが、紅い鬼はどこ吹く風。いつものニヤニヤした笑みを浮かべながら腕組する。

「大体なんでそんなに騒ぐ？ 喰われるよりかはマシだろうに。なんだ？ もしかして口付けが初めてだったカナ？ なら、今度の飯は赤飯ダナ」

「なっ……なっ……！」

今の言葉に完全に恐怖と怒りの数値が逆転した。すつくと立ち上がり、鬼のほうへとツカツカ近寄る。そして思い切り平手で鬼の頬を打とうと手を振り上げたが、いとも簡単にその手を掴まれる。

「よしとけ。逆にまた怪我をするゾ」

「放してっ」

紅い手から逃れようと、掴まれていないほうの手で、鬼のゴツゴツした手を引き剥がそうとする。鬼はかまわず私の腕を引っ張り自分のほうへ引き寄せると、空いている手で顎をつかみ、顔を上げさせる。

「お前は本当に、活きの良い雛鳥カナ」

深紅の瞳が妖しく光る。目を細め、獲物でも見るかのような残酷な眼を向けてくる。

私は一瞬にしてその場に縫い付けられた。

恐怖に駆られたのではなく、鬼の目に魅せられ、視線を外せなくなっただ。

鮮やかな妖しくも美しい鬼の瞳。炎のように揺らめく紅。鳶色の肌を朱色の幾何学模様が広がっている。その光景がまた目の前に迫ってくる。

「いい子ダ」

ただ呆然と眺め、目と鼻の先まで来た時、紅の瞳が閉じた。その瞬間私は我に返ったと同時に、自由が利く手で鬼の頬を打った。

辺りに小気味良い音が響く。

「い、痛っ！」

と言ったのは私だった。

相手の頬に平手を打ち付けた時に、鬼の牙で指を切ったのだ。薬指から鮮血がこぼれる。綺麗にスッパリ切れたみたいで、ずきずき痛む。涙目になりながら指を押さえていると、はあと呆れた溜め息がすぐそばで聞こえた。キッと溜め息がした方へ目を向ける。あれだけ思い切り引っ叩いたのにケロリとしている。うう、なんだか悔しい。

「だから言っただろう。どれ、見せてみる」

「いいですっ」

伸ばされた手から隠すように指を引っ込める。
また何かされたんじゃない、堪らない。

「おお、そうかい。鬼の牙でつけた傷はそこらのとは違ってなかなか塞がらない。甘く見るなヨ。小さな傷でも放って置けば、どここ血が流れ続ける。失血死しても俺は知らんゾ」

し、失血死する？

確かに言われてみれば出血量が多い気もする。でも今までこんなに深く切った事がないので、多いのか少ないのか見当がつかない。

「おい、濡れるぞ」

肘まで血が垂れてきたのを見て、鬼が袖をまくった。そして何かに気がついたように眉をピクツと動かす。不思議に思っ鬼の表情を読み取るうとした時、紅い目には私の灰がかった色をした左腕が映っていた。私は見せてはいけないものを見せてしまった気がして、慌てて袖を下げようとした。

「よせ。血がつく」

鬼は私の腕をひっぱり、肘まで垂れた血を舐めあげ、切れた指を口に含んだ。その光景に嫌悪感を感じて目を背ける。そして痛みが引いた頃、鬼は指を放した。

しげしげと放された薬指を眺める。まだ指が湿っている気がして無意識に渋い顔をしてしまう。

後で手を洗わないと……。

感謝そっちの気で心の中でかたく誓う私。ふと、鬼が左腕をじっと見ているのに気がつき、疑問を思い出して腕をかざして訊いた。

「あの、これは一体なんですか？ 病気なの？」

「……いや。ここに来た人間がよくなる変化ダ。この世界いるに限

つては特に問題はナイ。肌の色が変わるだけ」

一瞬何か考えたように見えたが、すぐにいつもの軽い口調で言った。特に問題がないのなら別にいいけれど、でも、あまり良い色とは言えない。血色が悪すぎて気持ち悪い。

鬼が手を三回鳴らすと部屋から闇が波のように引いて、元の明るさに戻っていく。気がつけば足元にあった鬼火も消えていた。

「さて、鈴音。そろそろ籠に戻ろうか。飯の用意もするからナ」

「……」

私は口をへの字にして、顔いっぱい不満を表した。

まったく、鬼に口付けされるわ、籠には出れないわで散々だ。まだ怒りの虫が治まらない！ 良い事と言えばご飯にありつけたくらいだ！

「あつ、そうだ」と、ご飯という単語で思い出して声を出す。

「ん？ 何力ナ？」

「ご飯は、絶対絶対お赤飯は勘弁して下さい」

第十二怪 見えた櫛染（はじめ）

紅い鬼が出て行った後、灯籠の灯が小さくなる。

うつすらと物の輪郭が見えるくらいの明るさの中、浴衣に着替えて布団を敷く。梅が小さく咲き誇る敷布団に身体を横たえ、ふうと息を吐いた。

さっきまで怯えを忘れて、鬼と話をしていたのが嘘のようだ。なんだか不思議な、もやもやとした物が先ほどから胸の辺りで燻ぶっている。

結局籠の出入りも自由にならなかった上に、鬼に口付けされた。

しかも初めてののを、だ。

思い出すと腹立たしくなつて意味がないのに手で口を何度も拭い、それでも何か足りなくて布団にパンチを繰り返す。掛け布団はボフツと殴られたところをへこませる。

まったく！ 等と言って、目を閉じて頭まですっぱり布団をかぶると、またふうと息を吐いた。

……この世界に居続けるのなら、積極的に鬼と仲良くすべきなのかな。気まぐれな鬼だからいつ機嫌が悪くなるか分からないし、殺されてしまうより、喰われてしまうより、息が詰まる事を良しとして、鬼の顔色をみて従順に大人しくしているべきなんだろうか。

今回だって、鬼の機嫌が悪ければ弄り殺されていたかもしれないのに。

今思えばよくあんな口がきけたものだ。

それにしても静か……。

いつもだったら子鬼達の鳴き声や話し声が聞こえてくるのに。

そう、いつもなら布団に入りしばらくすると、喧騒が消えて、子

鬼達の鳴き声に紛れてひそひそ話しが聞こえてくるのだが今は何の音も聞こえない。

なんだか寝苦しくて寝返りを打つ。いやに落ち着かない。

体は疲れているのに、頭が妙に冴えている。

嫌な感じだなと思ったその時、なんだかカサカサという微かな音が耳に入った。

天井から、籠の向こうの畳から、何かが這うような音が小さく聞こえた。聞き間違えかと思い耳をそばだてる。

……

うつん、聞き間違えなんかじゃ無い。

やっぱり何かいる！しかも複数だ！

身の危険を感じて上体を起こそうと、頭から被った布団をどけた時だった。いきなり粘着質のある何かが目を覆うようにかぶさって来た。

反射的に目を閉じたのでその何かが直接目に触れることは無かったが、突然のことに頭が混乱し、手足をバタバタさせる。

叫び声を上げようとしたが、喉元に先の尖った物を突きつけられた感覚を覚え、慌てて口を閉じる。気がつけば身体のアちこちにも同じ感覚があった。

微かに動いただけでも鋭い何かが肌に食い込む。

身動きが取れない！

やだ……どうしよう！

だ、誰なんだろう？ 何をしようとしてるんだろう！？

小さく震えていると、籠に何かがぶつかる音がする。

その音に合わせて体を押さえている尖った物も動いている。

何者かが籠の外から私を刃物で押さえつけているんだろうか。

だとしても、なんの為に？

体を横向きにされる。そして刃物が首の後ろに入り込むと、グイッとき込み込むように襟を引っ張る。次に胸元を開けられ、両袖もまくり上げ、裾も上げられる。

今は恥ずかしさよりも恐怖のほうが上まわり歯がガチガチ鳴った。一体何がしたいんだろう。もしかして何かを探しているんだろうか。

気がつくと、さっき聞いた這うような音が次第に近くなり、自分を囲むように四方から聞こえてくる。時折、その音に混じって『ギチギチ』という歯軋りするような音が聞こえてくる。

「痛つ　　！！」

何かが一斉に私の体に噛み付いた。全身に激痛が走る。思わず叫び声を上げたが喉に刃が食い込んで声を詰まらせた。

呼吸が乱れ、息も絶え絶えになり、激しく胸を上下させている間にも痛みと共に何かをすする様な音が聞こえてくる。

なんとか逃れられないかと体を捻ろうとすると、噛まれた所から痺れと這うような痛みが広がってきた。それが全身に蔓延すると、自分の口から声にならない悲鳴が上がる。

体が、頭が痛い！　胸が苦しい！　吐き気がする！

痛みに耐え切れなくなり、声を上げようとすれば刃が喉に食い込み、噛み付く何かを振り払おうと身動きすれば、全身に刃が突き立てられる。まさに地獄の往復だった。私はひたすら悶え続けた。

一体どれくらい経ったんだろうか。

私は精も根も尽き果て、痛みを感じても指一つ動かせなくなつて

いた。口からは『うう』という呻き声しか出てこない。

顔の表面を刃が撫でると視界を遮っていた物を剥ぎ取った。重いまぶたを上げるが、見えた景色は既に霞んでいた。黒い星が散りばめられ薄暗い部屋がより一層暗く見える。

その霞んだ視界の半分を占領している大きな二つの丸いものが見える。くすんだ黄色い玉が二つ、闇の中からこちらを睨んでいる。でもすぐにその光景も黒い星で埋め尽くされていく。

もう、何も見えない。私は死ぬんだ。

あっけなく訳も分からないまま死んでいくんだ。

いつしか身体中の力が抜け、唇まで痺れ、最後には呼吸も止まってしまった。

辺りに残るのは私をむさぼる音だけだった。

.....

闇の中に横たわる身体。

肌はどす黒い紫で覆われ、半分開いている目は何も見てはいない。

これならあと少しもすれば死に至るだろう。

もう死んだも同然。

噂通りなら、これで紅い鬼も動くだろう。

そしたらあの目障りな奴らを殲滅してくれるに違いない。

長年の夢もこれで叶いそうだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

もう遠くなった耳に何か大きなものが天井へと消えていく音が聞こえる。

残るのは死を目前にした私と、それをむさぼる何か達。

目には何も映らないし、もう痛みも感じない。耳もほとんど聞こえない。

死ぬってこういう感じだったんだ。

色々やりたい事はあったけれど仕方がない。

両親には悪いけれど、友達を救えて死ぬのなら……

……

……………

でも私が死んだら契約は無効になっちゃうのかな。

そしたら友達みんな連れ戻されちゃうのかな。

意地悪な鬼だから何を思いつくか分からないし。

しかも最初で最後のキスが鬼なんて嫌だ。

最後ぐらい大好きな人になりたい。

というより、せめて人間が良いっ！

こんな所で死ぬなんて冗談じゃないっ！

自分の中で何かがはじけ、ギリツと歯を食いしばった。すると口の中がほんのり熱くなっているのに気がつく。痺れる舌で熱い部分を舐めてみる。どうやら唇の裏から熱が出ているらしい。次第に熱くなってくる。

熱が口いっぱいに広がると、それが喉を通り四肢に流れ、やがて体中に広がり、ボツと発火する音がしたかと思うと、女性のような悲鳴がいくつも重なって部屋中に響いた。

布団や畳の上に小さな影がいくつも転げ回る。

突然、襖が蹴破られた。耳に入ってきたのは複数の子鬼の鳴き声。雄たけびを上げながら子鬼達が次から次へと部屋に入り、棒のようなもので影を叩き始めるのが聞こえる。

「派手にやられたナア」

少し前に聞いたばかりの紅い声。

騒音の中、静かな音が異様に耳に響く。
ゆっくりゆっくり近づいてくる足音。

「可哀相になあ、鈴音え」

足音が耳元で止まると、無骨な手の甲で頬を撫でられる。

目を見開くが何も見えない。

今のは私には肌の微かな感覚と耳から入る音だけが、今の状況を教えてくれるみたいだ。大木のような硬くてがっしりとした鬼の腕が膝の裏と肩に回ると、一気に浮上した感覚を覚える。下の方から子鬼達が雄たけびを上げ、何かが悲鳴をあげる音が聞こえる。

「お前さんたち、ほどほどにしとけヨ。後片付けは任せたからな」

鬼の声に子鬼の威勢のいい返事が返ってくる。

その鳴き声にはどこか嬉々とした物が混じっているかのように聞こえた。

第十三怪 紺碧を飲む

視界いっぱい埋め尽くされていた黒い星がようやく取り除かれてきたようで、視界中央に薄暗い木の天井が映る。多少ぼやけてはいるが、まったく見えないワケではない状態まで、なんとか視力が回復してきたみたいだ。

起き上がろうと身体に力を入れる。しかし金縛りにあつたみたいに指先すら動かない。鈍い感覚の中、目を足元へ向けると、自分が呼吸するたびに布団が上下しているのが見える。

ここはどこだろう。

出来る範囲内で辺りを見回す。

ただっ広い畳の間に、見たことのない虎の襖に鷹の掛け軸。他には何もなく、殺風景だ。どうやら籠の中ではない、どこか別の部屋で寝かされているようだ。

「生きてる……」

私はどこか他人事のように呟いた。

頭がぼうつとして少し胸が苦しく感じるが、あんな目に遭ったのにも関わらず、こうして穏やかに息をしているのが信じられなかった。

見たわけではないのに空想上の化け物が自分に喰らいつついる姿を浮かべてぶるつと震える。

私は何で襲われたんだろう？ 何に襲われたんだろう？

鬼にばかり恐怖していたが、他の何かに襲われるだなんて、まったく思ってもいなかった。

すぐそばの襖が開かれる音がする。微かに動く頭を音のしたほうへずらすと、紅い筋肉質な足が見えた。大股で近付き、鬼が私を覗

き込んできた。

「おお、だいぶ良くなったみたいダナ」

鬼はドカツとその場に腰を下ろすと、あぐらをかいた。相変わらず口には笑みを浮かべている。

何度か目を瞬たいて、鬼の顔を見る。

深紅の瞳は穏やかで鳶色に走る朱の模様が今は波紋のように見える。

しばらく見詰めても恐怖を感じない。放心したみたいに心が何に對しても反応しないようで、なんだか胸が空っぽになったみたいだ。鬼の大きな紅い手が額に触れる。いつも熱いと感じていた手の平は今ではほんのりと暖かい。

「少しばかり熱があるようだナ。鬼火の後遺症だろう。じきに良くなる」

「……鬼火？」

「お前に仕込んだ俺の鬼火ダ」

「仕、込んだ？」

何のことだろうと動くはずも無い首をかしげる。

ああ、だけれど、思い当たることが一つある。

……思い出したくもないけれど。

鬼と籠の自由をかけた勝負をしたときに、唇の裏を鬼に噛まれていた。おそらくその時に仕込まれたんだ。

実際何かに襲われていたとき、そこが熱くなって私を襲っていた

何かが、悲鳴を上げていた。そっか、あれは鬼火だったんだ。

「私は……どうなったの？何かに襲われたの？」

「ああ」

「誰に襲われたの？」

「ん、目星はついたかな」

私は目を閉じて、なんとなく目を覚ました時から抱いていた考えを口にするかどうか迷った。金魚のように口を何度か開け閉めした後、おもむろに目を開けて鬼に視線を戻した。

「あの、もしかして、こうなる事が分かっていたの？
分かっていたから、だから鬼火を私に与えたの？」

鬼はひとりと私を揺れる紅で見つめ、黙った。

そして一息ついて「そうだ」と頷いた。

両目で鬼の表情を探るように見詰める。

相変わらず笑ってはいるがその表情はどこか白々しい。

別に鬼に何かを期待していたわけではないが、ひどくつらい感情が沸き起こった。

なんというか、喉の奥が詰まって、そこからドクドク心臓の鼓動が直接鳴り響いているような……胸がちぎれるような苦しい感じ。
今まで鬼のせいで散々ひどい目に遭って来たけれど、こんなふうに仕組まれて危うく殺されかけるだなんて思ってもみなかったし、ここまでこんなひどい仕打ちを受けるだなんてやっぱり思ってた。なかった。

やっぱりここは物の怪の世界で、鬼は鬼なんだ。

「鈴音。そう泣くな」

鬼が私の目元をなぞり、離れた爪が濡れているのを見て、自分が泣いているのを初めて知った。

それを呆然と眺めている私を爪を舐めて鬼は笑った。

「人間は弱いナァ」。命を落としたわけでも手足をもがれたわけでもないのに、メソメソ泣くのか。忙しいヤツ」

嘲笑の声に感傷的なもやもやしたものが少し引つ込む。多少ムツとしたので、首を鬼のいない方へ思い切り向けようかと思っただが、生憎まだ体の自由が利かないので目だけを動かす。

言い返さないのかと目には映らないところから声が聞こえたけれど無視した。

「まあ、完治するまで大人しくしてれば良い。しばらくはここを使え。籠の部屋は血と毒で汚れて使い物にならないからナァ」

鬼の言葉に籠の光景が容易に想像できてゾツとした。

鼻につく血の香りと異臭がまた匂ってきた気がして軽く吐き気を覚える。

嫌なことを思い出させないでと呻いた私に鬼はまたしても笑うだけだった。

「そうだ鈴音。この薬を飲め」

よれた着物の裾から何かを掴み、私の目の前に差し出した。

突然視界に現れた鬼の手にぎよっとしつつも、鋭い爪先でつままれた何かを凝視する。晴天の空のような色をした丸い粒が三つ、

宝石のように煌いていた。

「これを飲めば体に残る毒気が完全に消える。飲め」

「まだ体に毒が残っているの？」

「蜘蛛の毒はしつこいからナア。鬼の俺でも吸いきれなんだ。さあ、いゝ子だからお飲み」

「私、蜘蛛に襲われたの？」

ああうるさいと言わんばかりに、物の怪の割には整った眉を寄せると、私の口の中に粒を素早く押し込んだ。

「ガタガタ言っていないでさっさと飲め」

まだ二回しか質問してない！ と抗議の声を上げようとするが、鬼の太い指が猿ぐつわと同じ効果を發揮していて、むぐむぐという変な音しか口から出てこない。

何度かむせて、ようやく小さな粒を飲み込んだ。

鬼が指を突っ込まなければもっと簡単に飲み込めたのではないかと思ったが、妙にぐつたりとしてしまい言うのをやめた。

くあつと大きな紅い口が開き、気の抜けた声が漏れたの耳にしてそこに視線をなげる。

「さあて、俺はそろそろ行こうかね」

片膝を立てておもむろに立ち上がり、うんと伸びをすると、紅い体から小気味よいポキポキという音が鳴った。そして首をぐるりと回しながら鬼は言った。

「休んでいる間は暇だろうから、子鬼を遣わしてやろう。それで退屈しのぎでもしてれば良い。用件もそれに言え」

大またで歩き、襖をいつものように足で開ける。

行儀が悪いなあと顔をしかめる私に、何か思い出したようで肩越しに細めた紅を私へ投げると

「ああ、そうそう。」

お前サン、外に出たいだなんて言っていたが、外にはお前を襲ったような奴等がウヨウヨいるゾ？

これを良い機会に考えを改めたほうが良いかな」

「え？」

素直にうなずきかけるが、何かひっかかりを覚えて止める。

今聞いた言葉を何度も頭の中で繰り返し、ある考えが浮かんだと同時に自分の顔が青ざめた。

「まさか……だから？」

「さあゝナアゝ」

曖昧な返事でじゃあなと紅い手がヒラリと舞い、妖しい紅を最後に襖の向こうに消えいく。

私が外に出たいなんて言ったから、襲われるのを知っていて黙っていたって事？

外に出たいだなんて二度と思わないように？
たったそれだけの為に？

私は鬼が去った後も

馬鹿みたいに口を開けて呆然とするしかなかった。

第十四怪 緑の子鬼の紙芝居

目の前の子鬼が手振り身振りで

時折拳をふるってひたすら熱弁している。

けれども、どう聞いても『きいきい』という古いドアが鳴るような鳴き声しか聞こえなくて、ただただ苦笑いするしかない。

「きい！」

真面目に聞け！と言っているのだろう。

か細い緑の指をむけられ、やれやれと姿勢を正す。

あのお、そろそろ足痺れてきたんですけれど。

紅い鬼に命じられて小さな一本角の緑の子鬼がやってきたのは大
体今から一時間くらい前。

暇だろうからと、何かを仕切りに話してくれているみたいなんだ
けれど、何を言っているのかさっぱり分からない。

もう良いよ、ありがとう。

そう言っても帰ってはくれず、子鬼が所狭しと跳ね回ったり、一
人ちゃんばらを演じて見せたり、落語のような真似をしたりと忙し
くしている。

ため息をして視線を逸らす様なら盛大に金切り声で責められる。

ちよつと前には『よよよ』と泣き崩れて掛け布団の隅っこで涙を
拭いたかと思ったら、突然大音量で泣き出したのだ。

慌てふためいて『ごめん』と謝ったが声は大きくなる一方。

しまいには他の子鬼まで何事だと天井から降ってきて、なぜか私
が怒られたのだった。

「あ、あのね」

高いトーンで歌を歌いだした子鬼は、私が声をかけた途端に低い声に変え、両肩を落として睨んできた。

今が良いところだったのに！ 足を鳴らして抗議するその様子に、まあまあと両手を振ってなだめる。

「あのね、さつきから言おうと思っていただけで、私、あなた達の言葉が分からないの。だから、無理してお話したりして付き合ってくれなくて大丈夫だよ」

本当はもっと早く言いたかったのだが、なかなかタイミングが合わず言いそびれていた。ということも付け足しておく。

子鬼は腕組し小首をひねる。そして一人ちゃんばらで使っていた細い棒を私に投げ、自分は小さな両手を熊みたいに構えて唸った。小さい子が戦いごっこをやるう！ と誘っているように見えて思わず噴出しそうになる。

そんな私を見て怪訝な顔を向ける子鬼に笑いをかみ殺しながら言った。

「ねえ、それよりもこの世界のことを分かる本とかないかな？ 今いるこの世界のことを、もっと良く知りたいの」

あの紅い鬼は何か隠している。

私には知られたくないことを。

外に出したくないのも、元の世界の話を禁止するのもきつとそれが絡んでいるんだと思う。

もちろん紅い鬼の単なる嫌がらせかもしれないし、全然別の事情でそうするのもかもしれないけれど。

それでも何も知らないでいるよりも、知っておいたほうがいざというときに役に立つはず。

今のところ分かっているのは『名前』が重要ってこと。

他の鬼達の様子を見たところ、名前がきつと鍵になっているに違いない。

とにかくまずはこの世界のことをもつと知らないと、何も分からない気がする。

「別に本でなくてもいいんだけど。あ、本って分かる？ 巻物とか、こう、紙に書いているものなんだけど」

この物の怪の世界では時代劇のような物ばかりで、近代的なものは何も見えていなかった。なので『本』という言葉が通用するのかどうかも分からない。

そつえば、紅い鬼に『トイレ』といった時もきょとんとしたたよね。

まあ、ただ呆れていたつていうこともあるんだろうけれど。

私の言葉に鬼が顎に手を当てて、唸る。

しばし考え込んでコクリと頷いた。

善は急げと言わんばかりに、ちゃんばら棒や扇子や、その他色々な小道具を灰色の風呂敷にせつせと仕舞い込み、何かを私に言つて天井裏へと戻ってしまった。

分かってくれたのかな。

布団の上で膝を抱えて子鬼を待つことにする。

それにしても、あの紅い鬼は何を考えているんだろう。

傷を治してくれたかと思ったら、襲われるのを知つて黙ってるとか。でも最終的には助けしてくれるとか。

意味が分かんないよ。

なに？ 飴と鞭っていうことなの？

これからも何か気に触るようなことがあつたら、またあんな怖い

目に遭わされるのかな。

「っ」

別に寒くもないのに無意識に腕をさする。

なんだか怖い。

今回のことで改めてあの紅い鬼の異常性を知った気がして、消えかかっていた恐怖と不安がよみがえって来る。

結局、籠の中にいようとまいと、鬼に囚われる『籠の鳥』ということには変わりはないのだ。

鬼の機嫌を損ねないように、ひたすらさえずるしかないんだろう。でも、だとしたら先程子鬼に頼んだことは意味がないんだよね。鬼の隠していることを突き止めるより、鬼の機嫌を損なわない為にはどうしたらいいのかを考えなくちゃいけない。

第一なんで私は鬼が何か隠していると決め付けているんだろう。さっき思いついたように、本当に嫌がらせしているだけかもしれないのに。

だんだん自分が何をしたいのか分からなくなってきた。

私はどうしたいんだろう。

何を考えているんだろう。

大人しく従順に飼われて身の安全を確保したいのか。

それとも鬼の考えている事をハッキリ突き止めたいのか。

両手で頭を抱え込む。

こんなに悩んだこと今までなかったから、どうしたら良いのか分からない。

うつん違う。

自分が何をしたいのか分からないんだ。

「……っ」

必死で頭を左右に振る。

チラリと頭の中を通り過ぎたモノに対して嫌悪し振り払う。

考えたくない。

そんなふうに思うなんて最低だ！

大勢の前で閻魔様に断罪された気分になり、罪悪感にさいなまれる。

「違う。そんなふうに考えてなんていないっ」

一人必死で掠めたものを否定した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

何の音も聞こえなる時間帯。

「なあ、なあ」と自分に呼びかける声と揺さぶられる身体。

目をうつすら開けると灯籠の明かりは小さく、部屋は暗かった。どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。

寝ぼけ眼で身体を起こすと、先ほどの子鬼が目の前にいた。

「なあに？」

子鬼はしつと口の前に指を立てて

「音無しの時間は音がよく響く。静かに話せ」

「え？」

思わず大きな声をだして直ぐに慌てて口をつぐむ。

子鬼が話した！

その事実を目を丸くしてしまふ。

「俺達の声は小さいから、この時間帯でなければ人間には聞こえない」

「もしかして、たまに聞こえるひそひそ声は君たちなの？」

「そうさ」

なぜか誇らしげに言って胸を張る。

「俺様がここに来たのはお前が殊勝なことをいうから、わざわざ絵までこしらえてきたのだ」

「絵？」

「ああ」

風呂敷から厚紙を数枚取り出して私の前にかざした。
どうやらお手製の紙芝居のようだ。

「今から紅い鬼様の話をする。この世界を知るにはまず紅い鬼様の

うんうんと頷いて布団の上で正座する。
ちよつと眠いけれど、わくわくして仕方なかった。

子鬼は小さく咳払いをすると語りだした。

[illegible]

金銀財宝に、刀に着物。

先頭には山ほど大きな赤い鬼が牛車に乗って、今回の自分の手柄を周りの鬼達に自慢していた。

真つ赤なその鬼はとても乱暴で、なんでも自分の物にしたがるが直ぐに飽きてしまい、なんでも壊してしまった。

他の鬼達は赤鬼を好いていなかったが、強さは鬼の中でも指折りに数えられる鬼だったので、誰も逆らわないでいた。

今日も部下の宝を根こそぎ奪おうと目を光らせていると、一匹の鬼が目に入った。

その遅しくも華奢な鬼は、他の鬼と比べて紅葉のように鮮やかな色をした鬼だった。

その鬼の手には美しい緋色の反物が握られていた。

「おい、そのやせつぼうち。お前のその反物をよこせ」

「いえいえ、赤鬼さま。これは俺の物です。こんな反物より貴方様の持っている反物のほうが美しいではないですか」

「当たり前だ。俺様のものだからな。さあ、それをよこせ」

「いえいえ。こんな薄汚れた反物を献上するわけには参りません」

「汚れていても構わん。よこせ」

赤鬼はのりくらりと話す紅い鬼にだんだん腹が立ち、ついに財宝の中にあつた刀を取り出して紅い鬼に切りかかった。

紅い鬼は力はなかったが素早く、赤鬼の刃を何度も見事に交わした。

「赤鬼さま、分かりました。反物を差し出すので刀を納めてください」

「最初からそうすれば良いのだ」

「無礼を働いたお詫びに、このお酒でもいかがでしょう。なかなかの銘酒です」

「おお、そうか。それならすぐ飲むとしよう」

赤鬼は紅い鬼が差し出したお酒をたらふく飲んで、いつしか寝てしまった。

そのスキに紅い鬼は赤鬼の刀を奪って、赤鬼を細かくバラバラになるまで切り刻んだ。それを見た他の鬼は、紅い鬼に慌てて言った。

「お前はなんて馬鹿なんだ！ 赤鬼様は身体を切られても死なないし、人間の陰陽師すら怖がる呪いを持っているんだぞ！

目を覚ましたらもう一度術で身体をくつつけて、お前を殺してしまっぞぞ！」

「そうだ！ 地獄の業火ですら燃えないといわれる赤鬼さまの身体だぞ！ だから今まで誰も逆らわなかったんじゃないか！」

口々に喚く鬼達を見渡し、紅葉の鬼はにやりと笑った。

「そうかそうか。切っても繋がるし焼いても燃えないかならこうしてしまえば良い」

そう言うところ紅い鬼は、切られてもなお、未だに生きている赤鬼の身体を次から次へと口の中へ運びむしゃむしゃと食べていった。

これには他の鬼達も目を見張り、赤鬼を食べてしまった紅い鬼を畏れの眼で皆見つめた。

「どうだ。これなら貪欲の赤鬼様とて、もう生き返れまい」

紅い鬼が胸を張ると、突然身体が褐色に変わり始めた。

それは紅い鬼の美しい紅の肌を侵食し、どんどん広がっていった。

「赤鬼様の呪いか！」

「やはり、ただでは済まないんだ！」

もうだめだと他の鬼達は口にしたが、紅い鬼は涼しい顔しながら鋭い爪で自分の身体に様々な模様を書くと、次第に肌は鳶色になり、

爪の傷で描かれた模様は美しい朱色となって輝いた。

不敵に笑った妖しい紅の瞳を持った鬼を見て、周りの鬼達は「新しい貪欲の鬼様だ！」と口々に叫んだのだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「どうだ！ よく出来ているだろう。俺様が作ったんだ」

緑の子鬼が得意げになりながら
紙芝居の後ろからひょっこり覗いて笑った。

「うん。良く出来ているけれど、君が作ったのは話してくれる前に聞いたよ」

苦笑いして子鬼に遠慮なく言う。

子鬼は少しだけ眉間にしわを寄せたが、すぐに気を取り直した。

「まあ、とにかく。我らの紅い鬼様は、鬼は勿論、他の妖怪からも『鬼喰い』として恐れられているのだ。

しかも前の赤鬼様と違って、どうしても欲しいもの以外はやたら無闇に手を出さないし、変に威張り腐んない。だから皆、前の赤鬼様よりも慕っているのだ」

ちよつと変わっているお方だな。そう言つて子鬼は締めくくることが、私の「なるほどねえ」の呟きに、本当に分かっているのかと子鬼が眉を寄せる。

「あ、もしかしてあの変な口調は呪いの後遺症？」

「あー……だと思う。以前は普通に話してたみたいだし。ちなみに赤鬼様の持っていた財宝はそのまま紅い鬼様の物になったんだ。誰も怖くて異を唱えなかったし、当然の権利だしな」

絵本とかで見たことのある鬼とは、随分違う鬼だなとは思っただけ、まさかそんないきさつがあったなんて。

鬼が鬼を食べるという話も聞いたことがなかったし、子鬼が言っただけで変わっているという言葉にもうんうんと頷いた。

ふと、ずっと気になっていた事を思い出す。

すぐさま目の前の子鬼に身を乗り出して訊いてみた。

「ねえ、名前のことなんだけれど」

「ば、馬鹿！」

全部言う前に子鬼に怒鳴られる。

子鬼はあたりをすばやく見回し、何も無いと分かると牙をむき出しにして私に詰め寄り、ドンと足を鳴らした。

「名前の話はするな！ 誰かに聞かれたらどうする！」

「だから、なんで名前の話をしたらいけないのか知りたいんだって」

「知らんていっ！」

これで話は終いだと吐き捨てて、私の制止を無視して天井裏へとさっさか上って行ってしまった。

あたりは何の音もなく、しんと静まり返る。

私は一人小首をかしげた。

なんであんなに名前の話を避けたがるんだろう？

不思議に思いつつ、やっぱり名前になにかあるみたいだと、子鬼の反応を見て私は確信した。

なんとかして名前について調べられないかな。

でもどうやって？

子鬼の消えた天井を見上げるが、そこをいくら見つめても答えは出てこなかった。

第十五怪 淡藤局

灯籠が明るくともる頃、紅い鬼の代わりに子鬼が食事を持ってきたのを見計らって、子鬼に昨日のことを謝った。

「もう名前の話はしないから、また音無しの時間にお話したいの！　お願い」

子鬼の細い腕を掴んで懇願した。

一人で居ると嫌な考えが頭の中を占領して耐え切れなかったし、それに子鬼と陰悪なままで居るのも嫌だった。

なんだかんだいって私の世話をしてくれているのはこの小さな緑の鬼だけ。紅い鬼みたいに酷いこともしないし仲良くなりたかった。私のした事が意外に思ったのか、子鬼は大きな目を見開いて驚いた。そしてちよつともったいぶって、考えるしぐさをきっかり十秒した後、威厳を持って大きく頷いた。

「良かった！　ありがとう」

思わず満面の笑みを浮かべる私に、鼻をふんと鳴らして食事を押し付けてきた。

乱暴な態度だけれど、それでも私は嬉しかった。

音無しの時間。

前と同じように揺さぶられて私は目を覚ました。子鬼が風呂敷を抱えてこちらを覗き込んでいる。

「今日は面白いヤツを連れてきたぞ」

「え？ どこに？」

布団から身を起こし、辺りを見回すけれど、部屋には私と子鬼以外誰も見当たらない。

緑の子鬼は風呂敷を丁寧にそつと畳の上に広げ、中にあった木箱から陶器を出すと『こいつだ』と私に差し出した。

上品な色をした薄紫の急須。

結構な年代物みたいだけれど、四足が付いている以外は特に変わったところはない。

私が首をかしげると、唐突に声をかけられた。

「あらまあ、人間じゃないの。珍しいこともあるじゃない」

ひゃつと声を上げて飛びのく。

「急須がしゃべった！」

「そつ、付喪神だ」

付喪神つて、あの、百年経った道具とかが動いたり話したり出来るって言う妖怪？でも、目の前の急須をみると、妖怪って言ったり、なんだかファンタジーチックな気がするな。

無意識に、ニコニコしていたみたいで、子鬼に嬉しそうだなと言われてしまう。

「ただの急須じゃあ、ないわよ」

急須から優しい大人の女性の声が聞こえる。

囁くような品のある口調。

クスクス笑うたびに蓋が鳴った。

「あわふじつばね淡藤局つてみな呼んでる。なんたって氣位が高いからな、こいつ……いてっ」

「子鬼は口が悪くてイヤになるわ」

蓋に思い切り噛まれたらしく指を口に含んで唸る子鬼。

そんな子鬼をよそにカチャリと畳の上に飛び降り、甘い声で囁いた。

「人の子、名はなんと申す？」

「あの、鈴音です」

未だに涙目になっている子鬼がおいっと私をつついた。

そんなに痛かったのかな？と思いつつ何故つつかれたのか分からなくて、『何？』と子鬼に眉を寄せた。

「あら。可愛らしいお名前をもらったのね。ねえ、この子に名前のことを教えたの？」

今度は淡藤局をねめつけて子鬼は唸った。

「まったくどうもこいつも！名前の話はダメだって。紅い鬼様に聞かれたらどうする？」

「何故ダメなのかを教えなければ腑に落ちないものよ。ねえ？」

「は、はい！」

なんだか思わぬ展開になったみたい。

この淡藤局さんという急須が教えてくれるのかな。
期待が膨らんで身を急須へと近づける。

「あのね。名というのは魂を示すことでもあるの」

「魂？」

「そう。だからやたら無闇に教えるものじゃないわ」

「でも、名前がないと不便じゃないですか？」

「ええそうね。だから相手が勝手に名前をつけるの」

「あだ名っていうこと？」

そうそうと淡藤局は頷いた。

「でもね、貴方は特別。紅の鬼様から与えられた名前だからね。
今みたいに見慣れない妖に名を教えてはダメ。

その名を使つて悪さをされるかもしれないわ」

「悪さ？」

「そうよ。その名をつけた紅い鬼様も、与えられた貴方にも害が及ぶかもしれない。だから教えたり、話したりしないように」

そんな大事なことなんで鬼達は教えてくれなかったんだろう。

子鬼はそんな私の視線を感じたのか、ジロリにらみ返してきた。

「どちらにしろコイツには外出禁止令が出ている。

他の妖怪どもに会うことはないし、紅い鬼様に使えている我らは皆、名を訊いたりはせんからな」

「でもこの年頃の子はなんでも知りたがるものよ。

隠せば隠すほど気になってしまうから……ねえ？」

光沢のある体を斜めにさせて、彼女は声でこちらに笑いかけた。

この淡藤局さんはなんだか茶目っ気がある。

大人の女性という気がしてなんだか憧れちゃうな。

……あれ？でも待って。

「あの、それだけじゃないんでしょう？」

私の発言に子鬼と淡藤局が顔を見合わせる。

姿勢を正して二人に向き直った。

「前に紅い鬼は本名を名乗っちゃいけないって言ってたけれど、今みたいな理由なら隠す必要はないよね？」

だって、別に紅い鬼に何か不利な事が起こるわけじゃないんだし」

「紅い鬼様だ！ 様つける！

いいか？お前はあの紅い鬼様の物なんだ。頭のとっぺんからつま先まで。

なのにお前の本名を他の者が」

そこまで言って『しまった』と子鬼が口を押さえた。

「な、なに？」

思わず前かがみになって子鬼に詰め寄る。

小さな頭が左右に揺れるのを見て、両手で緑の肩を掴み激しく揺さぶった。

「おーしーえーてーよー！」

「や、やめんかあ！　頭、頭が揺れるっ」

「ほらほら」

淡藤局が間に入ってきたので私は手を止めた。

放された子鬼の目はグルグルと回って足元もおぼつかない。

「私たちが教えられるのはここまでよ。

これ以上はお叱りを受けてしまうからね。貴方もただじゃすまないわ」

優しい声でたしなめられ、これ以上何も言えなくなってしまう。

「いつか紅い鬼様が直接お話しになられるわ。

もう少し先の話になると思うけれど。

いまちよつと面倒なことになっているみたいだから」

「淡藤局さんは……鬼が何を隠しているのか知っているの？」

「ええ」

呟いて黙った。

私は淡藤局さんが無い目を伏せた気がして、綺麗な淡い藤色が哀しげに映った。

「これからずっとここに居る事になるんだから、仲良くしましょうね」

まるで独り言のように小さな声で囁く。

「それに焦る必要は無いわ。急いで知る必要なんて無いんだから」

「でも」

「逃げるわけではないんだから」

「え？」

一瞬沈黙する。

見られているわけではないのに、視線が目の前の急須から逸らせない。

長い沈黙のあと、子鬼が私たちを見比べている中、淡藤局さんはふふつと笑った。

「答えは逃げないって事よ」

「あ、ああ……。そう、そうですね」

「ささ、お喋りはお終い。もう寝たほうがいいわ。お肌にも良くないしね」

そう言つて淡藤局さんは子鬼のところへ行き、子鬼は丁寧に彼女を抱えると最初来た時と同じように木箱の中へ閉まつた。
ふたが閉じられる直前、彼女がおやすみなさいと囁く。

「おやすみなさい」

私も返して、また天井裏へと消えていく子鬼達を見送つた。

第十六怪 紫煙漂う

「お前知っているか？」

子鬼が淡藤局に問いかけた。

「人間んところには、遠く離れたやつとでも話が出来る板があつてな。念波を使つて話せるらしい」

「おや。まだ神通力を使える人間が沢山残っているのね。それは知らなかったわ」

「それ、念波じゃなくて……電波だよ」

「……。」

じゃあ、真夜中だろうが真昼だろうが開いている店を知っているか？ なんでも揃っているな。その名も『根氣に』って言うらしいぞ」

「なんとまあ。

なぜそのような風変わりな名をしているのかしら」

「そりゃ、根氣に商売しているからだろ」

「こ、『根氣に』じゃなくて、コンビニ……」

ああ、もう、だめ……！

私は今までこらえていたものを、ぶはつと噴出した。

あーおかしい！

子鬼の持つている人の世界の情報が、いちいちおかしくて仕方がない！ おかしすぎる！

笑い転げる私に子鬼が憤慨の声を上げる。

「やかましい！ 俺は他の奴等から聞いたまでだ！」

「あはは、そう、そうなんだ」

ふ、腹筋が痛い！

こんなに笑ったのは本当に久しぶり。

ここしばらく音無しの時間に起きて、子鬼と淡藤局さんとの三人でずっと雑談していた。もっぱら話題になるのはこの物の怪の世界と、人の世界についてだった。とは言っても、私は紅い鬼から人の世界の話をすることを禁止されているし、この世界を知らないので聞き役にしかないのだけれど。

子鬼達の話では、私が今いる世界は常闇とこやみと呼ばれる闇の空間。とても広くて限りが無いのだけれど、住む場所には限りがあるらしい。そこで妖怪やら物の怪が集まり、住みやすい土地を作りあげたらしい。

「でも驚いた。まだ妖怪とかが私達の世界に来てたりするんだね」

「昔と違ってお上からの許しが出ないと基本的に行けなくなったみたいだな」

「なんで？」

「住処や戻る場所がなくなつた奴等がこの常闇に来て、均等が崩れ

たのさ」

「きんとう？」

「えーっと『ばらんす』ってやつだ。

ま、それで今までなかった常闇の勢力争いや縄張り、小競り合いなんかの問題が増えたんだ。それで人間の世界じゃ今まで睨みを利かせていた妖怪なんかがいらないせいで、そこでいがみ合っている奴とばったり遭遇。そして大揉め。下手すりゃ殺し合いだ」

うわ、なんだかすごいことになっているんだ。

戦国時代の話みたい。

でもなんだかややこしいなあ。

「えっと、ようするに、常闇でケンカしている相手がいて、その相手と仲裁者のいなくなった人の世界で、思いがけず出会ってしまうと、そこで最悪大喧嘩してしまうから、偉い人の許可が必要。こういうこと？」

いまいち分からなかったので、自分なりの解釈を子鬼に話してみる。子鬼が頷いて『俺の説明が良かった』と一人満足げだ。

ほんと、自惚れ屋さんなんだから。

「あつ」

突然、淡藤局さんが声を上げた。

そして子鬼も素早く顔を上げ、あたりを注意深く見回すと顔をひきつらせた。

「な、なに？」

二人のただならぬ様子に、びくびくする。

「紅い鬼様だ」

さつと顔が青ざめる。

顎がわなわなと震え始め、鼓動も早くなる。

なんで？

なんでこの時間帯にあの鬼が来てるの？

「今日はここまでのようね。私たちがいては邪魔だわ」

淡藤局さんが小さく言うと、子鬼もそれを合図に彼女を手にとった。

「待って！」

子鬼の小さな肩を掴み、引き止める。

「一人にしないで……」

さつきまで大きな声で笑っていたのが嘘のような、情けない声で子鬼達に懇願する。

子鬼は左右の目をきよろきよろと動かしたが、するりと私の手を離れ、『すまん』と呟き、天井へと逃げるように行ってしまった。

一人取り残され、しばらく緊張の糸を張っていると、むせる様な香りに鼻腔をくすぐられ、くしゃみが出た。
なんだろう？煙草のようなにおいがする。
鼻をすすりながら匂いの元を搜すと、それは襖の向こうから漂ってきているみたい。小さな隙間から奇妙な帯が空中を漂い、薄暗い部屋の中をさ迷っている。

「具合はどうだ？ 鈴音」

紫煙の元から紅い声が掛かる。

私はびくりと一切の動きを止めた。口を真一文字に結んで恐る恐る紫煙が漏れている隙間を凝視する。

蜘蛛に襲われた一件からというものの、私は鬼と関わるのがより嫌になっていた。そしてそれと同時に、より恐ろしく、理解しがたい存在だと感じていた。

「まだ、良くないです」

私は蚊の鳴くような声で嘘を吐いた。

掛け布団を引っ掴んで頭までかぶり、膝を抱えてぎゅっと目を瞑る。

とにかく今は鬼に会いたくなかった。

間もなく静かに襖が開く音が聞こえる。

私は身体を小さくしながら、自分のいやに響く心臓の音を聞いていた。その音が緊張の糸をさらに張り詰めさせる。

だんだん畳を踏む音が近くなり、私の真横まで来ると、布が擦れる音と静かに座る様子が耳に聞こえて来た。

「どうした？ なんで布団など被っているのナナ？」

布団を通してぐもった紅い声が聞こえる。

こちらの返答を待たずに鬼はかまわず明るい口調で私に声をかけてきた。

「安心しろ鈴音。お前が良い子にしているんなら、とって喰いやしないし、死なせたりもせん」

「……」

「約束は守ってやろうカナ」

ふうーっと息を吐く音が耳に入る。

やっぱり鬼の考えている事はよく分からない。

そんなふうに言うのなら、何故あんな酷い目に遭わせたんだろう。外に出したくないにしても、もっと他にやり方があったんじゃないのかな？ あれじゃ、トラウマになっちゃうよ。

お互い黙ったまま刻々と時間が過ぎた頃、おもむろに鬼は声をかけてきた。

「なあ、鈴音」

耳をそばだてて次の言葉に構えた。

しかし声をかけたきり鬼は何も話さない。

暫く間があつたので、思わず布団から覗こうかと思ったとき『いや、やはり良い』と投げやりな言葉が耳に入ってきた。

鬼が躊躇うなんて珍しい。

「なんですか？」

好奇心も後押しして思わず訊いてしまう。
するとちよつと間を空けてから鬼は口を開いた。

「お前の人の名の事なんだがナア。鈴音は覚えているんだろう？」

人の名前？ 私の『紗枝』という本名のことだろうか。
とりあえず『はい』と返事をする。

「ここに来る前の記憶も力？」

「……？ はい、覚えてます」

なんでまた、そんなことを聞くんだろう。まるで私が記憶喪失に
でもなつたか確かめているようだ。

とりあえずまた『はい』と返事をする。と鬼は再度黙り込み、なん
どか紫煙を溜め息のように深く吐いて、何かにトントンと指を鳴ら
している音が響いた。

鬼の反応に目を瞬かせて黙ってしまふ。

なんだかもやもやする。

言いたいことがあるならハッキリ言っただけいい。

気になるじゃない。

私は焦れてしまい、我慢できなくなつて鬼にたずねた。

「あの、なんで名前にこだわるんですか？」

「……」

返事はなかった。何の音も返ってこない。
聞こえなかったのかな。

「友達は……無事帰ったんでしょうか」

話題を変えて、ちよつと大きめの声で訊いてみる。
やはり返事はない。

もしかして聞いてない、というより無視してる？

気持少しだけ布団をめぐり、鬼の様子を伺う。

すると突然、母親がなかなか起きない子供の布団を『早く起きなさい！』とでもやるかのように思い切り引き剥がされた。

突如露になった身体を反射的に丸めて顔を赤くする。

なんで急に掛け布団をはがされると恥ずかしいんだろう。そう思うのは私だけかな。

まあ、そんなことはどうでも良くて、慌てて身体を起こして素早く身構えた。

「なんだ。ずいぶん元気そうじゃない力」

「な、何をするんですかつ」

布団を片手に、鬼は笑みを浮かべながら、すぐ脇であぐらをかいていた。そして鬼が面白そうにこちらを呼び指したので、それが乱れている浴衣を指していることに気がつき、慌てて整える。

「それだけ動けるなら、もう大丈夫だろう」

布団が畳の上に無造作に投げられ、紅い手は私の腕を掴んだ。ゆつたりとした動作だが有無を言わせない力に引っ張られる。

「さあ、鈴音。籠にもどれ。」

さつき部屋が片付いたんだ。もうここに居なくて良い」

「ちょっと待って下さい！」

足を突っ張って踏みとどまった。あんなところに戻るなんてもう嫌。逃げることも歩くことも出来ない場所になんて二度と行きたくない！　なんとかして時間を引き伸ばさないと。

「鬼さんは何か、隠しているんじゃないですか！？」

「は？」

しまった！

こんな単刀直入に切り出すつもりじゃなかったのに言ってしまった。

馬鹿だ。私は大馬鹿だあ！

紅い鬼は二つの紅を見開き何度か瞬かせたが、すぐに笑い出した。私の腕を放し、腹を抱えて笑っている。

ワケが分からず立ち尽くしている私に鬼は目を細めた。

それはどこか嘲ったような残虐性のある眼差し。

「何を言い出すのかと思えば。俺が隠し事をしているって？」

「いえ、その……」

もごもごと濁して私は俯き、淡藤局さん達の話を出すわけにもいかないし、なんて言いワケすればいいのか分からず焦った。しかし鬼から発せられた次の言葉は意外なものだった。

「まあ確かに隠してはいる」

今度は私が見開く番だった。

あつさりと言った鬼を信じられないと驚いて顔を上げ、『じゃあそれって』と言いかける。

「が、お前さんが望んでいるようなものじゃないカナ」

「え？」

名前の話じゃないの？ と訝しい顔をする私に、鬼は開けていた紅い口を閉じるとにいつと両端を吊り上げた。

「鈴音。お前、本当は約束を破って逃げたいんだろう？」

思わぬ言葉に心臓が強く鳴った。

予想していなかったことに頭が真っ白になる。

意味が分からないと鬼の顔を探るように見つめ、うろたえた。

「みなまで言わなければ分からないのカナ？」

鬼はクツと喉で笑い、目をさらに細める。

「自分が犠牲になって契約をしたことを本当は後悔しているんだろう？」

言葉が詰まった。

そして自分のそんな反応に驚く。

腕組をして鬼が一步踏み出し、私も反射的に一步後退する。

やだ、なんで動揺しているんだろう私。

言い返そうと口を開くが、言葉が出てこない。

「だから俺の隠している事を知りたいんだろ？」

無意識にぎゅっと胸の前で拳を作る。そこで自分が肩で息をしていることに初めて気がつき、心臓はひどく早鐘を打ち鳴らしていた。

「俺の隠している事こそが帰る為の唯一の逃げ道だと。そう思っているんだロウ？」

逃げ道。その言葉をきいて微かに頭を左右に振り、否定する。

一瞬頭の中を、また嫌なものが霞めて血の気が引いた。

鬼は片方の眉を吊り上げて嘲るように鼻で笑った。

「なんだ。自分で分かっているみたいだなア。なら教えてやろう力？」

その先は聞きたくない。

私の制止の動作を無視して、鬼は早口にまくし立てた。

「お前は友を返せたと喜んでいるがそれは一瞬で、もうすでに後悔している。

しかし、それを受け入れられないお前は、俺が隠し事をしていると気が付くと、すぐさまそれを逃がした奴等と関係があると思っ込んで。

だが、本当に思い込んでいるのは、自分が逃げるための何かだったんじゃないのか？」

「　　」

「もつと分かりやすく言ってやろう力？」

必死で首を横に振る私を面白そうに眺め、鬼は腕組を解いて、ま

るで勝利宣言でもしているように、高らかに言い放った。

「お前は後悔していないと思っているが、いやいや……それは嘘力ナ。」

お前は本当は後悔している。自分が犠牲になったことをナア！」

違う。

「友を思っふりをして、本当は自分が逃げる道を探している」

やめて。

「その浅ましさに目を背けて自分を騙しているんだろう」

やめて。

「凶星か？ 鈴音え」

「やめてっ！」

両手で耳を塞いで絶叫した。

その場につずくまり、膝に顔をうずめて涙を落とす。

やめて……

やめて……

何度も頭を掠めた考え。

そのたびに振り払ってきたけれど、まさか鬼に言われるだなんて。こんな形でまた突きつけられるだなんて。

「可哀想にナア鈴音。苦しいだろう?」

もう聞きたくない。

これ以上聞きたくない。

なのに紅い声は塞いだ耳に直接響いてくる。

「俺がその苦しさから助けてやろうか?」

耳を塞いだ手の上に鬼の大きな手が重なる。

ゆつくりと顔を向けさせられると、そこには残酷な優しい紅い笑み。

「お前に帰り道なんざ、無い。

俺との契約は破れない。

苦しむだけ無駄かな」

第十七怪 真っ赤な嘘

鬼にはつきりと指摘された。

自分が今まで目をそらし、否定してきたことを。

籠の中で布団も敷かず、四肢を投げ出す。

蝋燭の火を消されたようになんとも虚しい雰囲気自分が自分を包んでいた。

友を思っている振りをして

本当は自分が逃げる道を探していたんだろう
契約を破って家に帰りたかったんだろう

呪いが掛かったかのように、何度も何度も鬼の言葉がこだまする。
目頭が熱い。

泣きすぎたせいかな。頭がガンガンする。

頭も視界もぼやけ、疲れきった心に普段払い退けていたものが忍び足でやってきて、耳元で囁く。

鬼の言うことは腹立たしいくらい当たっている。

私は逃げたかった。

紅い鬼との約束を破って。

後悔なんてしてないと、何度も自分に言い聞かせて、自分の本心を黙らせようと必死になっていた。

でも本当は後悔していたんだ。

自分で決めたくせに、なんでこんな目に遭わなくちゃいけないんだろうって、思っている自分が居たんだ。

そう、自分を支えていたものは真っ赤な嘘。

友達に何かあっただなんて心配する振り。
後悔なんてしてないと英雄気取りの振り。
保身のために鬼と仲良くする振り。

目尻から熱いものが零れる。

重い両手で顔を覆うと、閤を切ったように、またとめどなく涙が溢れてきた。

きつく結んだ口からは途切れ途切れに、嗚咽が漏れる。

私は最低だ。

最低の人間だ。

妖怪よりも浅ましい。

卑劣な存在なんだ。

「おーい」

天井裏から声をかけられた。

意識は鈍く反応したが、視線をそちらに移す事はしなかった。なんだか、それすら気力の要る作業に感じて、億劫に思えた。

乾いた音を立てて子鬼が籠の向こうに降り立つ気配がする。交差した腕の隙間から見える視界の端に、小さな緑が映る。

「おい、大丈夫か？」

籠に触れる音と同時に子鬼の声が向けられる。

「なあなあ。お前もさ、元氣出せよ。」

良かったじゃないか。紅い鬼様に気に入られたみたいで」

私は黙っていた。
今は何も話したくない。

「だってよ、あの『鬼食い』の異名を持つ鬼様に御執心されているんだぜ？ 名誉なことじゃないか」

名誉？

一体何が？

「邪な考えなんて誰しも持ち合わせているもんだ。
なんでそんなに塞ぎ込みまうのか俺には理解できん」

「お願い……一人にして」

喉の奥から声を絞り出す。

カラカラに乾いて掠れた声。

その自分の声すらも頭に響いて痛みが広がる。

「なんだってそんなに気落ちしてんだ？
逃げられないことにか？ それとも」

「やめてっ！」

叫んだ。

もう何も聞きたくない。

誰の言葉も耳に入れたくない。

「怒鳴ってごめん……でもお願い。今は一人にして欲しいの」

籠の外で小さく息を吐いた音が聞こえた。

それからしばらくすると、また部屋は静寂に包まれた。

今まで張り詰めていたものがあっけなく切られてしまったみたい。私はその後も起き上がることが出来なかった。籠で息を詰めていたときは比喩物にならない虚ろが私を蝕んでいる。

私はこれからどうなるんだろう。

どうするんだろう。

それすらも、今となってはどうでもよく思えた。

.....

私はずっとふせていた。

なにをする気も起こらず、ひたすら横になり続けた。

時折、子鬼や淡藤局が来て声をかけてくれたこともあったけれど、どうしても話をする気になれなかった。

頭の中は深い霧がたちこみ霞んでいて何も考えられない。ただ、ふとした時に鬼の言葉がしつこく私を責め続けた。

まるで言葉の拷問。

意識がはつきりする間もなく、紅い言葉が私を蝕む。

それが終われば、今度は自責の言葉が容赦なく襲い掛かる。

ヤクソクヲヤブッテ

嘔吐き

トモヲオモウフリヲ

偽善者

ホントウハニゲタイ

卑怯者

ずっとその繰り返し。

食事をする時も、寝る時も、体を洗う時も、ずっと幽霊のように付きまとう。

いつの間にか、少し前に何かをしていたという事すら、もう覚えられなくなっていた。今この瞬間ですら、すぐに煙のように消えてしまっている。

記憶の変わりに残るのは自身を呪う言葉だけ。

.....

「鈴音」

籠の外から声をかけられる。

「今日も飯を抜かす気か？」

食事？

そんな事いつしてた？

それとも、いつからしていなかったんだっけ？

籠がしなる音が聞こえる。

鬼が籠の中に入ってきたようで、すぐそばで畳を踏む音が聞こえた。

「おい。いい加減食べたらどうだ？」

私は返事をしなかった。

なんだかどうでもよかった。

鬼の『喰ってやる』という脅しを聞いてもなにも感じなかったし、鋭い牙も爪も、全くと言っていいほど恐怖心を呼び起こさなかった。自分の心になにが起こったのか知る事さえ、今の私には面倒に思えた。

何もかもどうでもいいの。

ひどく気だるくて、仕方がない。

食べるなら勝手にして欲しい。

「お前ナア、意地を張ってたって仕方ないと思うゾ？
そんなに己の醜さに落胆したの力？」

分らない。

声に出さず、心の中で呟く。

今の私は空っぽだ。

悲しくも嬉しくもない。

心が凍ったみたいに動かない。

一体どうしたって言うんだろう。

でもそんなことはどうでも良い。

どうでも良いのだ。

紅い腕が私に伸びる。

まるでテレビ画面をみているような、他人事みたいに映る視界。

鮮やかな鬼の大きな手も、今は白黒。無抵抗な身体はそれに掴まれ、ゆるりと起こされる。

熱が出たようにぐったりとする身体。

今の私は、頭も心もお腹も空っぽ。

振ればからころと音が鳴るんじゃないのかな。

そんな考えに笑みが零れた気がしたけれども、生憎私の顔の筋肉は反応しなかった。

ゆらゆらと揺り籠のように揺れる私。

どうやら紅い鬼が赤ん坊を抱くように、私を抱きかかえて、揺らしているみたいだ。それにどんな意味があるのか分からないし、やはり興味は沸かなかった。

紅い鬼は怒っても笑っても居ないけれど、どこか寂しげに見える。きっとそれは空っぽな私の気のせいだろう。空っぽだから、そう見えるんだ。

「鈴音。どうだ取り引きしないか？」

のぞき込むように紅い視線を私に落とし
おもむろに鬼は言った。

「お前の本当の名前。それを俺によこせ」

……名前を？

私の紗枝という名前を鬼に？
でも、どうして？

「名前を名乗り、俺に渡すと告げろ」

名前を渡す？

私の声にならなかった言葉に、二つの紅がゆらりと動き、頷いた。

「そしたらお前を守ってやろう。」

外にも連れ出してやろう。俺の創り上げた街だ。
欲望と快楽を満たすこの上ない街力ナ」

潜めて、耳元で囁かれる。

自分のカラカラに乾いた喉が動くのを感じる。
しかし声は出ない。

鬼は紅い声でまた私に囁く。

「名を名乗れ」

楽になりたい。

楽になりたい。

辛いのはもう嫌だ。

でも、だけど……。

「どうした？ 楽になりたいんだロウ？」

ボヤケる視界に細い深紅の瞳。

炎のように揺らめく妖しい紅。

「鈴音。俺は」

「きいっ!!」

そのとき、激しく襖を叩く音と同時に子鬼の叫ぶような鳴き声が部屋に飛び込んできた。

紅い鬼が睨みつけたんだろう。一瞬息を呑んだような音がしたが、すぐに持ち直してしきりに何かを叫んでいる。

「ああ、来たか」

ずっと紅い陰が動いた。

そして何か子鬼に指示をだしている。

何を言っているか分からない。しかし例え聞こえたとしても、私は聞く気にならなかっただろう。

鬼は私を畳まれた布団に頭を預けるように寝かし、額を撫でる。

ふと、鬼が籠を出るときに少し立ち止まった。視線を感じちよつとした沈黙が流れたが、紅い鬼はそのまま何も言わず部屋を出ていった。

第十八怪 白昼夢

何の音も届かない耳。

目を閉じて視界に映るものも拒絶する。

心の闇が広がり、意識もそこに吞まれていく。

深く、深く。

「ふぜけんなよ！ 全部お前のせいだぞ！」

「やめなよ！ これは事故でしょ！」

闇の中、怒鳴りあう陽炎が五つ。

どこかで見た光景。

そつと目を見開き、また目を閉じる。

開けても閉じても同じ光景が見える。

「でも、一体どうなっているの？ 二二二二？」

「分からない」

鈍い光が人の形になって闇の中でうずくまっている。

次々に輪郭がハッキリしてくる。

見覚えのある顔、顔、顔。

「これからどうなるのかな……」

「ごめんね、紗枝ちゃん」

「ううん。大丈夫だよ。かならず一緒に帰ろうね!」

五つの光が揺らめき、煙に変わる。混ざって一つになり、今度は大小二つの影を作ると、鬼と少女の形をなしていく。

「ずいぶんお前は威勢がいいナア。

どうだ？ 俺と取引をしないか？」

「と、取引？」

「ああ。お前がここに一人残るんなら、ほかの奴らを帰してやっても良いゾ」

「私を？ 私一人残れば、みんなを帰してくれるの？」

「そうだ」

「わ、私一人で良ければ。うん。分かった。こゝここに残ります」

「そうか。分かった」

ふつと風に吹かれたように流される光。
くるくると、つむじ風のように回って、また五つの人影を作り上げていく。

「なあ、鍵。開いているぞ」

「なんで？ 閉め忘れ？」

「罾かもしれないわ」

「でも今しかないよ！今のうちに逃げよう！」

ああ、なんだ。

座敷牢から逃げ出してきた時の場面だ。

そう、そこからみんな逃げ出したんだよね。

「ねえ、ばれちゃうよ」

「そこ、その扉に入ろう！」

「鍵かかってる！」

「どうしよう！？」

「あ！もしかして、それ鍵じゃない？」

「でも、なんでこんなところに落ちてるの？」

「なんでもいいよ！それ使え！」

「あ……。開いた」

「馬鹿だなあ、扉の前で鍵落とすなんてよ」

思わず鼻で笑ってしまう。

馬鹿は私たちなのに。

紅い鬼がみてるなんて知らずに。

「誰もいないね」

「大広間で宴会やっているみたい。さっきあの子鬼が言ってた」

「え！ みつちゃん鬼の言葉が分かるの？」

「紗枝ちゃんは分からなかったの？」

そういえばみつちゃんは、音無しの時間帯でもないのに、鬼の言葉が分かっていたみたいだった。靈感があるようなことも、小学校の時に話してくれてたけれど、あまりそれについては話しながらなかったから、ずっと忘れていた。

もしかして、だから鬼を呼び出すことができたのかな。

五つの光が氷の上を滑るように流れる。

必死で駆け抜ける人影たち。

「ねえ、あそこ」

「門番のくせに寝てやがる」

「静かに。起こさないようにね」

闇の中からまた別の光が湧き出ると、瞬時に大きな扉を形作る。私たちが吸い込まれた扉。ここへ連れて行かれたときに通った大きな扉。

「やった！ この岩の扉だ！ 帰れるぞ！」

「さ、追っ手が来る前に行こう！」

岩の扉のむこうには、ここにくる前の薄暗い木々が広がっていた。我先にと駆け込む男子。そのあとを追いかける他のクラスの女の子。

「さ、みつちゃん行こう」

「うん……」

「どうしたの？」

「……紗枝ちゃん、ごめんね」

「もう、気にしないでったら。悪い夢だったと思って帰ろうよ」

「……うん」

私の影が彼女の影を押す。

そして彼女が扉の向こうへ足を踏み入れ、私も扉へと近づいた。

「どこへ行くつもりかな？」

扉に手をかけた私の影が凍った表情で振り返る。大きな紅い目をした影がニヤリと笑い、振り返った私を包み込み、闇の向こうへと消えた。

気持ちほど開いた扉。そこから小さな顔が覗いている。

「みつちゃん……」

彼女の凍った顔が見える。

光は惜しむように、徐々に徐々に暗闇に溶けていく。

最後に怖い思いをさせちゃっていたんだね。

ごめんね……みつちゃん。

•
•
•
•
•
•

真つ暗闇の中に、幽霊のように人魂が浮かび上がる。

黄色い、淡い光が私を照らしている。

これは夢なのかな。

それとも幻なのかな。

さっきの光景もこの人魂が見せたのかな。

でも、これを今更私に見せて、どうしろというの？

もうあの頃みたいに、動く気力も生きる気力も、今の私にはないというのに。

第十九怪 金色の来訪者

灯籠とは違う明かりがまぶたを照らす。

うつすらと目を開くと籠の向こうに黄色い人魂。優しい光を放っているのにどこか儚げだった。

人魂は籠のそばに近寄り、しばらく宙に浮いたまま微動だにしないかったが、私が上体を起こすと襖へとゆっくり移動した。私を誘っているんだろうか。

籠の入り口に近づく。

紅い鬼が鍵をかけ忘れたんだろうか。出入り口は空いていた。

白い格子を潜り、籠から出ると、陽炎のように揺らめいている人魂に近づいた。

それは音も立てず、吸い込まれるように襖の向こうへと消えていく。

私は襖の取っ手に手をかけ、横へと襖を開けた。

一切の光も射さない闇がそこには広がっていた。

その中をユラユラ黄色い灯が私を誘うように、足下を照らしながら闇の中を進んでいく。私は空っぽの心持ちでその後についていった。

長い長い廊下を黄色の人魂と進んでいく。

いくつかの角を曲がり、まっすぐ進んだかと思ったら、また右へ左へと曲がり角を歩いていく。

どこに連れて行く気なんだろう。

漠然としつつも小首を傾げる。

しばらく進むと、狭い廊下に差し掛かり、膝丈の観音開きの扉の

前で人魂は止まった。そしてまた、その奥へと消えていく。私はしやがみ込み、両手でその扉を開いた。

湿気を含んだ空気が頬を掠め、鼻を突いた。目を細めて凝視すれば、そこはひどく狭い物置のようだった。大小様々な箱が置かれてあり、人魂の光に照らされて幾つもの陰が私を囲んでいた。

「一体どういうおつもりか」

小さな部屋に響く声。どこから聞こえているのか分からず、目を閉じて耳を澄ます。

まぶたに人魂の黄色い光を感じる。誰かが話をしている声が聞こえてくる。聞き入るうちに、だんだん覚醒してくる感覚。夢から覚めていくような、自分に憑いていた何かが波のように引いていく。

ずっと私を照らしていた人魂は、何かを悟ったように大きく揺らめくと、私のはつきり意識を呼び覚ましたときには、その花のように黄色い火を小さくさせて萎んで消えてしまった。

今は一体何だったんだろう。

「少しは落ち着け。土蜘蛛」

はっとして身を手近な置物に潜める。

人魂のことも気になるけれど、今はそれどころじゃない。どこから声が聞こえるのか分からない。

キョロキョロと見回すと、ふと、暗闇に一筋の光が床に小さな円を作っていた。辺りを警戒しながらその落とされている光に近寄る。その光の筋をたどると、壁に小さな穴があいていた。

のぞき穴かな？どこの部屋なんだろう。

片目を閉じ、息を潜めてのぞき込んだ。

「何故、そのようにゆるりとされているのか。紅い鬼殿が飼われている人の子が襲われたのですぞ！　これでは矜持に関わる事ではないのか？」

広い豪華な部屋に寝そべる紅い鬼と、隅に控える緑の子鬼たち。そして、もう一人。部屋の中央に見慣れない人影があった。

黒い胸当てに虎の腰巻き。金色の獣の耳が左右に設えてある兜を被って、厳めしい顔を紅い鬼に向け、仁王立ちしている。

「ずいぶんと耳にするのが早いなあ。群から追い出されているクセに」

「ふん、それが我ら蜘蛛の強みよ。そんなことより襲った輩は分かっているはず！　何故、討伐に向かわれない？」

「討伐……と？」

私を襲った蜘蛛のことかな？

狭い視界から二人の物の怪の顔を交互に見比べる。どうやらあの虎の腰巻きをしている妖怪と思わしき人物は私を襲った蜘蛛のことを知っているみたい。

紅い鬼の態度にイライラしているのか、蜘蛛の人が声を荒げた。

「そうだ！　その輩は人の子を飼って間もなく紅い鬼殿に会っている。そう、女郎蜘蛛の奴よ！」

あ……あの時の女の人？

この世界に残ると決めた日。私を見て美味しそうだと笑った遊女。今思い出してもあの黄色くくすんだ目を思い出しただけで身震いする。あの女の人が私を襲ったってどういうの？

「女郎蜘蛛ねえ」

「間違いなどない。紅い鬼殿も知っていただろう！ 女郎蜘蛛が風呂でうたた寝していた人の子に手を掛けようとしたことは、烏天狗からも知らせが届いているはず」

嘘……。

その時から、ずっと、狙われていたの？

力が抜けて壁にぶつかりそうになり、慌てて体制を立て直す。今気づかれたら逃げられない。なるべく静かにしておかないと。

気を取り直し、また小さな穴をのぞき込んだ。

「なるほどナア」

「いまこそ女郎蜘蛛共を根絶やしにすべき。貪欲の鬼にまでこのような無礼千万を起こすなど狂気の沙汰ぞ！」

「まあまあ、そう熱くなるナ」

紅い手がヒラヒラと蝶が羽ばたくように踊る。

それを見て蜘蛛の人が一歩鬼に近寄り

「何故動かぬ！ それでも『鬼喰い』と云われた鬼ではないのか！ 虚仮にされたのだぞ！」

そう怒鳴り散らした。

ちらつと紅い鬼へ視線を移す。

鬼は相変わらず寝そべったままニヤニヤしていた。一体何を考えているんだろう。

「何故動かないって？」

ゆったりと体を起こし、顎に手を当て目を細める。

「そりゃあ、知ってるからさ」

ずっと長い指を目の前の金色に向け、口の端を釣り上げた。

「お前があれを襲った当人だからヨ」

長い沈黙が流れた。

誰も微動だにせず、ただただ時が流れた。

そんな重苦しい空気を破ったのは蜘蛛の笑い声だった。

「なにを馬鹿げた事を！ 腹が痛くなるではないか！」

「ほう、そうかい」

「ああ、まったくだ。一体なぜ私が襲わねばならない。私が人の子を襲うのにいったい何の利益があるというのだ。しかも貪欲の鬼の物を」

「もちろん、ただ闇雲に言っただけではないサ。おい」

「……何のつもりだ？」

紅い鬼のそばの襖が開かれ、髪の高い、女の子がしずしずと入ってきた。綺麗な朱色の着物に包まれた彼女は紅い鬼のそばに座り、

ニコリと微笑んだ。

あの子は誰だろう？

見たところ私と同じ年みただけだ。

「襲われた時、鈴音がお前を見たというんだが。なあ、鈴音」

思わず『えっ』と声を漏らしてしまう。

鬼の言葉に、彼女は呼ばれた名前通りの鈴の音のような可愛らしい声で『はい』と応えた。

「何を馬鹿な。嘘を申すな」

「いえ。私は確かに見ました。あの恐ろしい出来事を鮮明に覚えております。あの思い出すのもおぞましい光景の中、土蜘蛛様の姿を捉えました」

きっぱりと蜘蛛へ言う。

「紅い鬼殿、何を考えておる？こんな偽者を使うとは」

「偽だと？」

「ああ。鈴音殿は死んだハズ。こいつは偽だ！」

紅い鬼はこれ以上内ほど笑みを深くして大笑いした。

「なぜお前がこいつを偽者だと知っているのだ？」

「そ、それは子鬼共が死んだと噂していたのを耳にしたまでで……」

「ほう」

「それにだ。私には襲う必要がないと先ほど言ったハズだろう！
何故紅い鬼殿を敵に回すようなことをせねばなんのだ」

「はん。どうせ、女郎蜘蛛とのいざこざを俺に尻拭いさせるつもりで、女郎の子蜘蛛をけしかけたんだろう。そうすれば、あいつを直接襲った子蜘蛛をみて、女郎蜘蛛が襲わせたと思うはずだからナ」

ぎりりと歯を食いしばる蜘蛛。白目の部分がかすんだ黄色に変わり、紅い鬼を見る目は危険な炎が燃えている。

「馬鹿なことを！」

「それに、女郎蜘蛛が来たと言ったが、あれはお前だろ」

「……なんだと？」

「女郎蜘蛛に化けて、これから襲うと匂わせる。そんな魂胆だったんだろ？ 風呂場の件もわざと他の奴等に見えるようにして」

「……」

「だが、間抜けだナア。気付かなかったのか？」

女郎蜘蛛は白目は黄色にならんのだよ。お前は自分の習性も知らんのか？ それにお前は子鬼共が噂してるなんて言ったが、子鬼がそれを言うのは可笑しな話ダ。あいつは死んでいない」

紅い鬼はこれ以上ないほど意地の悪い笑みを浮かべてニヤリ笑った。背筋が凍るような、狂喜の光がその妖しい紅の中に溢れていた。

蜘蛛のほづはというと、紅い鬼に同じように黄色い目を爛々と燃やし始めていた。

「お前の思惑は外れカナ」

第二十怪 茶番劇

えっと、ちょっと待って。

頭がこんがらがってて……一度話をまとめてみよう。

あの男の人は土蜘蛛の妖怪で、いがみ合っていた女郎蜘蛛を邪魔だから潰そうと考えていた。そこで、紅い鬼が私を飼うと知って、自分が女郎蜘蛛に成り代わり、私を襲うことで紅い鬼の怒りを買わせて、女郎蜘蛛を根絶やしにしてみようと考えた。

で、お風呂場で私を襲って、目撃者を作る。

今度は私が寝ている時に再度襲った。でも既に紅い鬼に見破られていて、結果的に失敗。今に至ると。大体こういうことかな。

正直まだピンとこないし、分からないことだらけだけど、土蜘蛛の計画はうまくいかなかった事と、私を襲ったのはあの男の人だったことは確かみたい。

のぞき穴からまた息を潜め、片目で紅い鬼と土蜘蛛の表情を見比べる。

「おのれ……」

土蜘蛛の目は濃いくすんだ黄色に染まり、体中を震わせている。

その気迫に私は壁の向こうで縮み上がり、ようやく気づいた。

あの黄色い目。私を睨んだ目と同じ色をしている。紅い鬼が言うことが本当なら、やはりこの人間の姿をした人物が、私を襲った物の怪なんだ。

「ばつかだナァ。なんて茶番だ！ 間抜けにも程があるナァ！俺があの時、『土の姫さん』と言った呼びかけにも普通に返していたしナァ！ ほんとにアホ極まりない」

今にもブチ切れそうな閻魔顔を目の前にして、紅い鬼はゲラゲラ笑っている。

なんというか、あれだけ怒っている人（というか妖怪）を前にしてよくあれだけ笑えるわ。青筋立てて、目が血走っているのに。

土蜘蛛は張り詰めた弓のように口をわななかせていたが、ふっとそれを緩めると、口角を上げた。

「はっ！ お前などに言われたく無いわ！ 俺は知っているぞ、紅の鬼！ 小娘の名も奪えんとはなあっ！」

ピタリと鬼の笑い声が止まる。

部屋は静まり返り、誰も声を発しない。

え？ 何？ 名を奪う？

今の言葉はどう言う意味なんだろう？

壁にへばりついて二人の様子をうかがう。穴の向こうで、紅い鬼はもう笑ってはいなかった。冷たい視線を蜘蛛に向けるだけで指一つ動かさない。気のせいか、不穏な空気が鬼を包んでいる。

土蜘蛛はそんな鬼をみて、嘲りを含んだ視線を向けて言い放つ。

「貪欲の鬼も墜ちたものよっ！ たかが人の子の契約も果たせぬとはなあ！ 大方、一匹逃がし損ねたんだろう？」

「ほう？」

「群れから離れたとはいえ、この俺の網を甘く見るな！ お前が捕らえた人の子を逃がして、あの娘を手にしようとしていることは知っている。だが残念だったな！ 一匹逃げそびれたようだ！」

え？ それって、誰かがまだこの世界にいるっていうこと？
鬼は約束を守っていなかったの？

疑問だらけで、私はすっかり混乱した。

今の話が本当なら、あの時誰かが逃げそびれたって事になる。
でも確かに、あの時みんなあの岩の扉をくぐっていた。私が一番
最後だったんだから、逃げそびれたはずがない。

蜘蛛は相変わらず紅い鬼に怒鳴り散らす。その声に我に返り、視
線を蜘蛛へと戻す。

「逃げた人の子は他の妖怪どもに持っていかれ、今頃屍にでもなっ
ているだろうよ！」

「そんなっ」

はっとして口を両手で口を塞ぎ、後ろに仰け反る。
ギイと足元の床が鳴いた。

「ん！？」

その瞬間、突き刺すような二つの視線が私の喉を締め付けた。
思わず尻餅をついて震え上がる。

もう目には薄暗い壁しか見えないはずなのに、そのむこうからハ
ッキリとした視線が私を拘束していた。

「丁度いい」

聞こえたが早いか否か、何かが壁を突き破り、着物を裾を引っ張
られ、あっという間に鬼達のいる部屋へ引きずり出される。

遠ざかる大破した壁。流れる雪の緑。

そしてあの時と同じように、するどい何かが私を押さえつけた。
雪に身体が痛いほど食い込む。

「……あつ」

目を見開き、体を強ばらせた。男がいた所には人の姿は無く、代わりに象のように大きな蜘蛛が一匹、黄色い牙をむき出しにして私を見下ろしていた。

その顔は蜘蛛ではなく、鬼と虎が混ざったようなおぞましい顔だった。鉄のような真つ黒な硬い鉤爪で、私の顔をグイグイといったぶる。

「まさか生きていたとは。なかなかしぶとい人の子よ。この紅い鬼に飼われたのが運の尽き」

人と獣が混ざったような、ざりざりとした声が入から響く。

紅い鬼のそばに座っていた女の子がずっと立ち上がる。ふるふると身震いすると、次第に緑の肌に変わり、三人の子鬼に姿を変えた。あれは子鬼達が化けていたんだ。

ざりざり。土蜘蛛が鋭い視線を私から紅い鬼へと移した。

今にも切り込もうとしている子鬼達を紅い鬼が待てと、手を振る。

「紅の鬼よ。我らと手を組もうではないか。そうしたらこの人の子を返してやろう」

「……」

「目の前でせつかく捕らえた雀のはらわたを、お前は見たいのか？」

一瞬だった。

目の端にぱつと赤い物が弾けた。

それが雨のように畳に降り注ぎ、なにかが目の前を転がった。今さっき見たばかりの、虎の顔を持った蜘蛛の化け物。その黄色い目はより霞み、もはや目の前にいる私を見ていなかった。

ぐらつと意識が揺らめいて、視界が回る。気絶しかけた私を鮮やかな鮮血にも似た腕が、鉤爪のついた足から抜き取る。

ガクガクと膝が笑う。気絶しなかった自分を褒めてあげたい。

首を落とされても蜘蛛の体は固まっているかのように倒れもせず、ただ血を流してそこに佇んでいた。

その光景に、畳の上に下ろされた後も、腰が抜けて立ち上がることが出来なかった。

「あゝあ。部屋が台無しだ」

つんと爪先で、鞠のように土蜘蛛の首を転がす。口から耳から血が止めどなく流れ、畳に赤い水たまりを作る。

呆然とそれを眺める私に、鬼が近寄り傍にかがみ込む。

「怪我はないか？」

鬼が私の顎をとらえ、目を合わせる。

私は微かに、顔を上下に動かした。

「し、死んだの？」

「ああ」

「逃げそびれたって……」

「余計なことを話してたナ」

鬼は顎を離すと立ち上がり、盛大にため息をつく。

しかしその顔にはどこか笑みを浮かべて、皮肉った表情を作ると
呟いた。

「まったく。とんだ茶番劇だった力ナ」

赤く濡れた紅い手がひらりと舞う。

すると一瞬にして、襖に赤い実が幾つも実った。

第二十怪 茶番劇（後書き）

前回は引き続き、分かりづらかったかと思います。
がんばりましたが私の文章力の限界でした。
でもめげずに書いていこうと思います！
お付き合い頂いた方、どうもお疲れ様です。
ありがとうございました。

第一怪 金糸雀

「鈴音。何か欲しいものはあるか？」

「欲しいものはないので、外に出してください」

「それは出来ないかな」

にべもなく鬼は言う。

蜘蛛の騒動が終わり、私はまたもや籠生活を余儀なく送っていた。友達が一人逃げそびれたという事実はどうやら本当らしく、鬼はそれに関わる話をするとはひどく不機嫌になった。それなのに、ここ最近には欲しいものはないかと訊いてきたり、色々なものを私に贈るようになった。

かんざしや、手鏡、扇子。子鬼が言うには、どれも上品かつ、一級品らしい。

これが鬼からじゃなかったら、どんなに嬉しかったか。いや、そもそもかんざしとかしないから、いくら豪華でも馴染みが無いので、イマイチな反応しか出来ないのだけだ。

「まあ、良い。お前にこれをやろう」

手に持っていた包みを広げ、小さな化粧箱を格子の間から私に差し出した。漆塗りの上等なものだと鬼は言う。

「お前もあと少しすれば、女になるからナ」

「……」

ねえ、ちょっと。それはどういう意味？

私がまるで女じゃないみたい。失礼だわ！ そりゃ、胸はまな板同然だけど。

でも、あと数年経てば胸だって顔だってもっと女らしくなる……はず。

いやいや、今はそんな事よりも大事なことがある。

「友達はどうなったんですか？」

「……」

今度は鬼が顔をしかめる番だった。

口をへの字にして私を睨みつける。思わず息を呑んでひるんでしまっが、今はびびっている場合じゃない！

「私は鬼さんと契約しました。知る権利があるはずですよ」

権利なんて大層な言葉を使ったことはなかったけれど、今はあえて使う。鬼は大きく息を吸い込むと、威嚇するように胸を反らした。私を睨む目がより一層鋭くなる。

ま、負けないんだから！

「契約成立していないって事ですよね？」

震える体を、両手で抱えるように押さえつけながら言った。

「まあ、な」

片眉を上げて目を細めて、鬼は顔満面に不機嫌だと表す。しかし

すぐ口元をにいつとつり上げ、こちらに笑みを向けてきた。

「だが、それも直に片が付く。お前の友の居場所は分かっているからナ」

「え！ そうなの！？ なら、会わせて！ 無事かどうか確かめたいの！」

「だ・め」

ぺろりと真つ赤な舌を出して意地悪く笑った。私が抗議の声を上げようとすると、ぺしつと額を軽く叩かれる。

「もうお前を籠から出さん。いゝ子にできなかったんだからナア」

「だって、開いてましたよ！？」

「でも出て良いとは言っていないハズだろ？」

うつと言葉が詰まった。

ちなみに私は人魂の事を鬼には話さなかった。あれは鬼とは関係のない、全く別の意図があると思った。

もしかしたら淡藤局さんあたりが仕掛けたものかもしれないし、下手なことは喋らない方が良い。

「今後は食事も風呂も俺が直々に世話する。ありがた〜く感謝するよう」

するわけないでしょ！

心の中で言い返す。

やっぱりまだ鬼が怖いと思っている自分がある為、そう何度も鬼に噛みつく勇氣はなかった。

「ああ、そうだ。もう一つ。こいつもやろう」

籠の中に何かを放り投げる。

投げられた物を手にとって広げると、淡い黄色に裾の方になるに連れて、綺麗な黄緑色が芝生のように広がっていた。

「金糸雀の羽色に似せた長襦袢だ」

「きんしじゃく？」

「ああ」

羽っていうくらいだから鳥の名前かな。

この色使いを見たところ、カナリアとかインコぐらいしか思いつかないけど。

にしても、綺麗な着物。

手触りも良いし、色も明るくて優しい。

「金糸雀は良い声で鳴くらしい。お前もその鳥のように、さえずり方でも覚えたら良い」

鬼のいらない一言で、せっかく綺麗な物を見て気分が良くなっていたのに、すぐさま嫌な気持ちになる。

「要りません。今頂いている分だけで足ります」

そつぽを向いて鬼に突き返す。

「まあそう言うナ、鈴音。活きが良くなくては飼っていても面白くないからナア。前のように俯抜けられてもつまらん」

なるほど。そういうこと。

色々贈り物をくれるのも、欲しいものがないかと訊くのも、おもちゃの電池切れを防ぐ為ってことね。

「結構です」

「ま、お前の好きにすればいいカナ」

鬼はおもむろに立ち上がり、籠の鍵を開けた。そして座っていた私の腕を掴み、立つよう促す。

「久しぶりに酌でもしてもらおうか。今日は外で花見でもしようカ」

「外に……出るんですか？」

見開いた目で鬼を見る。

外に出ることがなかった私からすると、とても魅力的に聞こえた。そしてそれと同時に、あの蜘蛛のことも思い出す。

あんな危ない妖怪がうろろしているかもしれないのに、お酌なんて暢気なこととしていられない。しかも、私が今着ているのは動きやすい服装ではなく、お雛様みたいな服装で（十二単ではないけれど）大変動きにくい。逃げるどころか走ることすら難しい。

「ああ。闇の花見も、なかなかのモノよ」

良い酒も手に入つたしなと、上機嫌に笑む鬼。
私はそれを、内心複雑な気持ちで見上げた

第二怪 枝垂れ紅梅

まあ、ね。籠から出さないと言ったそばから外でお酌なんて言うから変だな、とは思っていたけど。まさか『籠ごと』外に出されるとは思わなかった。

鬼に腕を掴まれて立ち上がる。鬼はそれを確認すると、大きく腕をなぎ払った。

足下から紅い火が大きな波紋のように広がり、轟音が鳴り響くと同時に、畳が波を打って揺れた。よろける私を腕で支え、鬼が手をひらりと舞わせる。紅い火が燃え上がり、視界を覆った。

なに！？

何がどうなってるの！？

怖くなって両手で顔を隠し、指の隙間から辺りをうかがう。炎の波が向こうの闇に広がって消えていく。途端にしんと静かになって、何の音も聞こえない。

目を瞬かせてみるけれど、指の間から見えるのは闇だけだった。

「良いところだろう？」

「え？」

鬼は私の両手を顔から下げさせ、前を向かせる。目に映るのは夜より深い闇があった。あのお化け屋敷独特の湿った空気と匂いがそこに充満していて、背筋がすうっと寒くなる。そして目が暗闇になると、籠の向こうに広がる星のない真っ暗な空と、すぐそこにあ

る真っ黒な沼が目に入った。

籠の格子を掴んで沼をのぞき込む。底の見えない沼の水面からは、蓮のような花が儚げ光を放って咲いていて、それらを見下ろすのは刃のような深紅の三日月だった。

「……」

ごくりと生唾を飲み込む。

はつきり言つて、幻想的というより不気味だった。

沼の周りは草が生い茂っていて、他には何も見えない。時折、風が湿った空気を運ぶと、むこうの暗闇の中に山々が姿を現し、また闇に沈むのを繰り返していた。

「さ、酌をとつてくれ」

鬼がひょうたんを押しつけてきたみたいで、どんと背中に衝撃を覚える。

ぎぎぎつと鬼に顔を向けると、震える指で辺りを指さした。

「あ、あの、ここここ、ここは大丈夫なんでしょうか？」

「んあ？ 何のことかな？」

「いかにも何か草むらから、出てきそうなんですけれど」

「ああ、たまに蛇やら河童が出てくるナア」

「蛇に河童あ！？」

叫んで、格子から離れる。

静かな水面は鏡のように紅い月たちを映すだけだが、突然なにかが飛び出てきたら堪らない。四つん這いになりながら籠の中央に移動する。

「なあゝに、安心しろ。お前が酌してればなにもないさ」

「嫌ですつ。ここならあの部屋に戻った方が良いです!」

ぶんぶん首を振って鬼の着物の裾を必死に掴む。

「かかか、帰りましょう!」

「お前なア……」

ため息をつく、ゴロリとその場に寝そべり私の着物を強く引いた。突然の事に私は小さく悲鳴を上げて、鬼の腰の上に倒れかかり鼻を強く打った。

もう、低い鼻がさらに低くなるじゃないつ。

「せゝっかく鈴音のワガママをきいてやったのに」

紅い長い指で私の眉にかかった前髪をかきあげると、口角を上げた。

鼻をさすりながら鬼の指から逃げるように、上体を起こす。

「た、確かに言いましたけど、まさか、こんな、心霊スポットみたいな所だなんて、思わなくて」

虫の鳴く音もなくただ風が草木を撫でる音しか聞こえない風景を見やり、私は震え上がった。先ほどからじわじわ嫌な汗が背中を濡

らし始めていて、悪寒をさらに強めている。

ああ、もう、早くここから逃げたいっ。

「だから言っただろう？ 考え直した方が良いつて」

「だって、お風呂場から見えた景色は素敵だったから……」

がつくりと肩を落とす。

籠より外の方が気分転換できると思ったのに、これじゃあ気分が滅入っちゃう。露天風呂から見えた月も、今見上げればホラー映画の蝙蝠でも横切りそんな気味の悪い三日月にしか見えない。

でも露天風呂が素敵だったからと言って、外が素敵だと安易に考えるのも悪いか。

はあと溜息を吐いてまた肩を落とした。

「おい、鈴音」

ちよいちよいと、再度落とした肩をつつかれる。

「酌。いい加減に酌をとれ」

振り返った胸にずっとひょうたんを押しつけられ、両手で受け取る。

本当にここで、お酌するの？

信じられないと眼差しで訴えてみる。

「そら、しゃあなく」

「ででで、でも」

「それとも俺にこの場で塩漬けにされる力？　だったら」

「やりますっ」

鬼の言葉を遮って半ばやけ気味に手を挙げた。
もうっ、やりますよ。

やればいいんでしょ！！

「美味しい酒だナァ」。お前も飲むか？」

「まだ未成年です」

差し出された盃に一瞥して首を振る。

辺りは相変わらず静かだった。草木も眠る丑三つ時って、こんな感じなのかな。さっきから何度めかの溜息を吐いて辺りに目配せをする。

私が住んでいるところは山が見えるし、都会じゃないけどコンビニもあるし、街灯だって道行く道にきちんとある。こんな真っ暗闇な所じゃない。

籠の白い格子から何度も目を凝らして空を見上げて、星一つ見つけることが出来なかった。見えるのはたまに紅い三日月を横切る黒い雲だけだった。

「静かですね」

気を紛らわすように声をかける。
静かすぎて自分の落ち着きのない鼓動がよく聞こえてくる。

「ああ。たまにはこんな酒の日も良いかな」

本当に殺風景な光景。

ほのかに灯る蓮の花も、空の闇に押しつぶされて今にも消えそうだった。

嫌な風景だなあ。全然落ち着けない。

「あの、この常闇はどこまで広がっているんですか？」

ふいに浮かんだ疑問を口にする。

「んん？」

「どこまでも真っ暗なんですか？」

「お前は面白いことをきくなあ」

そう言っのんびりと体を起こして、盃を差し出してくる。そこにひょうたんの口を傾けてお酒を注ぐ。

「ここはな、人の闇ほど広い」

ぐいっとひと飲みして、鬼は言った。

「人の闇？」

「ああ」

「それってどういう意味ですか？」

「そのままの意味ナ」

意味が分からない。

マイナスな感情ってことかな？

私の腑に落ちない表情を見てか、鬼がまた口を開いた。

「今もなお、広く深く、この常闇は大きくなっている」

「今も？」

「ああ、善い奴ほど鬼が……ってナ」

「え？」

また意味が分からなくて首を傾げてみるけど、鬼はお酒を一口飲んでそれ以上何も言わなかった。

私はただただ口をつぐんで、膝の上においた両手を結んだ。

また息の詰まる空気が流れる。えっとほかに話題は……。

「あ、そういえば、お花見るんじゃないかったですか？ どの木を見るんですか？」

沈黙に耐えきれなくなり私は口を開いた。そしてきよろきよろ辺りを見回して目を懲らす、見えるところに木らしい木は一本もない。枯れ木すらない。

どこにお花見できる木があるんだろう。

「ん？ ああ、そうだったナ」

カツつと乾いた音が響くと、鬼が牙で盃をくわえて立ち上がり、ゆったりとした足取りで籠から外へ出た。

「なあ鈴音。お前は梅が好きか？」

「梅、ですか？」

梅は好きだけれど、特別好きってわけじゃないし。でも、突然なんでそんなこときくんだろう。

小首を傾げながら鬼の動向を見守る。何かするつもりなのかな？鬼は水面に近寄り、口にくわえた盃を手にして、その上にもう片方の手で拳を作った。

一体何をしているんだろう。

目を細めて凝視しても、よく見えない。鬼が盃を傾けさせる。すると闇の中に水音が響いた。鬼が何か沼に落としたみたい。

「あの、何しているんですか？」

紅い瞳がちらりと私に向けられる。長い指を少しすばめた唇の前で立て、ニヤリ笑んでみせる。

その仕草が妙に艶っぽく見えて思わず心臓が鳴る。

唇から指を離し、水面に向けて伸ばす。手のひらを上へ向け、ゆっくりゆっくり、手招きするように上げていった。

暗い水面にいくつもの紅い星々が浮かび上がる。それらが勢い良く水しぶきを上げて、空の紅い月へ伸びた。

沼から生えたそれは鬼の背を越え、ぐんぐん伸び、私がめいっばい見上げるとこまで背を高めるとやっと止まった。

それを見て私はようやく、それが紅い小さな花を雨のように降らせる梅の木だと分かった。滝のように水面にまで降り注ぐ紅い花が、辺りの不気味な雰囲気をはらり変えて神秘的な空気を漂わせている。

「これ、枝垂れ桜じゃなくて、枝垂れ梅？」

「ああ。綺麗なやつだろ」

腕組みして得意げに言った。

大きな大きな、雨のように紅い花を散らす梅の木。籠のそばに寄って見上げ、溜息を吐いた。

「すごい、綺麗……」

枝から雫がこぼれ落ち、沼の水面に波紋をつくる。風が木を撫でると、長い枝が女性の髪のように紅く、艶やかに流れた。

その光景にもっと近くで見たい衝動に駆られ、籠の出入り口に手をかける。

こんなにすごい梅の木を見たことがない。桜や藤の花を見て感動したことはあったけれど、梅の花がこんなにすごいなんて！ 今、手元にデジカメがあればいいのに！

「あ、あれ？」

白い格子を押すがビクともしない。

押す場所を間違えたかな？

辺りの格子を見比べるが、きちんと出入口部分を掴んで押している。それに今は鍵なんてついていない。

「なんで開かないの？」

「おい鈴音」

呼ばれて、さつと顔を上げる。

梅の下で紅い目が細くこちらに視線を投げている。

「お前は籠から出るんじゃない」

「せっかく綺麗な梅なのに。もっと近くで見たいです！」

「だ・め・ダ」

「でも」

「コイツを見ただけでも有り難いと思え」

「だからって籠の入り口に呪いをかけるなんて、ひどいじゃないですか！」

わざわざ籠に私を閉じ込める術をかける程、鬼は外に出したくないの？ 本当に一生、ここから一步も出さないつもりなの？ 何にしたってひどい！ まさかお風呂も籠ごと移動するの？ そんなことしたら畳が傷むじゃない！

「ん？ 籠に呪いなんぞかけてないが？」

え？

罵る言葉を考えていた頭が、ピタリと止まる。

呪いをかけていない？

嫌な予感を覚え、そろり、足下を見やる。

暗がりな足下の格子に、小鬼とは違う緑の塗れた手が、がしりと出入り口部分を掴んでいた。

その手元をたどり、沼から伸びた苔色の腕に目を向ける。

よせばいいのに理性に反して沼に視線を移すと、そこに広がる無数の小さな黄色い目がなんどか瞬きした。そしてそれらとバツチリ目が合った私は、あつと言つ間に失神したのだった。

第三怪 青一点

どこからか、三味線の音が聞こえる。

雅な音楽に睡魔を呼び寄せる長唄。なんだか懐かしい。おばあちゃん
の優しい声も聞こえてきそう。

そんな事を思い出しながら心地よく眠っていたのに、誰かがゆら
ゆら自分の体を揺さぶっている。

もう、よしてよ。自分を揺らす何かを手で払いのける。なんだか
手がべったりする。気色悪いと思いながら、うつすらと目を開く。

「うつわあああ」

変な声を上げて、私は大きく跳び退く。格子の外から黄色く光る
小さな丸い目が、蛍の群のように自分を囲んでいたのだ。まるで珍
獣でも見るかのような、そんな好奇の眼がふんだんに自分に降り注
いでいる。

「な、な、な」

「おお、目が覚めた力」

声が聞こえると同時に、格子の外の黒山ならぬ緑山がすつと退い
た。退いた先には鬼が梅の根本であぐらをかいて、誰かとお酒を飲
み交わしていた。

「さすが旦那。ずいぶん活きの良いのを飼っていますな」

高い猫なで声で、誰かが鬼に酌をしている。目を細めて隣の人物

をよく見てみる。

水掻きの付いた手に深緑の体、とがった口に頭の上には丸いお皿。そして口元に筆先のような髭が伸びていた。あれはもしかして、河童？

そこから視線を外して、上目遣いで辺りに視線を走らせる。いつの間にか沼を河童たちが囲って宴会を開いて盛り上がっていた。歌い踊る河童がいれば、相撲を取ったり、お酒の飲み比べをしている河童もいる。そんな緑の中に一人、河童とは違う人影が見えた。

沼の側で腰掛け、三味線を鳴らして艶やかな口からは長唄が流れている。生暖かい風が吹けば、そのしなやかな長髪がなびいた。

「いや本当に元気の良い人の子だ。尻子玉抜いても良さそうだし、孕ませても良さそうだ」

孕ませ……！？

素早く不穏な事を言った河童へと振り返る。こちらには見向きもせず、せっせと鬼に酌をしている髭の河童。確かに今、この老河童が孕ませたというのって言った！

一応、孕むって言葉は知っていたけれども、それを耳にする場面に出くわした事が無かったせいかな、いやに動揺してしまう自分がいた。なんだかすごく不愉快というか、生理的に受け付けられない。真っ青になって鳥肌がたっている腕をさする。なんだか気分悪い。

「こいつはまだ子供だ。それに孕ませたら面倒になるだけかな」

「ははは。左様で」

髭の河童は相づちを打ちながら鬼の盃にお酒を注いだ。うーん。安心して良いのか、怒って良いのか。とりあえず、そういう対象になっていないことにほっとする。

「鬼様。人の子も良いですが、わたくしの唄も聞いて下さいな」

凜とした声に、その場にいた全員がそちらへ振り向いた。沼のそばで三味線を弾いていた髪の長い女性が、にこりと鬼へ微笑んでいる。

「聞いているさ。唄の君」

うたのきみ？あだ名……だよな。きつと。

その人が青い着物をゆらりと揺らして、幽霊のように沼の上をつうつと滑るように渡る。鬼のいる岸についたとき、彼女の影を見て思わず「えっ」と声を漏らした。

着物の裾からは見えるはずの足はなく、代わりに太くて青い蛇の胴体が見えた。どうにかして人魚の見間違えと思っていたかったけれど、鬼とそのそばにいる河童を長い胴体で囲むのを見て、改めて蛇だと認めた。

「蜘蛛の一件、聞きましたわ。もう金輪際、蜘蛛なんかおよしになつて、わたくしの歌声をもっとお耳の近くで囁かせて下さいまし」

艶っぽい声と眼で鬼の方に白魚の手をかける。しかし、その横で青い鱗を忌々しげに叩く老河童。

「おい、濡れ女。邪魔だ！　今ワシが酌をしていたんだぞ」

「臭い老いばれ河童はだまって頂戴」

ひと睨みして鬼と河童の間に無理矢理割って入る。その際河童からひょうたんをちゃっかり拝借して、鬼の盃に注ぎ、また微笑む。

「お酌ならわたくしが」

「おお、すまないカナ」

「今度は是非、わたくしの所へも通つて下さいな。近頃お屋敷へのお招きがないので、寂しいですわ」

彼女の表情はまさにウツトリという言葉がぴつたりだった。

なんというか、あの口裂け鬼のどこが良いんだろう？ ただ単に媚びを売っているだけなのかな？ それとも本当に好きなのかな？ 青白い顔なのに、頬だけをほんのり赤らめる彼女を眉を寄せて眺める。ちらり鬼の方も見てみるけど、鬼もまんざらじゃないみたい。

「なあなあ」

「わっ」

裾を引っ張られ、反射的に飛び上がる。

私の着物の裾をむんずと掴んでいる手元を見て、目を見開く。今裾を掴んでいる一人をのぞいて、四、五人の河童たちが格子の中に手を入れ、私の着物を掴もうと伸ばしていた。慌てて羽織っている着物を脱ぎ捨てて、手の届かないところへ逃げる。

「逃げるなよあ」

「もっと近くに来いよ」

「お前、人間だろ。触らせてくれ」

無理！ それに怖い！

気が付けば、映画で見たゾンビみたいに、前後左右から無数の腕が自分に伸びてくる。必死に腕で体を抱えて小さくなるが、河童の指先が自分の体に何度も掠める。

「こら！ よさないか！」

手を鳴らす音が河童たちの動きを止めた。腕を伸ばしていた河童たちが、そちらをむいて拗ねたように不満の声をあげる。

「だって頭あ。俺たち、人間をこんなに間近で見たことないんすよ。頭達の代は良いけど、俺らはいつも遠巻きにしか見ていないんだから」

「お前はまだ良いよ。俺なんか、常闇から出たことないんだぞ」

そーだそーだと、格子の周りにいた河童達が騒ぎはじめたが、鬼の横に座っていた老河童が立ち上がり、雷鳴のように一括すると皆黙った。

「紅い鬼様の人間だぞ。怯えさせるんじゃないっ」

このひと言で、しぶしぶ河童達が格子から腕を引っ込める。それでも名残惜しそうにきょろりと動く眼達が私を捉えていたので、ほっとする事が出来ない。

それにしても人間を見たことない妖怪がいるんだ。以前子鬼が話していたみたいに、人の世界に行くには偉い妖怪の許可がなければいけないみたいだから、生身の人間を見たことが無い妖怪がいてもおかしくはないと言うことが。

「ちえつ。尻子玉抜こうと思ったのに」

振り向きざまに私を見ていた一人の河童が呟く。

「お前みたいなのが出来るわけ無いだろ」

「なんだとお！」

格子のすぐ側で取っ組み合いが始まり、周りの河童達がやんやとはやし立て、二人を取り囲んだ。これでやっと注意がそれた。ふうと小さく息を吐き出す。

ふと、思い出して紅い鬼へと視線を移すと、鬼の肩には下半身蛇の女性がもたれ掛かり、何か話しているみたいだった。ずいぶん積極的な女の人のね。

鬼は皮肉そうな笑みを浮かべて、休まず口に酒を運んでいる。ちらりとこちらを見ると、にいと口角をあげた。

なにその人を馬鹿にした笑みは。腹立たしい感じがして、むっとしてしまう。

「人の子」

「え？」

振り返るとすぐ後ろに、紅い鬼の横に座っていた老河童が佇んでいた。

「うわああ」

何度めかの叫び声をあげて、立ち上がる。その声に一斉に周りの河童達がこちらを見た。

「あ！ 頭あ、ずるいつすよお」

「俺も入れてくれえ！」

「黙らんかつ！ まったくイタズラ小僧どもめ」

老河童はぶつぶつ文句を口にしながら、足下に落ちている私がさつき脱ぎ捨てた着物を拾った。

「ほら、羽織れ。風邪をひかれては、まずいからな」

苦い顔をしながら私の胸に突きつけた。

人間が嫌いなのかな。私が着物を受け取ると、ふんと鼻を鳴らし、籠から出ていく。そして格子から覗いていた河童達を猫でも追い払うかのように、しっしと手を振った。

「さて、そろそろ行こうカナ」

鬼がおもむろに立ち上がり、盃をくわえた。

「もうお帰りになられるのですか？」

「ああ」

「そんな。寂しいですわ」

すぐるように鬼の腕に体を寄せる。その俯き加減が本当に悲しそうで、今にも伏せた目から涙がこぼれそうだった。そんなにこの鬼

と離れるのが嫌なの？ 私には理解しがたかった。

「お願いします。もう少し、お側においでくださいまし」

「唄の君」

ずっと長い指で彼女の顎を上げる。

「すまないが、人の子をそろそろ連れて帰ってやらねばいけないでナア。続きはまたの機会にしてくれ」

「そんな」

はらはらと彼女の目から透明な雫がこぼれた。

もしかして、本当にこの鬼のことが好きなのかな。話の流れから久しぶりに会ったみたいだし。なんだか可哀想。

「じゃあ、な」

口元をつり上げながら、白魚の手からするり、鬼が離れる。彼女は紅い腕が離れた後も、名残惜しそうに宙に残った手をそのままにし、やがてそれを胸の前で堅く結んで、整った唇も同じようにした。鬼は振り向きもしない。お酒を飲んで上機嫌に鼻歌を歌っている。なんて非情なんだろう！ ああ、見てられない！

「あの一」

思い切って、だけれど遠慮がちにその二人に声をかけ、手を挙げる。

「私だけ帰っても良いですよ」

鬼ばかり見ていた瞳が、初めて私に向けられる。ぽかんとしている彼女に、私はなるべく親しげに言った。

「私は先に帰りますから、遠慮せずお姉さんは鬼さんと一緒に飲んで下さい。鬼さんも」

言いかけて、突如喉が閉まるような感覚に襲われて黙る。目の前から刃物の切っ先を突きつけられているような視線を感じて、体が強ばる。気が付けば鬼が顔をひきつらせて、こっちを射殺さんばかりに睨みつけていた。

な、なにかまずい事言ったかな。気を利かせたつもりだったんだけれど。

「お前さんがいったい、どうやって帰るんだア？」

ずんずんこちらへ大股で歩いてくると、格子越しに私を見下ろした。あまりの凄みに体が縮こまる。

「歩いて帰るのか？ 泳いで帰るのか？ それとも飛んで帰るのか？ ん？」

「すみません……ごめんなさい……」

俯いて震える。

しばらく誰も音を起てなかったが、鬼が小さく息を吐くと声を上げた。

「すまんナア、唄の君。躰がなくなってなくてナア」

梅の根本で佇んでいた彼女が呆然とした表情で、一瞬なにを言われたのか分からなかったみたいだが、すぐにまたにこり笑みを浮かべる。

「いえ。お可愛らしいですわ」

口元を袖で隠し、ふふつと声を漏らしながら応えた。

鬼は沼の側で座っていた河童にも向きなり、ひらりと手を振った。

「今日は楽しめた。また飲み交わそう」

「今度は邪魔など入らんよう、ワシの川でおもてなし致しましょう。ではまた後ほど」

周りの河童を促しながら、頭を下げ、他の河童達も彼に習って頭を下げた。

鬼が人差し指を立て、大きく息を吹きかける。そこから紅い炎が梅の木へまっすぐ走ると梅の木は大きな火柱になり、竜巻のように渦を巻いて沼の中へ消えていった。

鬼は無言で籠の中へ入ると、私の腕を勢いよく鷲掴みにした。すごい力で掴まれたので、痛みに顔を歪ませる。痛いと声を上げそうになったけれど、鬼の憤怒の表情を前にして飲み込む。

ここへ来たときと同じように鬼が大きく腕をなぎ払うと、紅い炎が籠を覆い、視界いっぱいに広がる。やがて次第に炎が消えて静かになると、灯籠の柔らかな光が白い籠と閻魔顔の鬼の横顔と、そして情けない顔をした私を照らしていた。

「鈴音え」

底から響いてくるような低い声に肩が跳ねる。横を向いたまま、鬼が紅い目だけをこちらへ向けてくる。腕を掴む力がさらに強まる。い、痛い……。

「いつたい、どついうツモリだあ？」

痛みと恐怖で視界が歪む。

そんなにあの女性に言ったことが悪かったのかな。

「ごめんなさい……」

顔と同じくらい情けない震える声で謝り、目頭を熱くした。

鬼は乱暴に私の腕を放すと籠から出て、また乱暴に出入り口を閉め、見慣れた南京錠をかけた。

「お前は今日は飯抜きだ！ 分かったなっ」

吐き捨てるように言って、鬼は部屋から出ていった。閉じられた襖の向こうで、どすどす大股に歩く鬼の足音が闇に消えていくのを感じた。

私は安心からか、恐怖のためか。その場に倒れこんで一人静かに泣いたのだった。

第四怪 青息吐息

お腹減ったなあ。ぐうと唸るお腹を抱えて、何度目かの寝返りをうつ。今現在、私は余計なことを言った為に、食事抜きに刑に処されている。

なんとか口に入れるものが欲しくて、試しに子鬼を呼んでみただれども何の返事もない。あの黄色い人魂のことも気になっていたから、淡藤局さんも呼んで訊ねようと思っていたのに。

仕方ないので横になって眠ろうとするけれども、空腹のために寝ることもままならない。よりによって今日はいつも以上にお腹が減っているらしく、お腹が何度も抗議の声を上げている。

ちらつと部屋の隅に目を向ける。灯籠はまだ明るくならない。どうしよう。ああ、お腹減った。大きく息を吐いて目を閉じる。

「お腹減ったあ……」

先ほどから何度も口にした言葉を呟くと、お腹が応えるようにぐうと鳴る。灯籠が明るくなったら鬼の機嫌も直っているかな。じゃないと辛すぎる。お風呂もちゃんと入りたいし。

大きく息を吐いたその時、ふと無性に視線を感じてパツと目を見開く。すると目の端に格子の外から見下ろす紅の瞳があった。

「わっ」

ガバツと起き上がり、目を見開いた。鬼は市松模様の赤紫の浴衣を着て、腕組みしながら格子の外に立っていた。慌てて布団から這い出て、貰ったばかりの長襦袢を羽織る。これを使うのはちょっと癢に障るけれど、薄い浴衣のままでは気が引けた。

「い、いつの間に。黙って何しているんですか」

「腹が減ったのか？」

にいつと意地悪く笑む。

「口は災いの元だナア」

皮肉げに言つて、格子に顔を寄せた。

「何しに来たんですか？」

鬼の態度にむつとして不機嫌な表情を露骨に浮かべた。

お腹が減っているときに、わざわざ嫌味でも言いに來たつて言うの？ 乱暴な感情が湧き出てくるけれども、あの鬼の怒った顔が頭を過ぎつて、すぐに引つ込める。

もう怒っていないんだろうか？ 探るように鬼の顔を見るが、今はいつも通りのニヤニヤ顔をしていて、怒っている様子はない。こっさり安堵の息を吐いてしまう。

「いやなに、ちよいと可哀想に思えてナア」

白い格子に近づいて、見下ろすように私の顔をのぞき込むと

「どうだ鈴音。また勝負しないか？」

「勝負……」

勝負、ね。頭の中にはあの視界いっぱい紅い光景が浮かぶ。う

「ん、嫌な思い出しかない。意図せず渋い顔をしてしまう。それを察したのかどうかは分からないけど、鬼は勝手に話を進め、ある提案を出してきた。」

「お前が勝つたら、そうだな。きちんと三食飯をつけてやる」

「三食も!？」

いつも二食だったのが三食も?! ぱつと勢いよく顔を上げるが、鬼は人差し指を立てて私の前に突きつけると「ただし」と付け加えた。

ぴたりと喜んだ顔が強ばる。ただし?

「今回は俺が勝つたら……」

勿体ぶるように鬼は一度そこで区切った。にやにや笑うばかりで先に話そうとしない。何なんだろう。

「勝つたら、なんです?」

焦れて鬼に先を促す。ゆらり深紅の瞳が妖しく光ると、顔を近づけて囁いた。

「心を縛らせてもらっ」

心を? 眉を寄せて鬼を見つめ返す。

心って縛れるものなの? 不可解な表情を浮かべる私に、鬼は無表情に小さく頷いた。なんだか怪しい。怪しすぎる。

「嫌です」

訳の分からない取引はしたくない。私は首を横に振った。第一心を縛るなんて、出来る出来ないはともかく、ろくなことじゃない事だけは確かだ。私はもう一度絶対にという言葉を取り付けて嫌だと繰り返し返した。

「ほお？　じゃあ、いつ飯が出てこなくなっても良いんだナ」

「そ、そんなのずるいですっ」

口をとがらせて、呟く。しかし私の思いとは裏腹にお腹がまたぐうと鳴る。

うーん背に腹は代えられないってこのこと？　でも、ご飯だけで訳の分からない約束するのもちょっと……。目を泳がせて両手をもじもじさせる。少しの間考えていると、ふと、ある案が思い浮かぶ。

「あの、一つ、追加しても良いですか？」

「うん？」

「もし私が勝ったら、三食のご飯と、残っている友達が誰なのか教えて下さい。そして会わせて下さい」

これで無理なら断ろう。私は決心した。見上げて鬼の返答を待つ。ふむと鬼は顎に手を当てて目を閉じた。そしてしばらく考えをめぐらすと、口角を上げて目を開けた。

「よし、分かった」

鬼はにやり笑い、紅い目を細める。

「お前が勝てば、飯と友を。俺が勝てば心を。それで良いな？」

「はい」

両手で拳を作って頷いた。

鬼はぐつと突き出した手のひらを上に向け、開いた。紅い手の中にあつたのは、大豆ほどの白と黒のサイコロが二つ。

「お前、賭博を知っているか？」

「え？」

鬼はまた懷から黒い、鬼の片手ですっぽり包めるほどのぐい飲みを取り出し、目の前に掲げて、まるで品定めするように眺めた。

「丁か半かを賭けるんだが」

「ああ、はい。知ってます」

おじいちゃんと一緒に、何度もテレビで時代劇を見ていた。悪党の根城は賭博か悪代官と相場は決まっっていて、その後には正義の御老公か、お侍様からお仕置きされるのだ。丁か半を賭けるシーンも何度も見ている。

ひたりと鬼を見、唇を結んで、顎を引く。覚悟は出来た。

「ああ、念のために言っておくが、このサイコロは術が一切効かない。負けたからって言いがかりはきかんぞ？」

言いながら鬼は私に座るように促し、自分も畳に腰掛けた。

「もちろんです」

まっすぐ見つめて言い返し、私も格子のそばに正座する。そんな私にほんの一瞬、対の紅が目を見開いたが、すぐ猫のように細め、カラカラとサイコロを手のひらで踊らせた。

「では」

言っでぐい飲みの中にサイコロを放り込み、一、二回ぐい飲みを鳴らすと、バンと強く畳に打ちつける。

「さあ、丁半賭けナア」

どっちだろう。丁度か半端か。ぐっと着物の裾を掴んで無意識に歯を食いしばる。どっちだろう、どっちなんだろう。逆さになったぐい飲みを見つめるが、中のサイコロが見えるわけもない。

「まだカナ？」

視線の上から声をかけられる。

丁か、半か。半か、丁か。丁と半。

……うん、よし。決めた。顔を上げて口を開く。

「半で！」

深紅の瞳がゆらめくと紅い手が動いて、黒のぐい飲みが傾く。じっと瞬きも忘れてそれを見つめ続ける。

まずぐい飲みの陰から現れたのは白い三。ごくつと喉が鳴る。そしてもう一つは……。鬼がぐい飲みを畳から離す。紅い陰から出て

きた黒い数字は、五。丁だ。

「ま、けた？」

さあつと顔から血の気が引く。手足と口が、わなわな震え、喉が閉まる感覚を覚える。

「いやあ、残念だったナア」

ちらり上目遣いで鬼がこちらを見やり

「俺の勝ち、だな」

そう言つてサイコロを回収した。

はあつと大きく息を吐いて、うなだれる。負けた。負けちゃった。せつかく友達に会えるかもしれないのに。これでご飯も友達も無しだ。震えてきた喉を誤魔化すように、また深くため息を吐いた。

「そんな顔をするな鈴音」

大きな紅い手が自分の頬に伸ばされる。

「悪いようにはしない」

頬にあった手は頭にまわされ、猫の背を愛撫するように何度も髪の上に滑らした。

「友には会わせんが、飯はきちんと出そう」

「え？」

「その度胸に免じて、飯は用意しようカナ」

信じられないと目を上げる。どういう風の吹き回しだろう。

意外な言葉に目を何度も瞬かせ、両目で鬼の顔を穴が空くんじやないかと言つぐらい見つめ続ける。

「だが」

ぐいつと私の顎をあげ、額をあわせると

「心は縛らせてもらつ」

鈍く紅が煌めき、目が離せないと気づいた瞬間、私は甘い感覚の波に突如飲まれた。大きな目眩を覚え、危うく格子に頭をぶつけるところだったが、外から鬼が体を支え、それを防いだ。

紅い手が改めて私の顎に添えられ、視線を合わされる。映る視界は水面のように歪んでいてよく見えない。それでも妖しい紅だけは鮮明に映った。その下で八重歯の見える口が動いているのが見えるけれど、そんなことはどうでも良い。

綺麗な紅。どうしてこんな素敵な紅を恐ろしいだなんて思ったんだろう？ 花も宝石も霞んで見えるぐらい美しすぎる妖しい紅。それがずつとこちらを見つめ返している。思考が停まって睡魔にも似たような恍惚が広がってくる。

そう言えば、この感覚は前にも一度あった。鬼に連れ戻され、名前を奪われそうになった時に、この甘い霧が自分の中に立ち込めて自分を飲み込んでいく感覚。今回もまた、それと一緒に沈んだ。底なし沼の上に立っているように、ずぶずぶ恍惚に沈んでいく。

ごめんね……。

え？

聞こえた声と一緒に、甘い霧の中に鋭くて冷たいものが横切った。火照った意識に冷水がかけられ、一瞬にして霧は退いて視界が晴れていく。

「え？」

一気に現実に取り戻され、恍惚という熱が引いて正気に戻った私は呆然とし、固まった。

今のは一体なんだったんだろう。小さな、だけれどハッキリ聞こえた声。聞き覚えはあるんだけど、声が小さすぎて、その上意識が朦朧としていたせいもあって、誰だか思い出せない。すっかり混乱して思考が停まるが、鬼の顔がすぐ目の前にあるのに気がついて跳ね上がる。

「今、何したんですか！？」

距離をとろうとして体を引くが、顎を鷲掴みにされて阻まれてしまう。私は鬼の大きながしりとした紅い手を掴んで、剥がそうと必死にもがく。そんな私を無視して鬼は呆れたようにため息を吐くと

「これもダメとはナア。ちよいと気を抜きすぎた力」

一人ごちて顎から手を離し、腕組みした。私は捕まれた顎をさすって、上目遣いに鬼を見る。

「何をしようとしたんですか？　というか、今のは何だったんですか？」

「うん？」

「呪いを、掛けていたんですか？」

「ま、そんなものだ」

そんなものって……。身構えて訊いた私の質問に、肩をすくめて気軽に鬼が言ったので、どこか拍子抜けしてしまう。鬼はぽんと自分の足を叩き、立ち上がると大きく伸びをする。

「とにかく飯は用意しよう。今日はもう眠ると良いかな」

踵を返して、いつもの襖に向かおうとした鬼に慌てて声をかける。

「ちょっと待って下さい！　今もらえないんですか？　お腹ペコペコなんです！」

「ああ、分かった分かった」

振り返らず、紅い手をひらりとさせる鬼。本当に分かっているのかなあ。眉を寄せて顔をしかめる。

それにしても、さっきのあの感覚、あの声。あれは一体……。様々な疑問と不安を抱きつつ、私は襖を開ける紅い背中を見送った。

第五怪 山吹の牙

「ごちそう様でした」

両手を合わせて頭を下げる。今日のメニューは鰻の蒲焼きと白いご飯に豆腐のお味噌汁。最近のご飯が贅沢になるときもしばしばあった。相変わらず籠の中ではあるが、今のところ鬼の反感を買うことなく穏やかに過ごしている。

鬼が私の声を合図にごろ寝をやめて起きあがる。鬼の大きな紅い足に朱色の着物を踏まれないよう、ちよつとだけ裾を引き寄せる。

「俺は今から出掛ける」

言いながらかけ盤を片手で持ち上げ、鬼はぽんぽんと私の頭を軽く叩く。それを不愉快に感じてその手を払いのけたかったが、そんなことが出来るわけもなく、ぐつと我慢してなされるがままになる。

「暇かもしれないが、まあ、のんびりしていれば良いかな」

言うだけ言つて鬼は籠の出入り口へと向かう。慌てて私はその背中へと口を開いた。

「待って下さい。あの、子鬼を呼んでも良いですか？」

「ダメだ」

鬼は首を横に振り片手で籠に鍵を掛ける。

私は肩を落とした。テレビも本もパソコンもないのに。一人では

何も出来ないじゃない。まだ子鬼がいれば色々話を聞けるし、淡藤局さんも呼んでもらえるのに。そしたらあの人魂のことも何かしら分かるかもしれないというのに。

ふうと息を吐いて、手元の朱に視線を落した。

「帰ったら構ってやろう。それまでいゝ子にしているように」

肩越しにニヤリ笑んで襖を足で開けると、向こうの闇に紅い鬼は消えていった。

正座していた足を崩して膝を寄せる。今日も耳を澄ませば遠くの方で喧噪が聞こえた。最初耳にしたときは、聞こえてくる声や音に怯えていたが、今はもうすっかり慣れてしまった。私は結構図太い神経しているのかな？ それとも人間ってそんなもの？

特に意味もなく着物の模様を眺める。朱の空に金の雲と雀が刺繍されていて、どこか可愛らしかった。籠の隅に目をやれば、鬼がくれた漆塗りの化粧箱が目に入る。中にはシンプルだけど豪華なかんざしや、細工が素晴らしい帯留めに小さな手鏡が入っていた。

はつきり言って興味がなかった。もちろん全くないと言ったら嘘になるけど、ずっと眺めていられるほど魅力的に思えなかった。もしかしたら専門家の人が見たら泣いて喜ぶくらいの逸品かもしれないけど、私にはその価値が分かりそうもない。

ふと異変を感じた。相変わらず遠くから喧噪が聞こえるけれども、なんだかいつもと様子が違っておかしい。立ち上がって木目調の天井を見上げて耳を澄ませる。上の方でまるで運動会でもしているかのように、足音や物音が騒がしく聞こえる。と思ったら途端に静かになりまた騒ぎだす。なんだっていうんだろう。

気になって天井に声を掛けるが、返事はない。何かあったのかな？

また静かになったので、首が痛くなる前に視線を天井から外し、

ふいに格子の向こうに目をやったその時。襖から見慣れない瞳がこれでもかというぐらい、見開かれた目でこちらを覗いていた。ぎよっとして立ち上がり身構える。

細い闇から襖にそり掛けられたのは、長い褐色の爪。それが襖を大きく開き濃い黄色の角が見えたかと思うと、のそりと何かが部屋に入ってきた。

何？ 誰なの？ 一気に全身の毛が逆立つような感覚に襲われ心拍数も急激に上がり、喉からドクドクという音が鳴る。手足が震えて汗が至るところからにじみ出てきた。

子鬼が騒いでいたけれど、この妖怪と関係があるの？ 額から鋭く伸びる二本の角を見て、すぐに鬼だと分かった。ただ真っ黒な長い髪が畳を引きずり、猫背でこちらを見つめている様は、今までみた妖怪とは比べ物にならないほど異様で危険な感じがした。

「だ、誰？」

籠の格子から離れて声をかける。その鬼が灯笼のすぐ脇に来たとき、その姿がより鮮明に浮かび上がった。自分と似たような格好の、緑と青の単衣を羽織り、真っ黒な長い髪が畳の上に垂れている。顔はまるで般若のような顔をしていて、下から恨めしげにこちらを睨んでいた。

「あの……」

「恨めしい」

低い掠れた声でもう一度恨めしいと鬼は言った。なにが、誰が恨めしいんだろう。

混乱する頭をなんとか押さえつけて、なるべく丁寧に私は目の前の鬼に言った。

「あの、紅い鬼さんは今いないんですけど」

途端にぎろりと睨まれ思わず口を閉じる。どうしたら良いんだろう？ 話を通じそうもない相手にどうして良いか分からず、がたがた震える手で顎の汗を拭う。

「欲しい……」

「え？」

私が聞き返したと同時に鬼は格子に飛びついた。そして激しく狂ったように格子を揺さぶり、それに対して私は反射的に跳び退いて、強く背中に格子をぶつけた。

「欲しい！ 欲しい！ お前を喰わせろ！ 全てよこせええ！」

顔に幾つもの皺を刻ませ、黄ばんだ八重歯をみせつけるように、口を大きく開いて鬼は私に怒鳴った。格子がみしみしと嫌な音を立てているが、鬼はそれでも構わず白い格子を激しく揺さぶっている。まさか……入ってくる気！？

そう思ったが早いかな、格子がプラスチックのボトルのようにひしやげ、鬼が私の首に手を伸ばした。獣の爪のように鋭い爪先が襟元を掴んだ瞬間、突然鬼が悲鳴を上げた。

「きいっ！」

聞こえた叫びに目を向けると、久しぶりに見る緑の子鬼の姿がそこにあった。子鬼は鬼の足下に槍を突き刺し、顎をしゃくって私に何かを訴えている。

「邪魔だあ！」

青い着物の裾が舞うと同時に、緑の影が宙を舞う。子鬼が蹴られる。明るい緑の上に、深い緑が鈍い音を立てて何度か転がり、少し滑った後やっと止まった。

「子鬼っ」

駆け寄ろうと一步踏み出すが、目の前の鬼がそれを阻む。長い爪が鼻先に迫り、何かを考えるより先に、すぐさま体を伏せた。頭の上を勢いよく何かが通り過ぎて頭の髪を何かが掠める。

気づくと私の体はすでに籠から出ていて、すぐ横に子鬼がよろよろと立ち上がっていた。後ろを振り返れば鬼が手前の格子と同じように、奥の格子をぐにやりと曲げていた。

「大丈夫！？」

子鬼に手を貸そうと腕を伸ばすが、いらんと払いのけられ伸ばしたものを引っ込める。子鬼は息を大きく吸い込むと槍を構えた。しばらく微動だにせず、籠からおもむろに出てくる鬼を睨みつけていたが、突然畳に足を激しく打ち鳴らした。

天井全体がガタンと揺れる。そしてまた、先ほど聞こえたドタバタという騒音が遠くから次第に強くなると、天井からいくつもの四角い蓋が外れ、緑の影がいくつも降ってきて、部屋はあつという間に緑の頭で覆われてしまう。

降りてきた子鬼の手にはそれぞれ一本槍や三つ叉の槍が握られており、大勢の子鬼が髪を振り乱している鬼を囲んでいた。

「きいっ」

裾を引っ張られ後ろを振り向く。見慣れた子鬼が開け放たれた襖を指さし、顎で行けと訴えた。

「逃がすかあ！」

鬼の叫び声を合図に子鬼たちがそれに飛びかかる。顔をめがけ飛び上がり、別の子鬼が動きを止めるために着物の裾を引っ張るが、捕まれては宙に投げ出され蹴りとばされ、鋭い爪で小さな体に痛々しい線を刻まれる。子鬼の攻撃に鬼はこれでもかと地団太を踏み、言葉ではない雄叫びを上げながら髪を掻きむしる。

狂ってる……。

髪を振り乱し、奇声を上げながら子鬼たちを一心不乱に払いのける姿を目にして、私は立ち尽くした。

この鬼はいったいどうしてこんなことをするのだろうか？ いったい何故怒り狂っているのだろうか？ 私はなぜだが、その姿に哀愁のようなものを感じた。

ドンと重い衝撃を覚えた。足を子鬼が槍の柄で強くつついたらしく、イライラした様子で襖の闇を再度指さした。

そうだ。これ以上私がここにいたら子鬼たちの邪魔になる。私は頷いて、真っ暗な闇の中へと飛び込んでいった。

しかし勢いよく飛び込んだものの、廊下は真っ暗で何も見えない。手探りで前に壁があるかどうか、確かめながら籠の部屋から遠ざかる。

それにしてもどこへ行けと言っただろう。いつも子鬼に連れられていたので道が分かるわけでもなく、とにかくひたすら足を進めた。

途中後ろの方で、叫び声や鈍い音が今いる場所まで聞こえて来ることもあったが、ここに鬼がくる気配はなさそうだ。

しかし、早いところ明るい場所に行き着かないと、このままではどうする事も出来ない。万が一、こんなところでまたあの鬼に襲われたらひとたまりもない。

襖から漏れる光を見逃さないように、慎重にあたりを伺いながら闇の中を進む。

時折聞こえる奇声に怯えながらしばらく廊下を進んだ頃、ようやく青白い光が漏れている襖に行き着く。ほっとしつつも、どこか緊張しながら探りあてた取っ手を手に掛けて、掠れた音を立てる襖をゆっくり横に滑らせた。

私は目を少しばかり見開いた。旅館の宴会場みたいな横にだだっ広い部屋。そして襖が全て取り払われた景色から見える、今にも消えそうな、まるで線で書かれたような三日月が暗い空に浮かんでいた。

部屋に入って襖を閉め、三日月の見える手すりに近寄り闇のパノラマを見渡す。暗闇のせいか建物らしい建物は見えず、あの沼の光景と同じように闇の中で様々な輪郭が見え隠れしていた。視線を下へやってみるが、より暗くて何も見えない。

そのまま身を乗り出した状態で、私は何の用意もなく手すりに強くお腹を打ちつけた。声のない、息だけの悲鳴が口から漏れて、背中に激痛が電撃のように走る。手すりが軋みを上げて私を支えたまま崩れていき、一度何かの角にわき腹をぶつけ、視界が暗い天井、赤褐色の屋根、そして真っ暗な空と赤い月を順々に映していった。

最後に目の端であの般若顔を捉えた時には、すでに自分の黒髪が視界を覆い、髪の毛が全て逆立っていた。そして次の瞬間、下っ腹がひんやりとしたかと思うと、般若顔と紅い月が上へ遠ざかり小さ

くなっていく。

私はなす術なく、両者が見下ろす中落ちていった。

声の主を捜して目を辺りに走らせれば、忌々しげに自分を見下ろす影があった。

それはついこの間会ったばかりの、老いた髭河童だった。

「あなたは、あの時の河童」

「黙れっ」

目を細めて吐き捨てると、髭河童は乱暴に私の胸ぐらを掴み上げた。

「お前など、貪欲の鬼様のものでないなら助けなかった！ まったく運の良い人間めっ」

激しく凹凸のある床へ叩きつけられ、悲痛の声を上げて咳込む。どうしてこんな乱暴なことをするの？ 体をくの字に曲げながら横目で老河童を見つめ、咳をなだめようと胸をさすった。

「ここはワシ等河童の住処だ」

「河童の？」

上体を支えながら起きあがろうとするが、また痛みが走り仕方なく体を横たえる。

冷たい床は塗れていて、自身も頭からつま先までびしょ濡れになっていた。自分の身に一体なにが起こったんだろっ。

「ああ。だがお前さんを溺死させるわけにはいかんから、正確には住処の近くだな」

「そう、ですか。あ、あの、ありがとうございます。助けてくれたみたいで」

痛みに顔を歪ませながら礼を告げる私に、やはり髭河童は渋い顔を向けるだけだった。そんなに人間が嫌いなのかな。

「とにかく紅い鬼様にお前のことをお伝えする。それまでここで待っておれ」

「あ
」

ここまでの詳しい話を聞きたかったのだが、私の声を聞く前に河童は踵を返し、暗がりへと消えて行った。

その様子を目で追ったあと、はあっと私は息を吐いて目を閉じた。

ほんとに、大変な目に遭ったなあ。

土蜘蛛の次は鬼女だなんて。この次は一体なにに襲われる事やら。心の中で茶化してみるけれど、気持ちが軽くなるはずもなく、やはり泣きたくなった。

どうして私が狙われたんだろう？ また土蜘蛛みたいに何かの計画のために襲ってきたのかな？ もしそうだとしたら、鬼の屋敷は思ったより警備が薄いのだろうか。

土蜘蛛の時は知ってて入れたんだろうけれど、今回の鬼女は子鬼達が襲っているのを考えれば、招かれざる客っぽかった。

あの鬼は恨めしいと言っていた。そして般若の顔をして気が狂ったみたいに叫んでいた。「お前の全てを寄越せ」と。

あれは、どういう意味なんだろう。

ぴりぴり肌が痛む中、様々な考えを巡らしていると、また暗がり

からひたひたという音が耳に入ってきた。河童が帰ってきたのだらうか。

「お怪我はあ、如何でしょううか」

聞き覚えのあるくぐもった声。はつとして目を見開き、声のしたほうへ視線を投げた。

暗がり立っていたのは、あの鬼の屋敷で働いていた魚の人だった。

「魚さん……どうしてここに？」

「わたくしはあ、あなた様のことを耳にしてえ、先に泳いで参りましたあ」

私のそばまでのそのそ歩いてくると、まだ濡れている着物の帯から丸くて平たいものを取り出し、傍らに座った。

魚さんはどこから泳いできたんだろう？ まさか鬼の屋敷から泳いできたんだろうか。だとしたら、そんなにここは紅い鬼のところから遠い場所ではないのかもしれない。

「これをお体に塗ればあ、痛みは引きますう」

ひんやりとした水掻きの付いた手で、私の右腕を上げる。その途端、びりつとした痛みが腕に走り、口から悲鳴が漏れた。

そんな私を労りながら、てらてらと灰色に光る手が揺れると、腕に冷たい物が触れ次第に全体を包んでいった。

それを目で確認しようとしたとき、初めて自分の上半身が肌着だけの格好だと気が付いた。

「あれ？ 私、着物を着てない」

「あなた様はお屋敷から落ちた後お、通りかかった龍の角にひっかかりい、そのまま川に潜られえ捨てられてしまったのです。そしてえそこで河童殿に助けられたのです。着物は川に入った時にい、おそらく脱げたのでしょう」

その話を聞いて目を丸くした。

龍の角に引っかかるなんて、そんな奇妙な体験をしていたんだ。暢気なことを思いながらも、その角が体を貫かなくて良かったと安堵する。

それにしてもひどい有様。薬を塗られている腕を見ると痣や擦り傷だらけで、未だに血が滲んでいる。

自分がどういう状態で河童に発見されたのか、想像もつかない。

「申し訳えございません……」

ふと蚊の鳴くような呟きが聞こえ、傷だらけの腕から魚さんに目を向ける。

「まさか、このような事にいなるとは……」

薬を塗っていた手が止まる。それから溜息のような風が私の肌を撫でると、また水掻きの付いた手が再び肌の上を滑り始めた。

「魚さんのせいじゃありません」

どうして謝るの？ とぎこちなく笑んでみせる。

すると大きな銀色の目がくるりと回り、そこに私の傷だらけの顔

が映った。

ああ、顔にも傷があるんだと、ちょっとだけショックを受ける。

「いええ、わたくしのせいです」

なんで謝るんだろう？ 首を傾げて尋ねるが、魚さんは俯くだけで何も話さなかった。やはり使用人という立場から、責任を感じているんだろうか。それとも紅い鬼にすでに怒られてしまったのだろうか。

「よく分からないですけど、こうして助けにきて、心配してくれているじゃないですか」

ふふつと笑いながら『元気出して下さい』と声をかける。

それをどう思ったのか分からないけれど、魚さんはずっと一言も喋らず、黙々と薬を塗り続けた。

またなにか気に障ったことを言ったのかな。

不安に思いながらも、私も黙って大人しく薬を塗られていた。

「もうしばらくすればあ、痛みが引いてきますう。そしたらわたくしがあ、ここからお連れいたしますう」

全身に薬を塗り終えた頃、ようやく灰色の口が動いた。

薬の入れ物を帯の間に仕舞い込み、私の衣服を整えてくれる。

「鬼のところへ帰るの？」

魚さんはなにも言わない代わりに、懷から何か飲み薬のような物を取り出すと、そつと私の口元に添えた。

「これをお飲み下さい。痛み止めです。これを飲めば眠りに落ちてえ、起きたときには着いております」

「うん、ありがとう」

私は気持ちばかり顔を上げ、口元に添えられた薬を飲んだ。魚さんはそれを確認すると私に気を使って、上げた頭を下ろすのを手伝ってくれた。

私の頭がまた横たえられる時、魚さんはおもむろに口を開いた。

「実はあわたしはあ、元は鬼だったのです」

「へ？」

突然の告白に私は目を見開き、まじまじと魚さんの顔を見た。

つるりとした頭を見ても角があった形跡はみられないし、無表情に見える顔を見ても、鬼とは似ても似つかわない。とても鬼には見えない。

魚さんは私の視線から逃げるように俯き、ぽつりぽつりと話し出した。

「これでも少しはあ、名を馳せておりましてねえ。そこらの妖怪や土地神を、見下してえおりましたあ。しかし、ある川の主の怒りがかつてえ、このような無様な姿に変えられましたあ」

「怒りがかつた？」

「ええ……」

両目で灰色の鱗に包まれた横顔をみつめ、私は頷いて続きを促した。

「わたしはあ、悪戯に川の魚を捕っては殺しい、岩を投げては川をせき止めておりました。わたしにとってはあ、ほんの悪ふざけだったのですがねえ」

愚かでしょう？ と、銀色の目がぐるりと私に向けられる。私は何度か目を瞬かせてから言葉を選び、口を開いた。

「えつとでも、今は反省しているんでしょう？ 川の主様には謝ったの？」

私の言葉に、ふるふると魚さんは首を横に振った。

「当時はあ仕返しすることばかり考えてしまい、反省などしませんでしたあ。しかし、時は流れてえ川の主に謝ろうと決めたときにはあ、川の主はいなくなっておりましたあ」

「いなくなった？ どこかに行ってしまったの？」

またくるりと淀んだ銀色が動き、どこを見るわけでもなく宙をさまよわせた。そして小さく息を吐くと一言。

「主が死んだのです」

「死んだ？」

眉を寄せた私に、こくりと魚さんは頷いた。

「川は主がいなくなりい、ただの川になりましたあ。そしてその川はあ、今やドブ川と成り果てましたあ」

深く溜息を吐いて、また消え入りそうな声で言った。

「私はもう、元の姿に戻ることがあ出来なくなってしまったのです」

それから黙り込んだ魚さんに、なんて声をかけて良いか分からず、私も一緒になって黙ってしまった。

ドブ川になったって、多分、私たち人間のせいだよな。

確かめてみようかと口を開きかけたが、何にも読みとれない灰色の横顔を見ると尋ねる気が失せてしまい、声を出すのをやめた。

お互いが沈黙してから間もなく、私の瞼は次第に重くなっていた。薬が効いてきたのだろう。痛みとともに意識もぼやけてくる。

「お薬があ利いてきたのですねえ」

「そう、みたい」

朦朧としながらも、私はやっと口を開いた魚さんに応えた。そして、まだ悲しげな魚さんに声をかけた。

「そんな顔しなくても、大丈夫ですよ。もし良かったら今度紅い鬼さんに、鬼に戻る方法を一緒に聞いてみましょう。何か、分かるかもしれないですよ」

意地悪だけどねと付け加えて、ひどく重くなった瞼を閉じる。

ぐにやぐにやと揺れる意識の中、自分の体が抱き起こされるのを感じながら魚さんがどうして私に今の話をしたんだろうと考えた。

もしかしたら、鬼にいじめられている仲間だと思って、その気持ちを打ち明けてくれたのかもしれない。何度目かに会ったときも、名前を聞いてはいけなはずなのに尋ねてくれたし、あの時から私のことを仲間だと思っていれくれたのかな。

少しばかり自惚れかなと内心苦笑していると、くぐもった声で魚さんが私に囁いた。

「あなた様は、人の世界に戻りたいのですか？」

「……え？」

「それとも紅い鬼様のところに、戻りたいのですか？」

なにを言っているの？

そう尋ねようとしたけれど、私はもう既に睡魔に抵抗する事が出来ず、そのまま眠りに沈んでいった。

第七怪 銀の瞳

「紗枝様、紗枝様」

「え……？」

一瞬誰のことを呼んだのか分からなかったが、自分の本名だと気付き戸惑いつつも目を開けた。

「お目覚めにい、なりましたかあ」

薄暗い中、自分をのぞき込む銀色の瞳と目が合い、まだ少し重い瞼をこすり気がつく。

あれ、痛みが引いてる。

瞼をこすった腕を眺めると、多少傷跡はあるが痛みも腫れも無く、痣も見あたらなかった。

すごい。あれだけの傷がもうここまで良くなっているなんて、妖怪の薬は人の薬よりも効果が大きいみたい。

何で作られているのか少し気になるけれど、妖怪の薬だということもあり、そこは知らない方が良さそうに思えて考えるのをやめた。知らぬが仏って言うしね。

「薬があよく効いたみたいですねえ、紗枝様」

くぐもった声を耳にして、腕を見ていた目を魚さんへひたりと向ける。

魚さん、今、私のことを紗枝って呼んだ……。もしかして、私を起こした声も魚さんだったのかな。

私は少し思案した後、意を決して息を吸った。

「あの」

「はい？」

「今、私のことを紗枝って……」

不安げな面もちで魚さんをみつめる。

本名を口にするのは鬼に禁止されているし、とても危険なことは多分、未だに意味がよく分かっていない私以上に分かっているはず。なのになんでいきなり私の事を本名で呼ぶんだろう。会ったのだから、片手に収まるぐらいしかないのに。

不安に眉を寄せる私に、魚さんはふつとぎこちなく笑みを浮かべながら平たい手を何度か裏返し、くるりと銀色の目を私に向けた。

「紗枝様のお名前はあ、はじめの頃にお会いした時い、紗枝様から教えて頂きましたあ」

「いえ、そういう事ではなく、鬼さんから本名は言っちゃいけないって言われていたじゃないですか」

「ここならあ、大丈夫です」

鱗と同じ灰色の唇をにこりと歪ませる。逆にそれが私にとってより不安をあおった。

魚さん、なんだか様子がおかしい……。

訝しげに表情が読みとりにくい顔を眺めた後、今自分が横になっている部屋を、落ち着かない気持ちで見渡す。

なんだか旅館の客室みたいで、床の間には墨絵の掛け軸が飾られ、部屋の隅には数枚の座布団が重なっている。広さは私がいた籠の部屋と同じくらいだ。

部屋を照らすのは、外側の薄い障子に暖色系のぼんやりとした光。籠の部屋とは違って外からは賑やかな雑踏が聞こえてきた。

やっぱりここ、紅い鬼の屋敷じゃない。

「あの、ここはどこですか？ 鬼さんのところに帰ってきたんじゃないんですか？」

「紗枝様はあ、紅い鬼様のところへえ、帰りたいのですかあ？」

わけの分からない質問に私は居心地が悪くなり、ゆっくり上体を起こそうとすると、魚さんが背中を支えて起こすのを手伝ってくれる。

私はその手が離れるのを感じた頃、魚さんに顔を向けた。

「それは、その、どういう意味ですか？」

掛け布団をぎゅっと握って、そこに視線を落とす。

あの紅い鬼のところに行きたいわけがない。でも行かなければ鬼との契約がダメになる。今はあやふやになっているところもあるけれど、私から破れる事じゃない。

したいしたくないの話ではないのだ。

「ご友人のことはあ、諦めて下さいませ」

くぐもった声に勢い良く顔を上げる。

予想もしなかった言葉に目を見開き、一気に様々な言葉と疑問が浮かんでくるが、そんな混乱した状態でまとまる筈もなく、ただ口元を歪ませた。

「ですからあ、紗枝様はお帰りになることが出来るのです」

ちらりと様子をうかがうような視線を向けられる。

私は何度か口を開け閉めした後、ようやく震える声で魚さんに尋ねた。

「ねえなんでそんな事言うの？ 何か知っているの？」

「紗枝様はあ、人の世界に帰りたいのですかあ？」

「話を逸らさないで！」

顔が紅潮している。それを頭の隅っこで感じながら、灰色の肌を包んでいる着物の裾を掴んで叫んだ。

魚さんは表情を変えずに、ただ行儀良く座っている。私は少し深呼吸をすると、自分に落ち着けと言い聞かせながら声を抑えてもう一度魚さんを見つめた。

「諦めろってどうして？」

「ご友人はあ、帰ることは出来ません」

「だから、なんで？」

魚さんは俯き、気の毒そうに顔を横に振った。

「そのお方はあ神通力をお持ちの人でえ、すでに他の鬼様とご契約されましたあ」

口と手足がわなわなと震え、目眩が襲った。

他の鬼と契約？ …… 契約って？

よろける私に魚さんが慌てて私を支える。

「大丈夫ですか？」

「待つて。それ、本当？」

自分を支える灰色の腕を掴んで、両目で淀んだ目をのぞき込む。
お願いだから冗談だと言って欲しい。

「ええ」

私の気持ちとは逆に、魚さんはこくりと頷いた。

銀の目は血の気の引いた私を見、すぐ下の布団へと視線を逸らす。
その様子に些か苛立ちを覚える。

「もしかして、紅い鬼さんと最初に契約した子？」

「それは分かりませんがあ、髪が短くとても小さな娘でしたあ」

あの中で髪が短い女の子はみっちゃんだけだった。

でも、鬼と契約したってどうして？

もしかして捕まってそうせざるを得ない状態になっているって事？

それとも私を助けようとして？

紅い鬼はこの事を知っているの？

みつちゃんは今どうしているの？ 無事なの？

次から次へと嫌な考えが浮かび、ますます血の気が引いてくる。

泳がせていた目を再び銀色の目へ戻して、縋るように水掻きのついた手を掴む。

「みつちゃんと、その子と魚さんは会ったことあるの？」

灰色の口が気持ちほど開く。しかし一度閉じると、消え入りそうな声で答えた。

「……一度だけですがあ、あります」

「どこで？」

魚さんはきよろきよろと目を泳がせたが、小さく息を吐くと首を小さく横に振った。

その息を吐いた口がいくら待っても開きそうにないので、私は懇願した。

「お願い、親友の子かもしれないの！ お願いよ」

魚さんは居心地が悪そうに身じろぐとそつと言った。

「座敷牢です。紗枝様と一緒にいたあ、人の子でした。それは確かです」

座敷牢ということは最初みんなで捕まった時ということかな。

でも、それならやはり魚さんの言っている髪の毛の短い子って言うのはみつちゃんに間違いない。

だとしてもなんで戻ってきたの？　しかも鬼と契約したただなんて帰れないだなんて。

わなわなと身体が震えた。

どうしたら、どうしたら良いんだろう？

「お気を確かに……」

そつと水掻きの薄い膜が、自分の頬を掠める程度に撫でた。

「わたくしはあ、紗枝様にずっとこの常闇にいてほしいのです」

思考の海から突然、引き上げられる。突然の言葉に思考が停止し、動きも停まる。

そして視線をおそろおそろ魚さんへと向けた。

「紗枝様」

いつもは淀んでいる目が、今は澄んだ水のように透き通り、まっすぐ私を見つめている。

私は思わず息を呑んで緊張してしまった。

ゆらりとあの紅い鬼のように妖しく、銀色に光る瞳に見つめられ、私は蛇に睨まれた蛙のように固まっていた。

静まり返った部屋の中、外の喧噪が聞こえるだけで他に音はない。二人とも石のように見つめ合ったまま、しばらく微動だにしない。つたが、魚さんの目がまた元の淀んだ銀色に戻ると、魚さんはそれを私から逸らした。

気まずい空気の中、私は口を堅く結んだ。

魚さんは何を考えているんだろう。どうしてそんなふうに思うんだろう。

この状況をどうして良いか分からず、私は唇を嚙んで俯いた。

「鬼様のところへ行くにはあ、少しばかり時間がかかりますのでえ、この宿をとりました」

何事もなかったかのように、淡々と話し始める魚さん。

それでも私はまだ顔を合わせる事が出来なくて、ただ手元に視線を落とした。

「しばらくここでえ、お体をお休め下さいませえ」

銀の瞳を灰色の陰に隠し、薄い手が揃えられると頭を下げた。

私はそれを目の端で見た後、はっと思い出して、立ち上がろうとしている魚さんに、慌てて詰め寄った。

「待って魚さん！　話はまだ終わっていないわ！　肝心なことをきちんと話して」

「紗枝様」

部屋の中に、私の言葉を遮った声が波紋のように響く。

銀の瞳は相変わらず下を向いていて見えないが、くぐもった声だけはまっすぐ耳に届く。

「わたくしもおこんな姿ですがあ、それでも妖怪の端くれでございます。ゆめゆめえ御自身があ、ひ弱な人の子だという事をお忘れ無く」

有無を言わせない口調に、私は初めて魚さんに対して紅い鬼と同じような気持ちを抱いた。

それこそが、魚さんが元は鬼だったという確かな証拠に思えてならなかった。

第八怪 橙通り

今はもう廃れつつある懐かしい情景がそこにあつた。

賑やかな通りを彩る光は、ネオンや蛍光灯などの電子的な明かりとは違う、儚くも懐かしいオレンジや朱色の光で溢れていて、様々な形の着物や浴衣を照らしていた。

「ちよいと寄つていかないかい？」

「新しい酒が入ったよおっ」

「旦那、これなんかどうだい。たいしたもんだよ」

店から通りを歩く影に威勢良く声をかける店主たちと、それらを聞きながら店先に並ぶ品物を眺める客たち。

鉢巻を頭に絞めた一つ目の大男。蛇のように舌をちろちろさせる酒屋。店から顔を出すのはどれも大柄な店主が多いようだ。

お客はかんざしを品定めしている青白い女性に牙をむきだした青年、猫目の少女。そんな一見人の姿をした妖怪もいれば、狐や川獺、狸などの動物の姿をした妖怪もいる。

「こっちにいいいで下さいい」

呼びかけられ、振り返る。

笠から垂れる薄布のむこうに手招きする魚さんが見え、戸惑いつつもそちらへ進む。

「はぐれないようにい、お気をつけくださいませ」

「魚さん」

声に不安を含みながら、ぎゅっと茜色の襟を掴む。

「大丈夫です。その笠を被っていればあ、平気ですからあ」

少し前に宿の格子から外を眺めていた私に、魚さんが茜色の浴衣を手にして、せっかくだからこの通りを見学しようと提案してきたのだ。

妖怪の群に飛び込むなんてとんでもない。

私は断ったが魚さんは私の意見を無視して、浴衣に着替えた私を半ば強制的に通りに連れ出したのだった。

その際に小さな桜色の匂い袋と薄布のついた笠を私に渡してくれた。これを持っていることによって、人間の匂いと気配を消してくれるらしい。

「これはあどうでしょうか？」

薄い手には金色のかんざし。それを私に見せる。

それを一瞥した後、魚さんにだけ聞こえるくらいの小さな声で話しかけた。

「魚さん。そろそろ紅い鬼さんの所に帰らないと……」

「大丈夫です」

不自然に灰色の口元を歪ませて笑う。本当に大丈夫なのだろうか。さき程からそればかりだ。

私がうんざりしているのも気にとめず、また違う店先へと足を進める。私は仕方なくその後を追った。

魚さんはなにを考えているんだろう。普通失くし物を見つけたら、

すぐに届けようとか考えないのかな。自分の主人の捜し物なら尚更だと思っただけ。

魚さんはずっと紅い鬼に連絡を入れるそぶりも、帰る素振りも見せていない。本当に紅い鬼のところへ帰る気はあるんだろうか。

眉間にしわを寄せながら、様々な妖怪たちがひしめき合うなかを黙々と歩く。

ふと、ちらりと小さな人影が私の目に留まった。様々な服と肌が交差する向こうに、白地に黒の格子柄をした浴衣が見え隠れしている。

いまの。あれって、もしかして人間？

最初座敷童かと思ったのだが、そこまで小さな背ではないようだし、仕草や雰囲気的に妖怪では無いように思えた。

魚さんの背を気にしつつ、顔の角度を変えながらその子をよく見ようと目を細める。

小柄な人影は髪が短いけれど、オカツパではない。

あの丸い髪型はどこかで見たことが……。

次の瞬間、はっとして声を上げた。

「みっちゃんっ」

弾けたように叫ぶと、私は恐怖を忘れて道行く魑魅魍魎の背中を押し分けてその後を追った。

「待って！」

一瞬振り返った彼女の横顔が見えた。が、すぐさま妖怪の群に埋もれて見えなくなってしまう。

「みつちゃん、待って！」

袖を挟まれないよう脇に挟み、時折転びそうになっでは『すいません』と頭を下げつつ見えた影を追った。

嘘だと思いたいし幻だと思いたい。でももし、本当に彼女だとしたら？ まやかしてもない本物の彼女だとしたら？

「待って！ 待ってよ！」

必死に笠を掴みながら大小異なる影をかき分けていくと突然視界が開け、すこし静かな橋の前に出た。

振り返れば賑やかなオレンジの通りが見え、前を向けば対照的に暗闇の中で柳の葉が風になびいている、なんとも物悲しい風景が広がっていた。

「みつちゃん！」

胸の前で両手を拳にしながら叫ぶ。

「紗枝ちゃん……？」

闇の中から声が聞こえ、肩が跳ねる。どくどくと鳴る胸を押さえながら辺りを見回す。

どこから聞こえるの？

きよろきよろと見回しながら橋を渡り始める。

「みつちゃん、どこ？」

「紗枝ちゃん。こっちだよ。橋の下」

橋の手すりに近寄り、おそろおそろ背筋に冷たいものを感じながら下をのぞき込む。すると薄暗い川岸に見慣れた姿があった。

マッシュルームカットの丸い髪型。小さな背。もじもじと何度も動く指。蒼白い顔。

目の前にするまで信じられなかったけど、本当だったんだ……。

「みっちゃん……」

震える足を叱咤しながら、私はまた見失ってはいけないと彼女の元に駆け寄った。

「本当に、本当にみっちゃん？」

緩やかな土手を降りきったところで、私は確認するように小さな影を瞬きも忘れて見つめ続ける。

私の視線に居心地を悪くしたのか、みっちゃんは目を泳がせながらも、小さな顎をこくと頷かせた。

「みっちゃん！」

私は駆け寄って彼女に抱きついた。

「みっちゃん、良かった。本当に良かった！ 無事だったんだね！」

「うん……」

遠慮がちに肩に手が添えられる。

よかった！ 生きてた！

土蜘蛛が言っていたように他の妖怪に襲われていたんじゃないか

と不安に思っていたけれど、ちゃんと無事だった！

彼女の存在を確かめるように、少し強めにみっちゃんの体を抱きしめた。

「紗枝ちゃん、ごめんね」

「ううん。無事でよかったよ」

彼女が元の世界に戻っていれば一番良かったんだけど、久しぶりに心から安心できる友達にあつて私は舞い上がっていた。不謹慎だと分かりつつも、みっちゃんに出会えて嬉しくてたまらなかった。

しばらく会えたことにお互い喜び合っていたが、私はあることを思い出して、抱き合っていた体をゆっくり離すと正面からみっちゃんの顔を眺めた。

「あのねみっちゃん、紅い鬼以外の鬼と契約したって本当？」

その言葉に小さな目を一瞬見開いたが、すぐに俯いて唇を噛むと、申し訳なさそうに頭を縦に振って『そうだ』と返事をした。

くらりと眩暈に襲われた私は、自分に落ち着かせるよう一度深呼吸すると、彼女の顔をのぞき込むようにして言った。

「みっちゃん。私、あの時伝えなかったけれど、逃げるときにあの紅い鬼と約束して、みっちゃん達を返す事になっていたの。ごめんね、もっと早く言うておけば良かった」

「そんな……」

みっちゃんは呟くように呆然とした。小さな目はみるみる潤み、

私を悲しげに見つめている。

私はそんなみっちゃんを励ますように彼女の肩に手を置いて明るい声を出した。

「でも、今からでも遅くないよ！　一緒に紅い鬼の所に行つて、みっちゃんが帰れるように言うから」

もともとそういう約束だったのだ。みっちゃん一人返せないはずがない。それにそんじょそこの妖怪と違って偉い鬼みたいだし、他の鬼と契約していてもきつと大丈夫。

私は紅い鬼がみっちゃんを無事に返してくれると確信していた。

「さ、行こうよ」

「駄目だよ」

ぼつんと小さな口から声が漏れる。

みっちゃんの喜ぶ顔を想像していたのだが、即答したみっちゃんの表情は相変わらず曇ったままだ。帰れないともう諦めているの？

「他の鬼のことなら紅い鬼がなんとかしてくれるよ！　けっこう権力みたいなの持っているみたいだから。ね？　一緒にきて。お願い……！」

私は肩においた手を彼女の小さな手に移すと、ぎゅっと握りしめた。

みっちゃんは小さく息を吐き、微かに私の手を握り返してきた。そしてそこに、暖かい涙を一粒落とした。

「紗枝ちゃん……ごめんね」

「え？」

「……私っ」

何かを言いかけて、突然はつと顔を上げた。

凍り付いた顔。蒼白い彼女の顔がさらに蒼くなる。

彼女のおびえた視線の先へと、自分も恐る恐る振り返る。

「あっ！」

振り返った先には白髪の鬼が、笑みを浮かべながら佇んでいた。

「何をしているんだい？」

くすんだ着物は風もないのにゆらり動いて、滝のような白い髪はどこかでみた夜叉のように鬼気迫るものがある。紅い鬼と対峙している時と同じように、その冷たい群青の瞳から目が離せない。私は金縛り状態になり、石像のようにその場で震えるのも忘れて固まっていた。

「愚痴の……鬼、様」

途切れがちにみつちゃん背後で呟く。私は聞こえたみつちゃんの声に我に返って、じりつと身構えた。

もしかして他の鬼って、みつちゃんと契約した鬼って、この夜叉のような鬼のこと？

「やあ、時雨。ここにいたのかい？」

しぐれ？

目の前の呆けいている私を無視して、白い鬼は私の前を通り過ぎると彼女の肩に手をかける。そして微笑みかけ、みっちゃんに歩くよう顎で促した。

彼女は戸惑い私を一瞬見た。

しばらく見詰め合うが、何かを諦めたように目を閉じて鬼に促されたまま川の方へ歩きだす。

「みっちゃん！」

未だに震える身体を無理矢理動かし、もつれつつも慌てて駆け寄って、がしり彼女の袖を掴んだ。

みっちゃんは振り返らない。代わりに白い鬼がこちらをちらりと見た。

「ははあ。噂通りの人の子だねえ」

にいつと口角を上げると、たくましい蒼白い腕を私へと延ばして、私に叫ぶ暇さえ与えず瞬時に首を捕んだ。

ひゅつと口からすきま風が通るような音が鳴る。

首を強く絞められているわけではないのに、なぜだか息がうまくできない。

殺されるっ！

「鬼さまっ」

悲鳴を上げるのとはほぼ同時に、みっちゃんが白い鬼の腕にしがみついた。

白い鬼がみっちゃんを見下ろすと、彼女はしきりに首を左右に振

つて小刻みに体を震わせている。

「やめて下さい……友達なの……お願いします」

「そう、か。あい分かった」

するりと暖かみのない手が首から離れる。

私はその場にせき込み、膝を突いた。

一瞬にして体中に冷や汗が流れて、悪寒が背中を覆う。凍り付いた胸を内側から心臓が激しくしつこく叩いている。

白い鬼はこちらを心配そうに振り返るみっちゃんの肩を抱きながら川の近くに寄った。ひやりとした空気が頬をなでると、橋の下から屋形船が現れ、みっちゃんたちの前に着く。

「待って！ みっちゃん！」

裏返った叫びにみっちゃんはこちらを振り返りじっと見た。そして悲しげに目を閉じると鬼に促されるまま船に乗りこんだ。

丸い黒髪と広がる白髪が暖簾をぐり見えなくなると、船はそのまま音もなく川を滑り出した。

行ってしまう！

追いかけようと足に力を入れるが、膝が狂ったように笑って言うことを聞かない。叫ぼうと口を開いても、出てきたのはカラカラに乾いた喉の悲鳴だけだった。

さわさわと柳が風に遊ばれて乾いた音を辺りに響かせている。

息を整えてようやく膝が黙ったころ、一人きりになった私は呆然と船の消えた方へと視線を送り続けた。

第九怪 白い渴望

川の水面がまた闇夜を鏡のように映し出した頃、ようやく私はのろのろと立ち上がった。

何もかも分からないことだらけだった。みつちゃんはどうしてあの白い鬼と一緒に行ってしまったんだろう。脅かされているのとは少し違って見えた。それに、何か言いかけていたけれども、結局何を伝えたかったんだろうか。

そこまで考えてはつとした。

そうだ。何にしろ、みつちゃんのことを紅い鬼に伝えて、約束通り元の生活に戻るようにしてもらわなくちゃ！　こんなところでぼけっとしている場合じゃない。魚さんに早いところ鬼の所に戻るように言わないと！

そうと決まればすぐに行動。先を急ごうと振り返った。

「お待ちください」

「わっ」

いきなり灰色の顔が視界いっぱいに広がったので、思わず飛び上がってしまう。振り返った先には魚さんが行儀良く手を結んで佇んでいた。び、びっくりした。

「魚さん、いつの間に」

言いかけて先ほどのことを思いだし、開きかけた楕円の口を遮って早口に説明した。

「魚さん！　さっき長い白髪がみつちゃんを連れていったの！　早く紅い鬼さんのところに戻って何とかしてもらわないと間に合

わなくなっちゃうかもしれない！ 早く、すぐに鬼さんの所にいかないと！」

「紗枝様」

灰色の口が少しばかり息が荒くなった私を諭すように呟くと、ふっと小さく息を吐いた。そしておもむろに背を向けて黙々と歩きだした。

訳が分からなくて、意味の分からない行動に私はどこかもしく感じて、思わず『魚さん！』と声を荒らげた。魚さんはその声にちらりと振り返り、ついてくるよう薄い手で促してきた。

もう、急いでいるのに……。何を考えているのか全然わかんないよ！

腹立たしくなりつつも、私は他に何か良い案が浮かぶハズも無かったので、しぶしぶ黙って丸い背中についていった。

.....

「どこに行くんですか？ 紅い鬼さんのところに帰るんですか？」

何度目かの質問。まったく同じ内容だけど、魚さんはずっと黙っている。答える気がないのかな。

枯れ木と枯れ草が広がる荒野。風が湿った空気で草木を撫でる以外は、私たちが歩く音しか聞こえない。後ろを振り返っても、すでにオレンジ色の明かりは見えなくなっていた。

なんだか寒い。ぶるっと体が震える。気温の寒さもあるけれど、別の寒さも感じる。魚さんから視線をはずし、荒野の様子を観察してみる。

月は姿を消し、空はただ真っ暗な闇が広がっていて、辺りは枯れ

木と自分の背丈ほどある乾いた草が生い茂っていた。

それにしても、どうして月明かりもないのに草木がはっきり見えるんだろう。草や木や地面が自ら光っているわけでもないみたいだし、まるで見えない照明がどこからか地上を照らしているような、不思議な光景だ。

沈黙と悪寒に心が支配されようとしている中、早く紅い鬼さんに会いたいという気持ちだけで、私の心は支えられている状態だった。もちろん会いたいというのは友好的なものじゃ決してない。あくまでみっちゃんをきちんと返せる約束を果たしてもらったためだ。

でも。はつきり言って私は混乱している。

何かなんだか分からない。

みっちゃんも。魚さんも。紅い鬼も。

……。

紅い鬼に関しては元から意味が分からないから今更なんだけれど、でも魚さんとみっちゃんに関してはなにか引つかかる感じがして仕方がない。とても複雑な感じがする。

「あ……れ……」

小枝を踏んだところで我に返り、辺りを見回す。

「魚さん？」

右に左に視線を走らせるが、魚さんの姿が見あたらない。見えるのは自分より背の高い枯れ草ばかり。

ま、まさか、はぐれた？

ざつと勢いよく血の気が引いた。荒野に一人。あたりは真っ暗。月の明かりもない。

「魚さん！」

恐怖にかられてありったけの声で叫ぶ。

緊張から体の各箇所が違うリズムで震え出す。手足が異常なほど震えてうまく立てないし、言葉も出ない。

魚さんはどこにいったの？　ここはどこなの！？

「や……」

もう一度叫ぼうとした。でも声は出なかった。

目の前のなにかと目があった。でもそれはきつと気のせいなんだと思う。だってそれには目がないんだから。

「人だ……人間がいる」

木枯らしのような、掠れた声。それが茂みからカタカタと体を鳴らしながらゆっくりと現れた。

私、どうしてこんなに驚いているんだろう。ホラー映画だって、お化け屋敷でだって見慣れているはずなのに。ただの骸骨のほずなのに！

茂みから現れたのは長身の骸骨。着物も何にも着ていない、理科室に飾ってあるような見事な骸骨が独りでに動いている。

「嗚呼なつかしい……人の姿よ」

意味の分からない私に、骸骨は嬉しそうに黄ばんだ骨を動かして私に腕を伸ばしてきた。

反射的に私は逃げた。

弾けるように駆けだし茂みの中をぐちゃぐちゃに走り抜けた。

絶対に振り返らない。ただ全速力で前へと進む。

自分が骸骨が動くだけでこんなに驚いて怖がるだなんて意外だっ

た。どこか冷静にそんなことを思いつつも、腕で草をかき分けることも忘れて走っていた。

そろそろ息も切れてきた。足も痛い。

肩で息をしながらついに足を止めて、その場で屈み込んだ。ぎゅっと目をつぶり、耳に神経をかき集めて音を探る。

何かが動くような、追ってくるような音は聞こえてこない。

「逃げきれた？」

ほっと胸をなで下ろそうと下を向いた。酸欠で頭がくらくらする。額の汗が顔を伝い、顎に流れるとそのまま重力に従って落ちていく。それをそつと開けた瞳で何気なしに見届け、凍りついた。

汗が落ちたその先に、あの白い骸骨がこちらを見上げていた。

「
っ！」

一瞬目の前が暗くなるも、理性を総動員させて気力を振り絞る。こんなところで気絶したら生きて帰れない！ 気絶している場合じゃない！

「待て」

冷えた金属のようなものが無理やり振り返った私の足首に絡みつく。途端に私は前に倒れ込んだ。弾みで被っていた笠が飛ぶ。痛みを歪ませるが、それを目にして気がついた。

なんで人間ってばれたの？ 笠だつて被っているし、匂袋だつて持っているのに。

「やっと、やっと見つけた。熱と肉を持った人間」

二の足にガシリとした感覚を覚えて跳ね上がる。下を振り返れば骸骨が迫ってきていた。

「な、なにを」

「温かい、生気に満ちた人間が。生きた人間が」

足から這うように私の上に上ってくる骸骨。それが私に覆いかぶさると冷たい空気の固まりがお腹の上に乗っているような奇妙な感覚に包まれる。

「ここは暗くて寂しい。心も体も、凍てつく寒さよ」

白い顎が音もなく上下する。

「だが、お前がここにいる。ずっとずっと」

「い、いや……」

「これからは寒くない。凍えることもない。永遠に」

泣いている様な掠れた声。どこから発せられているのか分からないけれど、確実に耳元に近寄っている。

「お前はこれからずっと、俺といえるから」

『永遠に』と耳の真横で聞こえたその瞬間、私の中の何かが限界を達し、髪の毛が逆立つのを感じて絶叫した。

「いやあぁっ」

私は持てる力を全部、身体の上に居る骸骨にぶつけた。骸骨は驚くほど簡単に宙を舞い、おもちゃのようにガシャッと音を立てながら地面に落ちた。

「置いていかなくてくれ。ずっと一緒にいてくれ。慰めて欲しいだけなんだ。生気を分けてくれよ」

ばらばらになった骨から、まだ声がする。これは何なの？この骸骨も妖怪なの？でも妖怪って言うより幽霊に近い気がする。どちらにしろ危険なことにかわりはない。

「寂しい……寂しい……」

逆再生の動画でも見ているように、骨がまた元の姿に戻り始める。足から順に組み立てられ、最後に頭が添えられる。

「どうして俺がこんな目に遭わなければならないんだ。どうして我等が」

空を仰ぎ、ぶつぶつ言いながらこちらに足を踏み込んでくる。

まずい。また追いかけてくる気かも。

私は後退しながら立ち上がった。笠を拾いたかったけれどもすぐに走れるようにしたいから、笠に気を取られるわけにいかない。

「なんだってこんな身体にならないといけないんだ！俺達は何をしたって言うんだ！」

エコーがかった声が辺りに響く。はっとして外れかかった視線を

白い影に向ける。

上を向いていた頭蓋骨が真正面に居る私に向けられると、やはり表情がないまま、白い顎を動かした。

「羨ましい。恨めしい。お前の持っているものが欲しい」

「私の持っているもの？」

眉を寄せて骸骨を凝視する。

特別妖怪とかが欲しがるようなものは持ち合わせていないけれど、まさか自分の命だとか、そういう意味？

「分かるぞ分かるぞ！ 輝かしい活気に溢れた日々が！ 陰りのない魂が！」

いよいよ意味が分からなくなってきた。思わず呆けていると骸骨が叫びながら飛び掛り、私の袖を掴んできた。

「何のことなの？ 私そんなの知らないっ！」

必死に顔を左右に振って否定する。骸骨の言っている意味が全然分からない。私にどうしろっていうの？ 袖をつかまれ思い切り引っ張られる。しかし負けじと私も必死に抵抗する。

「ここにいるんだ！ お前だっていつかはこうなるんだ！ そうなる前に少しでも慰んでくれえ！」

「やめてっ！ いやあ！」

もみ合いになり骸骨が私の腕を直に掴んだその時、発火音と同時

に深紅のが骸骨を包んだ。

これは……紅い鬼の炎。

「この炎は、鬼火なのか……？」

骸骨は二三歩後退するも、特に痛がる様子もなくぼんやりと炎を帯びて佇んでいる。

鬼火が効いていないの？ 着物の襟を掴みながら息を吞んで身構える。

「お前は鬼にも気に入られているのか。……そうか」

先程までの勢いをなくし、寂しげにうつむいた。皮も肉もない両手で空洞の目を覆い隠す。

どうしてだろう。私はなぜかその光景に何度目かの既視感を覚えていた。

骸骨はよろよとその場にうずくまると、ううと呻き声を出しながら切なげな声で私に囁いた。

「だったらお前には分かるまい……。我々の気持ちなど……永遠に……」

骸骨はすすり泣き、そして

「分かるまい」

最期の言葉とともに、炎と一緒に跡形もなく消えていった。

「分からない……って？」

骸骨の『分かるまい』という言葉にふと神社で泣いていたみつちやんが頭を過ぎった。彼女もまた、私に『分からない』とあの時訴えていた。

骸骨から逃げられた安堵感よりも更に深くなった疑問に、私はただ一人、身を硬くした。

第十怪 灰色の思い

「紗枝様」

背後から声をかけられ振り向く。

「魚さん」

背後の暗闇の中に灰色の影が立っていた。私はそれを見つめ、呆然としたまま呟いた。

魚さんは平たい手を何度かひらひらさせた後、息を吐きながら重たそうに口を開いた。

「時間がございませんのでえ手短にお話しましょう」

何か覚悟を決めたように、ひとりと私に淀んだ目でまっすぐ視線を向ける。

「私は嘘を申しましたあ。光子様とはあ何度かお会いしたことがありますが」

「え……」

「私は紅い鬼様にい、仕えた時からさんざ虚仮にされて参りました。なのでえ一泡吹かせたいと、常日頃から思っておりますあ」

突然の告白に、私はただ灰色の口から出る話を黙って聞くことしか出来ない。しかし私の相づちがないのを気にせず、魚さんは言葉を続ける。

「そんな時、土蜘蛛の件で光子様の存在を知りました。そしてなんとかあの愚痴の鬼様のところにい、いらっしゃることが分かりました」

愚痴の鬼。

みっちゃんが蒼い顔をしながら呟いていた、あの白髪の鬼のことなんだろうか。

私のそんな疑問に気づいたのか、魚さんはその鬼がそうだと伝えてきた。

「愚痴と貪欲の鬼さまの目を盗んでえ、何度かお話をしているうちに、光子さまが抱いている気持ちがあ私と同じなのだと分かったのです。そして紗枝様。あなた様のこともあ、光子様を通して知ることになりました」

なるほど。だからそんなに会ったこともないのに、私に親しげに話してきたんだ。

ただ実際に直接会って話したわけでもないのに、こんなに親近感を持ってくれるなんて。二人でなんの話をしていたんだろう。それにみっちゃんが私に対して持っている気持ちってなんだろう。魚さんは同じ気持ちを持っているって言っているけれど、すごく気になる。

「魚さん。みっちゃんと同じ気持ちって何ですか？」

私は思ったことをそのまま訪ねてみた。

しかし魚さんはおもむろに首を横に振る。

「紗枝様にはあ分かるはずもない気持ちでえございます」

微笑みながら、どこか蔑むような諦めたような声でため息混じりに魚さんは呟く。私はなぜか魚さんのその様子に、みっちゃんが神社で言った言葉をまた思い出した。

『絶対に分らない』

神社で狂ったように、折り紙を釘で打ちつけて泣いていたみっちゃん。あの光景は狂っていると言うよりも、悲しく寂しげに思えてならなかった。そこで私は気が付いた。あの紅い鬼火と消えていった骸骨をみた時、なんだかみっちゃんを眺めていた時となぜか同じように感じていたんだ。

「ただ光子様と違ってえ、私は妖怪でえございます。そこはあ光子様が紗枝様に対する想いとはまた違うのです」

また違う？

聞こえた言葉に思案してさまよっていた視線を目の前の灰色に移す。

同じ気持ちを持っているけど、想いは違うつて……。

「違うつて一体何が？ 何のことなの？ 二人とも私に対して何を想っているって言うの？ それに魚さんもみっちゃんもあの骸骨も私には分からないって言うけど。ねえ、どういうことなの？ 全然、意味が分からないよ」

堪らず声を震わせながら訴えた。言いようのない不安に、真相が分からずにいるのはもう沢山！ きちんと説明して欲しい。曖昧にしないで欲しい。

不安を露にした私に、魚さんが音もなく近寄ってきた。驚いて後

ずさった私の腕を湿った手が掴む。

「な、なに……」

「わたくしにはあ、先ほど申し上げましたようにいい時間がございません。もしあなた様が紅い鬼様とお、人の世界に帰る勝負をするときにいい、これをお使い下さい」

手のひらに小さな四角いものを二つ、私に握らせた。

腕を放された後、角砂糖ほどの大きさのサイコロが手の中で転がっていた。

「これは？」

手の上の白と黒のサイコロを見つめながら魚さんに尋ねる。一見、普通のサイコロにしか見えないけれど。

「あなたが念じた通りの目が出るサイコロでえございます。人の世界に帰る時のみにいい、お使い下さいませ。決してえ他のお願い時にはあ使ってはなりません」

「え、でも」

返そうと差し出した手を魚さんは優しく押し返し、首を横に振った。

そんな大事なものを私にくれるなんて。人の世界に帰って欲しくないって言っていたのに。

「ありがとう」

私は少し戸惑いつつも、魚さんにお礼を言った。

もちろん、私はみっちゃんのことがあるから帰るつもりはまったくないのだけれども、それでも魚さんの気持ちがどこか嬉しくて、それは言わないでおくことにした。

「じきにい、紅い鬼様がぁ参ります」

「魚さんはこれからどうするの？」

「紗枝様をお河童のところから、勝手に連れ出したのです。戻ればあ紅い鬼様は、私を手打ちにされるでしょう」

くるり淀んだ目が回ると、すつとこちらへと銀色の瞳が向けられた。

「私は自力でえ元の姿に戻る方法を探します。紅い鬼さまの所はぁもう戻りません。またお会いするときはぁ、鬼の姿であることをぁ、願ってくださいませえ」

「魚さん……」

私を見つめる瞳がまた、宿にいたときと同じように澄んだものに変わっていく。穏やかな闇夜に染える瞳。

「紗枝様にはぁ、もつとこの常闇の庭をお見せしたかったです。これからぁあなた様を魅せようと思っていたぁ矢先でしたが、今の私では貪欲の紅い鬼にはぁ為す術ございません」

灰色の肌が銀の瞳をしまい込む。そしてゆっくり頭を下げた。

「では、お元気でえ」

魚さんは丸い身体をのそのそ動かすと茂みの方へと歩み、やがてその身体を草の海の中へと沈ませた。振り返らず、静かに闇の中へと消えていった。

私は魚さんが消えた方向をしばらくじっと眺め、あの言葉だけが私の頭に残って響いている。

『あなた様には分からない気持ちなのです』

『分からない、絶対に』

『永遠に分かるまい』

私には分からない？ 私には？

取り残された気持ちで、闇の怖さも忘れてぼんやりと暗い草原を眺める。落とした笠がふわり風に遊ばれて足元に落ちた。それを拾い、ため息をしながら被る。

「分からない……」

口に出して、小さく呟いた。

「ひゃあっ!？」

腰に大木のようなものが巻き付き、足が地面から離れてぐるりと視界が回る。緑の土手から暗い空が映る。仰向けになって笠が落ちれば、漆黒の闇夜が瞳に飛び込んできた。

「だ、誰」

「まあゝつたく。手間のかかる雀力ナ」

言葉を遮ったのは、今はもう聞きなれたなまりのある口調。
おそろおそろ顎を引いて顔をあげると、ニヤニヤとした紅い顔が見えた。

「鬼さん！」

「やっと見つけたカナ鈴音え」

呆けている私にニヤリと尖った八重歯を見せつける。

「さんざん探したゾ。これでお前さんをのんびり可愛がれそうだな
ア」

笑みを深くして笑いかけるが、その笑みは背筋が凍るような残酷性を帯びたものだった。

そうか。鬼さんからしたら私が勝手に逃げ出したと思われても仕方ない状態だ。魚さんが河童のところから無断でここまで移動してきちゃったわけだし。

「あ、あので うっ」

「まあゝ言い訳は屋敷で聞こうじゃない力」

説明しようとした私に紅い大きな手で塞がれる。そのまま鬼はズんズん歩き出した。

知らず知らずに、私は鬼に抱きかかえられた体を小さくし、胸の前で両手を堅く結んだ。

第十一怪 紅い檻

「お、怒っているんですか？」

恐る恐る、目の前の紅い鬼を下から見上げるようにみつめる。鬼は盃を左右に傾けさせながら、中の透明の液体をゆらゆらと踊らせているだけで何も話さない。

私はぐっと口をつぐんで俯いた。狭い籠の中では鬼と距離をとりたくても取れない。気まずい沈黙に押しつぶされそうだった。

しかし意外にも心臓は落ち着いて、なんだか開き直ったようにいつも通りの鼓動を規則正しくさせていた。

神経が図太くなったのかな、私。

「鈴音」

「は、はい！」

突然呼ばれて、文字通り弾けたように顔を上げる。紅い指がひらひらりと私を呼ぶ。正座していたせいで堅くなった足を気遣いつつ鬼の前まで足を進め、そこでまた正座した。本当に目と鼻の先に鬼が居る。

さすがに私の心臓も先程とは態度を変えて焦り始めた。お腹にドクドクと振動が響いて気持ち悪い。

「回れ」

「え？」

良く聞こえず聞き返す。

「ま・わ・れ」

細長い、しかし鋼のように丈夫な指が一本くるりと回される。何がしたいんだろう。そう思いながらも大人しく従い、言われた通り腰を浮かせてくるりと体をよじる。

「ひゃあっ」

いきなり鬼に背中を向けたところで、後ろからガチリと腰に腕が巻き付き、引き寄せられる。どんと勢い良く厚い胸板に背中を強く打つけられ、その衝撃に眉をしかめた。

何が起きたのか一瞬分からなかったけど、自分の下で鬼が足を組み直したのを感じ、膝の上に乗せられたことに気が付いた。

「なにするんですかつ」

後ろを振り返りながら抗議の声を上げる。少し強く抱きかかえられているせいでちよっと息苦しい。

「お前さん、あの魚とずっと一緒だったそうだな」

息を押し殺した声が耳のすぐ後ろから聞こえ、ぞわっと背筋に言いたいものがないものが走った。それと同時に全身に鳥肌が立つ。

「ええ、まあ」

言いながら自分の身体を締め上げている紅い腕に視線を落とす。

責められている気がして緊張してしまい、知らず知らず深く息を吐いてしまう。

「宿にも泊まったみたいだが？」

「そう、ですけど、それがどうしましたか？」

応える代わりにまた腕の締め付けがきつくなる。しかも背中から舐めるような視線を感じ、感電したみたいに身体が震えた。私は靈感とかないハズなのに嫌というほど背中から不吉な気配を感じている。

怖い……泣きそう……。

目頭が熱くなるが、必死になって堪えた。

泣いたらダメ。しっかりしないと！

「今着ている茜の浴衣はどうした？ 俺がやった物じゃないな？」

わき腹にある紅い拳がグツと帯のあたりを周りの布と一緒に掴む。く、苦しい。

「魚さんが用意してくれたんです。私のはボロボロになってしまったので」

魚さんの話だと着ていた着物は濡れるわ引きちぎれるわけで、もう衣類としての機能は果たしていなかったようだった。もうそうなたら着るに着れない。良い物だったから勿体無いとは思ったけど仕方がない。

茜色の裾を眺め、ふいにあの銀色の瞳を思い出す。

魚さんどうしているのかな。あれからどこに行ったんだろう。

紅い鬼は魚さんが逃げたことを知っているの？ もう追っ手をだ

したりしているとか？　だとしたらうまく逃げて欲しい。辛い目に遭っていたみたいだし、多少ひつかかるところはあるけれど、私にとって恩人なのは変わらない。

でも結局何を思っているのか分からずじまいになっちゃったな。みつちゃんのこと、もつと何か知っていたと思ったんだけど、なんだかんだでそれも聞きそびれていた。

「気に入らないかな」

「え？」

紅い声にはつと現実に取り戻される。

鬼が後ろで酒を飲み干す音が聞こえると、畳の上に盃が足元に転がってきた。

「脱げ」

「えっ！？」

盃を追っていた目が特に何を見るわけでもなく止まる。

え、今、今、ななな、なんていったの？

硬直する私の背後から後ろで留めている帯が引つ張られ、身体が揺れる。

「ちよちよつと待ってください！」

鬼の手から逃れようと目くくが、私を抱える紅い腕はまったくビクともしない。これは本当にまずいっ！

「嫌ですっ！　やめて下さいー！」

「安心しろ。お前の裸見たってどくも思わん」

「ほつといて下さいっ！」

第一そういう問題じゃないし！

浴衣の下にそれ用の肌着はもちろん着ているけれど、下着はつけてないのだ。下着を催促したことはあるけれど貰った例はない。どうして下着をくれないんだろう。妖怪って下着つけないの？ それとも下着の存在をしないの？

何にしたって浴衣を取られたら肌着一枚になってしまふ。そして肌が透けちゃうじゃない！ それだけは嫌っ！ ううん、透けなくても嫌だけど！

「んん？」

鬼の手がピタリと止まる。するりと胴に巻いた腕の力を緩めると長い指をお腹と帯の間に突っ込んだ。私が慌てふためく前に鬼さんが素早く紅い指を引っ込めると、指には四角いものが二つ挟まっていた。

それを見て私は自分の顔が凍った気がした。

だってそれは魚さんがくれた、出る目を自在に操れるサイコロ……。

「なんだこれは？」

「そ、それは、魚さんに、お店で買ってもらったんです」

しまった。どもってしまった。

お店で普通に売っているものなら鬼だって気にとめたりはしない

だろう。そう思ってた言い訳してしまっただけで、不審に思われたかもしれない。

大事なサイコロだし本当のことを言っ取上げられたりしたら大変。内心ハラハラしながら背後を窺った。

「お前がねだったのか？」

『いいえ』と言ったら魚さんが余計に立場が悪くなるのかな。でも私から欲しいと言った事にしたら、怪しまれないですむかもしれない。

いや、でもなんでサイコロなんて欲しいのかって聞かれたらなんて答えていいんだろう。なんとか良い言い訳は……。

「ほお。ずいぶんと魚に懐いたナア、鈴音」

私がおちゃごちゃ悩んで黙っていたのを鬼がどう捉えたのか、どこか嫌味っぽく言ってきた。そして顎を背後から掴み、私の耳元に口を近づけ

「ナア鈴音。お前の飼い主は誰だ？」

そう囁いた。

この場合は紅い鬼だと答えなければいけないと分かっていた。けれど、どうしても言いたくなかった。

飼い主と何だっていうの？ 私はペットなんかじゃない！ 怖い思いをするかもしれないと思いながらも、私は口を真一文字に結んで黙った。

「主人は誰だっ！？」

すぐそばで雷でも落ちたかのような鬼の声に、一気に内臓が震え上がった。

だめ！ やっぱり怖いっ！

ぎゅっと目を瞑って身体を縮めた。びりびりと畳にまで鬼の音が響いて振動が伝わる。それが静まると、自分の心音だけが耳に残った。

「まあゝったく」

溜息を吐きながら鬼は少し身じろぐと、強張った表情をしている私の顎を掴んで、猫の喉を撫でるように私の下顎を指でなぞり始める。

「せっかく可愛がつてやろうと思っているのに。お前はつれないナアゝ」

罵声を上げたばかりとは思えないほど優しく上機嫌に顎や首筋を撫で回す。

相変わらずつかめない鬼の性格。気紛れにしたって変わりすぎる。鬼にされるがままになりつつも、目の端で赤い手のひらで転がされている二つのサイコロが気になって仕方がない。きちんと返してくれると良いんだけど。

元の世界に戻るための切り札。自分が帰れないとしても、うまく使えば何かに役立つはず。

元の世界。元の日常。

ふっとあの川原の光景が浮かび上がる。

「……あの、鬼さん」

少しの間を置いてから私は切り出した。

「うん？」

返事をしながらも、私を撫で回す手は止めない。鬱陶しい思いながらまた口を開く。

「私、友達に会ったんです。みつちゃんに」

「……会った？」

ピタリ。鬼の手が止まる。

「はい」

「どこで？」

「川原です。お店がたくさん並んでいる所の近くでした」

「ほう」

また手の動きを再開するが、今度はゆっくりと私の髪を弄び始める。紅い指に髪が絡まれるたび、私の頭が揺れる。

「みつちゃん、白い鬼と一緒に行ってしまったんです。鬼さんなら何とかできるでしょう？ 約束通り、帰してくれるでしょう？」

振り向きながら鬼の返事を待つ。

鬼はふむ。としばらく考え、唸った。

「お前、その娘にまた会いたいのか？」

「え？」

「会いたいかな？」

突然の質問に目を何度か瞬かせる。

そりゃ、会えるならまた会いたいけど……。

「も、もちろん会いたいですけど」

「よし。帰らせる前に会わせてやろう。ただ時間が掛かる」

帰らせるって。

信じられない気持ちで振り返る。深紅の瞳と目があり、そのまま見つめ続けた。

「みつちゃんは本当に帰れるんですね？」

「帰るも何も」

眉を吊り上げ、やや小首を傾けると皮肉げに口端も吊り上げた。

「帰っていたハズさ。本来ならナ」

「え？　どういことですか？」

鬼はこちらをチラリと見る。獣が相手を伺うような鋭さで。

自分がなんだかしてはいけない質問をした気がして居心地が悪くなり、視線をそらす。

「ま、会うにしても、帰すにしても時間が掛かる。しばらく俺とのんびり遊ぶとすれば良い力ナ。お前を飼ってからのんびりかまってやれなかったかしナア」

ぎゅうつとそのまま向かい合った状態できつく抱きしめられる。

苦しさに喘ぎつつも、頭の中は深い霧に覆われていた。

真相が見えない不安か。もしくは鬼が私を抱きしめる力か。どちらのせいで今胸が苦しいのか、私は分からなくなっていた。

第十二怪 紅に伏す

火照った体に、暗めの赤に大輪の花が咲く着物で包まれる。土や汗で汚れた体と髪は今ではすっかり綺麗に洗われて気分も良くなる。できればもっと露天風呂でゆっくりしたかったのに。せめて鎖無しで入らせて欲しかった。

私の逃亡を防ぐためとか言っただけで鬼はお風呂に入れるのを許す代わりに、囚人を繋げる鎖を私の片手に繋げた。逃亡しようと思っただけじゃないんだけど。でも、それでもあの広い豪華なお風呂に入れたのは有り難かった。以前入った時と違って、お湯はミルクのような色をしていて柔らかなお湯だった。

身体と髪を洗ってお湯に入り、五分もしないうちに小鬼から出ると合図がきた。もう出ないといけないの？と顔をしかめていたら、子鬼が入るぞと言わんばかりに入り口を叩いてきたので、渋々お湯から上がることになったのだ。

あの時と同じように、着飾りを終えて鏡の前に座らされる。その時、鏡に映る自分の瞳をみてぎくりとした。

なんで、紅いの？

鬼の瞳には劣るにしても、目を動かす度にきらりと紅く光る。まさか。慌てて左腕を捲くり上げ肌をみた。薄い灰がかった桜色に染まっているはず腕は、元の日本人特有の黄色みを帯びた肌に戻っている。しかしもっと腕を捲くり上げると肩の近くにまで色が移動していたのだ。

これ、なんなの？　どうなっているの？

怖くなつて捲りあげた裾をゆっくり戻した。

鬼の契約と何か関係があるのかな。そういえば誰かが妖怪に飼われた人間が鬼になつたつて言っていたし。その考えにぞつとして鳥肌が立つ。

私も鬼になるの？　人間じゃなくなる？

……。

もしかして、みつちゃんにもこの契約をあの白い鬼としているんじゃない……。

紅い鬼はみつちゃんに会うにしても帰すにしても時間がかかると言っていた。でも、それって本当？　なにか時間稼ぎをしているんじゃないくて？　どうして時間が掛かるんだろう。

もう待てない。

たとえ今すぐに行動できないとしても、知つたとして何も出来ることがないにしても、どうしても知りたい。

子鬼が髪を結い上げ顔に薄い化粧を施される。後ろから両方のこめかみを押さえ、顔を上げさせられた。鏡に映る自分の表情はぎらぎらと瞳を煌めかせ固く決意したものだった。

もう曖昧なことはいらない。鬼に聞こう。すべて分かつてすべて終わるのなら、今ここで契約を完了してもかまわない。

支度をしていた子鬼たちが離れると、私は誰に言われるまでもなく立ち上がった。

.....

襖を開けると、鬼はちょうど酒を飲み干しているところだった。

子鬼が私の腕にはめられた鎖を解くと、静かに後ろに下がっていく。畳の上をすると着物を引きながら鬼の前に座る。そして両手をついて頭を下げた。

「お前、なににも食べていないダロウ？」

鬼が立ち上がる音がすると、まもなく私の前に少し乱暴に善が置かれた。視界の上の方に黒光りした足が二つ見える。

「食え。痩せこけた奴を飼っていたって仕方ないカナ」

はじめはろくに食事を与えてくれなかったのに、何を今更なことを。下を向いたまま私は口を尖らせたが、顎に何かが振れ、急に視界が上に向いた。

「下向いてないで、さっさと食え」

鬼はそう言つて私の顎から紅い指を離した。目の前には豪華な食事。色鮮やかな平皿や小鉢には新鮮な魚や、細かいところまで細工された野菜や煮物が乗せられていた。

私は一度大きく深呼吸し、ぐつと膝の上にある両手をつよく握った。

「鬼さん。お食事の前に良いですか？」

視線は紅い鬼に向けていない。視界に映るは極彩色の食べ物。しかし私はそれを見ていなかった。全神経が紅い鬼に向けられている。唇をかんで、鬼の出方を待ったが何も聞こえなかった。私はそれを承諾したと解釈して、また深呼吸すると切り出した。

「すべて話して下さい。みっちゃんのことを」

身体を伝って心臓の鼓動が直接耳に響いてくる。耳の真横に心臓があるような錯覚を起こす。

「だからそれはだな」

「私は今ここで鬼さんと契約を完了しても構いません！」

鬼の言葉を遮って叫んだ。

「時間が掛かるのはどうしてですか？ みっちゃんは本来帰れたはずって、どういうことですか？」

「それはお前に話したって、分からないことかな」

また『私には分からない』ですって？

顔が赤く染まっていき、私は唇が震えるのもかまわず鬼に向かって叫んだ。

「もう、うんざり！ 魚さんもみっちゃんも、ついには鬼さんまで！ 私には分からないってそればかり！ 話してくれなきゃ、いつまでも分からないよっ！」

嗚咽を無理に堪えた為に、最後のほうの言葉が上手く出てこなかった。

紅い鬼は何も言わない。顔を向けていないのでどんな顔をしているのか分からないけれど、禍々しい気配も怒った気配も感じない。ひたすら静かだ。

肩で息をして身体全体が熱く、目頭から流れ出る雫に気が付いた

時、少しだけ冷静さが戻ってきた。私は鼻をすすりながら何度か胸を上下させると、両手をついた。

「今どうなっているのか。みっちゃんはどうしているのか。どうなるのか。それだけで良いです。どうか教えて下さい……お願いします」

言葉の終わりと共に、豊に額をつけた。

興奮のせいで身体全体が息をする度に上下する。目を閉じて無心に頭を下げ続けた。

「鈴音」

静かな、穏やかな紅い声が上からかけられる。目をそつと開けて顔をわずかに上げる。

「まずは食べ。話はそれからだ」

ぼやけた視界に肩眉をつり上げて呆れたような口と表情で、私に顎で食べると促す鬼が映った。

上体を起こして、鬼へと顔を完全に向ける。

「お話、聞かせてくれるんですか？」

「食べたらナ」

気だるそうに言って、その場にごろりと寝そべった。

話、聞けるんだ。そっか。緊張した身体から力が抜け、はあっと鬼に聞こえないように大きく息を吐いた。それと同時にまだ頬を伝っていた涙が膝の上に落ちる。

「食べなきゃ教えんゾ」

「た、食べます」

びくつと肩を揺らし、涙の跡を拭くのも忘れて慌てて箸を手に持った。

本当は食欲なんて吹っ飛んでいたんだけど、食べ始めればお腹がもつとくれと鳴きつつあったので黙々と食べることに集中する。

これから話されることを考えてしまうと、箸が止まりそうで、私はただ無心に食べ続けた。

第十三怪 呂色

食べ終えた食事を子鬼が下げ部屋からそそくさと出ていく。紅い鬼から、みつちゃんの事を今から聞けるかと思うと緊張する。無意味と分かっているながら、落ち着きなく両手をもじもじとさせてしまふ。

「コツチに來い」

上体を起こしあぐらをかいた隣の畳を、何度か紅い手が叩いた。……もしかしてまた抱きつく気？ それはもう心から勘弁してほしい。無意識にそこに向けられた顔が渋いものへと変わる。

「どうした？ 話を聞きたくないのかナ？」

もちろん聞きたいんだけど。だけれども……。

不安に唇を真一文字にして目を左右に動かす。でも迷っている場合じゃない。食べられるわけじゃないんだし、真相を聞くこれ以上ないチャンスだもん。よしっ。

自分に活を入れると同時にお腹に力を入れて立ち上がる。そして紅い鬼の手前まで行き、そこから鬼の横に静かに座った。

「さあて、何から話そうカ」

鬼が片膝をついてそこに腕をおくと、部屋の向こうに視線を投げた。私はすかさず鬼に顔を向けた。

「友達は、みつちゃんは今どうしているんですか？」

「ああ。あの娘は愚痴の奴のところにいるサ。あいつがわざわざ人間を飼いたがるとは思わなかったがナァ」

「私が鬼さんに連れ戻されたとき、みつちゃんは扉の向こうにいたのに、なんで今ここにいるんでしょうか？」

片眉を吊り上げ、鬼はうーんと唸った。

「憶測だガァ、扉が完全に閉まる前に愚痴の奴が引っこ抜いたんだろ。もしくは娘が閉まりかけた扉を開けた力」

「そんな……」

せつかく一度は確かに帰れたのに。なんでこんなことに。
私は一度うつむいた後、身を乗り出して鬼に訪ねた。

「でも、でも帰れるんですね？　大丈夫ですよ？」

藁にもすがる思いで鬼に聞く。

「もちろん大丈夫カナ。しかも常闇と同じぐらい心の広い俺は、帰す前にお前等を会わせてやる。感謝しろヨ？」

「そうですか……」

鬼のきつぱりとした口調に私は大人しく素直に頷いた。だって疑ったらキリがないし、鬼さんだって契約が完全に結ばれるんだから、嘘をつく必要だってないだろう。

ほっとして肩の力が抜ける。

「他に聞きたいことはあるかな？」

「えっと」

他に何聞こうかな。白い愚痴の鬼のことをもっと詳しく聞いておいた方がいいのかも。それに紅い目と肌の灰色の事も聞きたい。今後どうなるのか見当も付かないのだから。

……でも。だけど。

最優先にすべきではないんだけど。

隣の鬼を見上げるように盗み見て様子を伺う。さっきまで飲んでいたお酒のせいか、まどろんだ顔をしている。

どうしようかな。

しばらく悩んだあげく、色々聞きたいことがある中で、常にひっかかっていた事を私は尋ねた。

「鬼さん。みんなは何が、私には分からないと言っていたんですか？」

鬼に聞いても分かるのかどうか分からない。けれど他に手掛かりになる事もないし、なにか知るヒントにでもなればと思って私は口を開いた。

「そうだな。前にこの常闇がどこまで広いか、という話をしただろう？」

「はい。人の闇がどうとかって」

「その闇をお前には理解できないと、皆言っただろうよ」

「みんなは分かるんですか？」

「ここにいる奴は大抵分かる。分からない奴はここにいないだろうしナア」

「……」

人の闇。確かに私にはそれだけではよく分からない。けど、とりあえず人が持つ悪い感情ってことだね。うーん。でもやっぱりどうもピンとこない。

もちろん私だって落ち込んだり悩んだりすることはある。人を羨ましく思ったり、嫌だなって思ったこともある。

けれど誰だって持っている感情だから特別だとは思えない。だから私には分からないってことは、無いはずなのに。

「でもまあ、分からないお前だからこそ、手元に置きたいんだがナア」

「わっ」

眉間にしわを寄せて悩んでいたが、いきなり肩を強く抱かれて飛び上がる。

口の端を吊り上げて笑う鬼の口は、まるで獰猛な獣のように鋭く、紅の瞳もいつもよりまた一段と妖しく爛々と煌めいていた。

な、なに？ あつもしかして……。

血の気が引くのを感じながら私は身の危険を直感し、慌てふためいた。

「ま、待って下さい。私は食べても美味しくないです」

「食ってみなけりや分かんサ」

え！ 食べる気なの？

ほほ本気で今から食べようとしているの？！

「ダメですよ！ 契約はまだ結んでいないんですから！ 断じて食べちゃダメです！」

「お前はさっきこの場で結んでも良い、と言っていたじゃあない力」

「それはちゃんとみっちゃんが帰れるという約束を守ってくれると
いうことが前提で……その……」

「うん？」

「ですから……」

「ナンダ？」

鬼が面白そうに笑みを浮かべながら、ギラギラした目で鼻先まで顔を近づけてくる。その下から鋭利な八重歯が見えて硬直してしま
う。

ちらりと自分の肌を簡単に引き裂く光景が頭の隅によぎる。ああ、
なんでわざわざ嫌なことを想像しちゃったんだろう！ ついに我
慢でなくなった私は、目と口をぎゅゅと強く閉じた。

……。

……ん？

いくら待っても何も起きない。

クツと喉がなる音が聞こえ、恐る恐る目を開ける。私の両目が全開になったところで鬼が堰を切ったように突然笑った。そしてその声は次第に大きくなり、私を拘束していた腕をゆっくり解いた。

「安心しろ鈴音。可愛いお前を食べるわけない力ナ」

肩から離れた腕が今度は私の頭の後ろを掴み、そのまま下へ下へと押してきた。

「なんですか、何するんですかつ」

嫌がる私を無視して鬼は強引に押さえ続ける。そのまま自らの膝の上に私の頭を乗せた。ちょうど小さい頃に、お母さんに耳掃除をしてもらった時と同じ格好に私はなった。

「いゝ子にしてろよ鈴音」

頭を預けたまま硬直している私を、頭から肩に掛けて紅い大きな手が撫でる。首筋に長く無骨な指が這う度にぞくぞくしてしまう。気持ち悪いっ。

「お前は俺のモノだ。誰にもやらん」

呪いをかけるように耳元に囁かれる。

「ずっとずっと離さなイ」

甘く優しく、しかしどこか鋭い刃のように心に突き刺すような鬼

の言葉。

私はどうしてだろう。それを聞いているうちに目を閉じて子守歌でも聴いているかのように、鬼の紅い言葉に聞き入った。

「どこにしようと逃がしはシナイ」

熱い指が、首から襟に入り肩を露わにする。

「お前は俺のモノだ、鈴音」

灰がかったそこを鬼が丁寧に舐めあげていく。ゆっくり、吸い上げるように。灰梅に沿って。

熱が……引いていく……。

ぼんやりとそんなことを思いながら目を閉じ続ける。なぜだか開ける気にもならなかった。

「鈴音」

名を呼ばれて目を開くと、鬼が私の顎を持ち上げ両目にそれぞれ口付けた。

「やめて……下さい」

重く感じる腕を持ち上げて鬼の顔を押そうとするが、上手く動かずただ紅い頬を撫でただけだった。鬼はその手を掴むと、そつと手の甲にまた口付けた。

なんでこんな気色悪いことするの？ 腕を引っ込めようにもすで

に力が入らない。なんで？ それに、すごく、眠い……。

睡魔に必死に対抗するがそれも無駄な努力に終わり、私は背筋にぞくぞくとした異様な感覚の中、ついに意識を手放してしまった。

第十四怪 濡れたねずみ色

……うーん。

なんだろう、すごく頭が重い。それにだるい。

うめき声をあげながらうつすらと私は目を開いた。

未だぼやける視界に白い棒が何本も映り、やや間があってから籠の中だと気がついた。いつの間にか眠ってしまったみたいで、薄い肌着姿の私は布団に丁寧に寝かされていた。

「私いつ布団に入ったんだっけ」

いったいどれくらい眠っていたんだろう。

風邪で長く横になって、起きあがった時のように体全体がだるい。ゆっくりと布団から這い出て立ち上がり、格子に近づくと両手で格子を握り籠の外を見回した。

「ここはどこ？」

無駄に広いのは同じなんだけど、金の屏風に派手な襖、紅い柱、細かい鮮やかな絵が描かれている天井。私が今までいた籠の部屋ではないみたいだけど。

ふと籠のすぐ横にある分厚い畳にまで流れる紫の帳が目に入った。あれはなんだろう。

籠の中を歩いてそこに近づく。籠から手を伸ばせばなんとか帳を掴めそうな距離だ。

誰か寝ているの？

耳を澄ますと微かに寢息のようなものが聞こえる。

「鬼さん？」

声をかけてみるが返事がない。

寝ているのかな？ だったらわざわざ起こす必要もないよね。振り返り布団の上に戻って腰を下ろした。

鬼も寝るんだ。ちよつと意外。

特にすることもなく、かと言って今起きたばかりなのに寝るのは気が引けた。それに頭がなんだか重くてだるい。こういう時って横になっても寝れそうにないんだよね。

ふうつとため息をついて膝を抱えた。何気なしに横を見やる。見た先には鏡台があり、漆塗りのそれは丸い鏡ごと朱色の布で覆われていた。

私は腕を伸ばしてそれをとると鏡をのぞき込んだ。

「あ、れ？」

食い入るように鏡に顔を近づけて嫌と言うほど鏡に映る自分の瞳をのぞき込んだ。

「目が紅くない」

次の瞬間はつとして肌着の裾を掴み、肩を眺める。

そこにあつたはずの灰色がかつた肌はどこを探しても見えなくなっていた。

「どうして？ これって治つたの？ でも、どうして」

言いかけて何かが記憶を舞い戻らせる。が、ハッキリしない。一瞬何かを聞いた気がしたけれど思い出せない。

紅い鬼さんならなにか知っているのかな。

ちらつと暖簾の方へ視線を向ける。相変わらず規則正しい寝息が聞こえてくるだけで特に変化はないみたい。いつ起きるのかな。

「それにしても……」

立ち上がりながら格子のそばへ寄り、部屋を見渡す。豪華絢爛という言葉と悪趣味という言葉が見事にマッチしている部屋だ。飾つてある屏風や燭台は見事だし、畳も綺麗な緑色でへりは黒っぽい緑に銀色の刺繍が施されていて細かい。

しかし壁や天井に描かれている絵の派手さや色使いが、それらの良さをダメにしている気がしてならない。

「無駄に派手な部屋ね」

「そう力？」

「えっ」

思わず出た言葉に応えた紅い声。紫の帳に目をやると、そこから細くも逞しい腕が見えてゆつくりと赤褐色の頭を見せた。

「まあそう言ってくれるナ。赤鬼の時から使っている部屋だ。悪趣味なのは仕方がないカナ」

がしがしと鋭い角の根本を掻きながら言った。

「変えたりとかしないんですか？」

「面倒カナ」

ゆったりとした足取りで籠の前まで歩く鬼。暗い赤紫の浴衣は胸のところはだけていて、厚い胸板が直に見える。なんだか作りものの体みたい。

「ナンダ、俺の体が気になる力？」

視線を感じたのか、鬼がにやにやしながら言うてくる。

「いえ、全然」

じろじろ見たのに気を悪くしたのかも。あわててすぐに視線を逸らす。鬼はそんな私に対して不機嫌そうにふんと鼻を鳴らして籠の鍵を開けた。

「出る鈴音。散歩に連れて行ってやろう」

「今からですか？」

「嫌力？」

「嫌ではないですけど」

正直外に出るのは懲りていた。もうじつとしてみっちゃんに会える時がくるまで待っていたい。

「安心しろ鈴音。今度は俺もいる。それに」

籠の中をきょろりと眺め、顎で鏡台の横を指した。

「その箱に入っている物を着ろ。ソレなら動きやすいだろう」

「箱？」

鬼が指した先を見ると、鏡台の陰に隠れるように長方形のベッコウの箱が置かれていた。

「さあゝて、俺も着替えるとするか」

「あの」

部屋を出ようとした鬼を呼び止めようと声をかける。

「うん？」

「なんで私、ここにいますか？」

「ここなら寝ている間でも様子が分かる。いちいち様子を見に部屋を移動するのも面倒だしナ」

「なるほど……。あ、それとですね、実は肌が」

「ああゝ後ダ、後。さっさと着替えナ」

くあつと大あくびをしながら部屋から鬼は出ていった。聞きそびれてしまった。後でって言うてたから後で聞くしかないか。とりあえず着替えないと。気を取り直して布団を畳み、ベッコウの箱を籠の中央に持つてくると蓋を開けた。

「え……」

しばらく信じられなかった。もう捨てられたと思っていたのに。諦めていたのに。また目にすることはないと思っていたのに。

箱の中には丁寧に、懐かしい学校の制服が入っていた。白いブラウスもグレーのスカートとブレザーも。ここに来た時に着ていたものが、きちんと綺麗な状態で入っていたのだ。

「どうして」

戸惑いながら手に取る。校章のボタンとピンもきちんとついている。靴下も茶色のリボンタイも。一つ一つ手にして眺めていると自然と涙が溢れてきた。皺になったらいけないと思いながらも、制服に顔を埋めて握りしめた。

「お母さん、お父さん……みんな……」

学校や家族の思い出が次から次へと涙に負けないぐらいの勢いで溢れ出てくる。嫌なことも良いことも、今では陽の光のように温かく明るく感じる。

でも今更、泣いたらいけない。

これで良いんだから。これでやっと済むんだから。

必死に自分にそう言い聞かせた。これで完全に終わると私は改めて感じていた。

でも胸が苦しい。これで人としての人生は終わりだと突きつけられたみたい。

鬼はこれを狙って制服を差し出したの？ 最後の最後にこんなことするなんて。

私は鬼の思惑通り、心に揺さぶりをかけられて自分が未だに元の世界に未練がある事が、悔しくて情けなくて仕方なかった。

涙でグレーの制服が曇り空のようにしっとり濡れ、暗く染まっていた。私はそれを見下ろして、そこを意味もなく指でなぞった。そして大きく息を吐いて天井を見上げた。

私は帰れない。

でもみっちゃんを助けられる。

中学に入って新しくできた親友の彼女。それからずっと本当の妹みたいに仲良く学校生活を過ごしてきた。みっちゃんも私のことをお姉ちゃんみたいだと言ってくれてすごく嬉しかった。

たとえ後悔しても途方に暮れても、私は絶対に前を向こう。
決して鬼になんかならない。

みっちゃんに会ったなら笑って送り出そう。

ありがとうって言うってお別れしよう。

私は涙を拭って、制服を広げた。

第十四怪 濡れたねずみ色（後書き）

今回まで目を通して頂いてありがとうございます。

そろそろ終わりに近づいてきておりますが、ここまでこれたのも皆様のおかげです。

お気に入りに登録して頂いた方、評価くださった方、感想をくださった方。ありがとうございます。

もう少し続きますが、もし宜しければ最後までお付き合いくださいませ。

第十五怪 白い幻惑

鉛のように重い体に鞭を打ってひたすら砂利の上を歩く。久しぶりのスカートで足下がスースーする。もちろん下着無しよりはずっと良いんだけど。

砂利道の脇に咲き誇る木蓮の白い花が、闇夜に浮かび上がり、心なしか道が明るくも感じる。お花見の夜桜を見たときも綺麗だと思っていたけれど、前に紅い鬼が見せてくれた梅同様、他にもこんな闇に栄える花があるんだと改めてそう思った。

「平気か？」

すぐ前を歩いていた紅い鬼が振り返る。黒地に紅葉の着物が闇夜に浮かぶ。

「大丈夫です。ところで、どこに行くんですか？」

「河原」

「河原？ 魚でも釣るんですか？」

鬼が魚釣りする姿なんて想像できない。もし魚を獲るとするなら、熊みたいに手でバツバツサと捕獲する画しか思いつかない。思わずこっそり口に含みながら笑ってしまう。

「友人に会わせてやるのさ」

「え！？」

叫んで、ぴたつと足を止める。
友人ってみっちゃんのこと？

「今からですか？ な、なんでもっと早く言ってくれないんですか！
それに時間がかかるって言っていたじゃないですか」

「お前がずっと眠っている間に準備が整ってナ。起きていたってどうせ何もやることないだろ？」

「そんな無茶苦茶な……って、私そんなに寝ていたんですか？」

それだつたらこんなに体がだるいのも理解できるけど……。
正確な時間がわからないから、その準備というのにどれだけ掛かったのか知りようがないし、どれくらい眠ったかなんてもっと分からない。

どれくらい眠つたらこんなに体が鈍くなるんだろう。

「疲れが溜まってたんだろ」

「だからってそんなに寝れないですよ」

困惑している私にニヤつと笑って鬼はまた歩きだした。

なにそれ。馬鹿にされた気がして、その背中をむつと睨みつける。

でもこれからみっちゃんに会えるんだ。いきなりっていうのもあってなんだか実感がない。

鬼との契約が完了したらどうなるんだろう。ここにいる間も色々呪いみたいなのをかけられていただし、それが一気に自分の身に降り懸かってくるのかな。

やだ……こわい……。

恐怖を飲み込んで喉が鳴る。

「どうした？」

肩越しに鬼が振り、こちらに紅の瞳をむけてくる。その目を見て、一瞬縫りたくなる衝動が起こるが、次の瞬間には罪悪感と嫌悪感に責められた。

何を考えてるんだろう私……。

「何でもないです。みっちゃんになんて言おうか、考えていたんです」

「そうか。よく考えればいいかな」

本当になんてことを考えてるんだろう。しっかりしないと。嫌なことをいくら思い浮かべたって実際にどうなるのか分からないんだし、余計なことを考えるのはやめよう。

しばらくお互い無言のまま木蓮に挟まれた砂利道を進んでいくと、目の前に道を阻むように急な土手が現れた。これだけ急なら立つて行くのは難しそう。手で這っていくしかないみたい。もしかしたらこういうことを想定して制服に着替えさせてくれたのかな。

「鈴音。こっち来い」

ヒラヒラと紅い手が手招きする。

「ずいぶん急な斜面ですね。上るの大変そう」

鬼の傍らまできて鬼が素足なのに気がつく。鳶色の肌が砂利に浮かび上がって不気味に写る。それはそうと、足の裏が痛くならないの？ よく不健康な人が素足でデコボコしたところを歩くと痛いつて言うけれど。……鬼は健康なのかな。

「そら、もうちょっとコツチに來い」

「もつとですか？」

今でもかなり近いんだけど、さらに鬼の真横まで近づく。腕を伸ばさなくても鬼に触れるほどの距離だ。

「じゃあ行くとスルか」

「どこに……っ」

言うと同時に私を米俵の様に担ぎ上げ、驚き悲鳴を上げた私を無視して土手をどんどん上っていった。遠ざかる地面と高さにスーっとお腹のあたりが冷える。

「次は下るゾ」

「ふえ？」

揺れる視界に酔いながら聞き返すが、すでにその頃には浮遊感を覚え、悲鳴を上げる前にドスンとした衝撃が体を突き抜けていた。

「さあゝ着いた力ナ」

地面に降ろされるが私はその場で屈み込んだ。

だつていきなり担がれたり飛び降りたりするんだもん。ああ、目が回る。

「まだ着いてないみたいダナア。ここらで待つか」

屈み込む私の隣に鬼が腰を掛け、私にも座るよう促した。私は何度か深呼吸してから、鬼に促されるままその場に腰を下ろした。

「鈴音、そこじゃ痛いダろ。俺んどこに座れ」

「イヤです」

未だにククラする頭を押さえながら即答する。少しだけ鬼が怒るんじゃないかと横目で盗み見るが、鬼はいささかムツとしただけで、すぐに遠くをぼんやり見つめ始めた。

鬼が見た先に私も顔を向ける。大きな河が黒い水の流れを速くさせて、水面を蛇のようにうねらせていた。

「あ……白い、月」

川の向こう側に真つ白な月が穏やかに上っていた。こんな不気味な世界には不釣り合いな、雪のように白い満月がこの河原一帯を照らしていた。

月を眺めた後に川を見てみるが、黒い川はそれを映したりはしない。どこまでも河は真つ黒だった。

「騙されるなよ」

白い月を見ていた私に、鬼が低い声をかけてくる。

「何がですか？」

鬼のどこかピリピリとした口調に私は眉を寄せた。

「あの月は嘘力ナ」

「嘘？」

「そうダ」

あの月は本物じゃないってこと？ でも、それにしたって見事だわ。みればみるほど綺麗な満月。優しい穏やかな光。

「白い月に黒い河カ。腹黒いアイツにぴったりの風景ダ。イヤらしいナア」

嫌味ったらしく言いながら大きくのけぞり、土手に体を預けるとそのまま目を閉じた。

アイツ？ 誰のことを言っているんだろう。私は首をかしげてしばらくぼんやり河原を眺めていたが、ふとある事を思い出した。

「ねえ鬼さん。腕にあった灰色のことなんですけど、さっき見たら消えてたんです。どうしてか知ってますか？」

鬼はそのままの姿勢で、目を開けることなく応えた。

「俺の鬼火を移したろ？」

私はこくりと頷きながら『はい』と返事して、先を促す。

「それを俺に戻すついでにお前に溜まった妖力を吸い取ったんだ」

「よつりよく？」

少し鬼は身じろぐと、気だるそうに説明し始めた。

「この世界は妖の気配で溢れていてナ。普通の人間がいるとそれに浸食されて一部肌の色が変わる。魂に繋がる瞳に色が全て行き着けば俺たちの仲間入りに一歩近づくナ」

「じゃ、私もう少して妖怪になりかけていたんですか？」

「肩までだからまだ猶予はあったナ。まあだが、ただそれだけじゃないぞ。妖力が馴染み始めるとなにかしらの神通力が身に付くこともある。身に付かない奴もいるガナ」

ということとはもしかして。

何度か私の視点とは違う感覚が何度かあった。それが私が身につけた能力だったんだ。……あんまり役に立たなかったけれど。

あれ？ でも待てよ。

「鬼さん初めに肌の色が変わるだけって言っていませんでした？
ここにいるなら特に問題はないって」

「俺達の仲間になるだけだろう？ 問題ある力？」

「お、大ありじゃないですか！ 妖怪になるだなんてダメじゃないですか！」

「いや完全に物の怪になるワケじゃあナイからな。問題ないだろ

う」

なんて適当な。鬼の言うことはあまり当てにしないほうがいいのかも。

「あとそれと、瞳が紅くなっていたんですけど、それも常闇の妖力というのに、あてられたんですか？」

「それは俺の鬼火が長く憑いていたせいで瞳の色が紅くなったんだ。完全に俺の妖力に吞まれる前に、俺が肌とついでにとっておいた」

閉じていた瞼を上げて、ちらっとこちらを見ると口端をつり上げる。

「肌の色が瞳に行き着き、さらに俺の妖力に染まればお前はどんなふうに変化するか興味はあったんだがナア。いや惜しいことをした」

「そんな勝手な」

不意に視線を感じ、口を閉じた。上流の川の向こうから誰かがこっちに向かって歩いてきている。立ち上がってそちらに注目するが、それでもよく見えなくて目を細める。

闇の中をのろのろと何かを引きずりながら向かってきている。もしかしてみつちゃんかな？

緊張と不安で落ち着きなくその影を見つめていると、ようやく月の明かりが届く場所に來たところで、その姿が見えてきた。

そしてはつきり誰だと分かったとき、私の中の恐怖心がまた体を奥底から揺るがした。

「鬼さんっ！」

ほぼ悲鳴と同様の声を張り上げて、すぐそばで目を閉じている鬼の腕を揺さぶった。

「鬼がつ、あの般若の鬼がまたっ」

「んっ？」

のんきな返事をしている鬼はちらつと片目をつつすら開けてその影に視線を投じた。

濃い黄色の二本の角が暗闇から現れ、あの時と同じ顔で月明かりに照らされながら、なにかをズルズルと引きずりながら歩いてくる。

何でこんな時に来るの！？

私達からそんなに距離がないところまでくると、白い月の明かりに照らされて、よりそのおぞましい姿が浮かび上がった。

私はその光景を見て過去に経験したことがないくらい血の気が引いた。一瞬息をするのも忘れて、目の前の様子に呆然となった。

真っ白な月明かりの下で、あの時私を襲った鬼女が、ぐったりとしたみっちゃんの体を引きずってそこに立っていたのだった。

第十六怪 白月の下で

手足がガクガクと震えて声も出ない。胸の前で両手を結び合わせ、肩をすくめて鬼女を凝視する。後ずさる私の背中が、後ろで立ち上がった鬼にぶつかる。

「……」

鬼女はなにも話さず、こちらをじつと見つめている。その片手には微動だにしない制服姿のみつちゃんか。

「み、みつちゃん！ みつちゃん！」

泣き声混じりに私は叫んだ。

どうして、どうしてこんなことに！ もう逃げられるはずだったのに！ せつかく帰れるのにどうして！

「落ち着け」

頭に鬼の大きな手が乗せられる。泣き出しそうな私の頭をそのまま撫でつけながら、紅い鬼は鬼女に向き直った。

「さてさて。お前さんがこいつを襲ったんだナ？」

気軽に鬼女へと声をかける。まるで世間話でもしているよう。

鬼女は紅い声に対して、すこし間を空けてからゆっくり俯いた。

「ソレは」と鬼が顎でぐったりとしているみつちゃんを指す。

「お前さんの望んだことなんだナ？」

鬼女は顔をあげ、強く頷いた。
望んだこと？

「どういうことなの？」

私は一歩踏みだし、震えながら鬼女をみつめた。

「望んだって何が？ みつちゃんを……みつちゃんを、一体どうしたっていうの？」

怖くて震えているのか、それとも別の感情からか。どっちか分からないけど、今はそんなことはどうでも良い。

「みつちゃんを返して！ その子に何をしたの！」

鬼女に叫んだ。

すーっと生ぬるい風があたりを撫でつける。

私の髪が、鬼女のぼさぼさの髪が、みつちゃんの汚れた制服のスカートが。それぞれさわさわと揺れる。

お互い見詰め合ってから、おもむろに鬼女が身じろぐと、突然乱暴にみつちゃんを私めがけて投げつけた。

「みつちゃん！」

弧を描きながらみつちゃんが人形のように宙を舞う。

このままじゃ落ちちゃう！ 受け止める自信はなかったけれど、とつさに腕をつきだして構えた。

「お前じゃ無理だ」

言うが早いか、素早く紅い鬼が前にでると、片手でみつちゃんを宙で受け止めた。そして私の足下にその小さな身体をそつと横たえた。

「みつちゃん！ みつちゃんしっかりして！ ねえ、起きて！」

青白い顔をしている彼女の横顔を何度も叩く。その頬はひんやりと冷たく、肌の弾力もこころなしか張りが無い。

私と同じ制服はどこもかしこもボロボロで、ブラウスに皺が出来ていたり、スカートの裾はギザギザに切られていた。

嘘でしょ。嘘でしょ？

そんな、そんな。こんな事って……。

「みつちゃん返事して……」

両手で彼女のやつれた顔を挟んだ。その顔に私の目から零れた涙が落とされる。それでも彼女の目は閉じたまま。眉もピクリとも動かない。

「ごめんね」

私は彼女の首筋に顔を埋める。

もっと早く気づいていれば良かった。助けてあげたかった。こんな暗くて寂しいところで死なせたくなかった。

「ごめんね……」

もう一度彼女に謝った。

自分の髪が風で舞い上がる。他に音は聞こえない。
小さな彼女の身体を抱きしめて、私はすすり泣いた。

「……紗枝ちゃん」

か細い小さな声。はっとし、おそろおそろ顔を上げて、みつちゃん顔を眺める。

「みつちゃん？」

眺めるけれど変わらず目を閉じ続ける小さな顔。頬を撫でてみる。
相変わらず温かさは感じられない。

でも、今確かに……。

「紗枝ちゃん」

また聞こえた声。でも目の前の小さな口は動かない。

ふいに視線を感じて、体を起こし顔を上げる。変わらない青緑の
着物。それを覆うようにボサボサではない、きめ細かい綺麗な長い髪
が風になびいている。

私は鬼女の顔を眺めた。

「……誰？」

さっきまでいたあの般若顔はなくなり、代わりに白魚のような肌
と艶やかな桜色の唇、そして大きくぱっちりとした目をもった、美
しい鬼がそこに佇んでいた。

鬼女は訝しげな顔をしている私に柔らかに微笑んだ。

「紗枝ちゃん。私、光子だよ」

「え……？」

透き通るような、大人の女性の声。みっちゃんのような可愛らしい声じゃない。

「みっちゃん、なの？ 本当に？」

綺麗な鬼は嬉しそうに頷いた。

「な、何を言っているの？ 嘘をつかないでよ！ みっちゃんをこんなにして、なに訳の分からないことを言っているの？ ふざけないで！」

「紗枝ちゃん……本当に私なの」

意味が分からないと何度も頭をふる。みっちゃんと言う鬼は困ったように小首を傾げて、悲しげに微笑んだ。

「私ね、あの時紗枝ちゃんがその紅い鬼に連れ去られた時、閉まかけた扉をすり抜けて、またここに戻ったの」

いきなり鬼女は話し出した。あの時、みんなで扉をくぐり抜けた大きな扉。なぜこの鬼が知っているの？

不信感いっぱい私に、構わず彼女は言葉を続けた。

「でも暗闇ばかりで、何も見えなくて途方に暮れていたの。だけど

」

一度俯き、恍惚したように静かに目を閉じると、空を仰いだ。

「そこにあの愚痴の鬼様がいらっしたの」

愚痴の鬼。あの夜又みたいな白髪の鬼。

あの時みっちゃんを連れて行った、恐ろしい白い鬼が頭を過ぎる。

「鬼様は紗枝ちゃんを連れ戻してくれるのを、手伝ってくれるって言ったわ。それだけじゃなく、私の持っている力で紗枝ちゃんを守ったり、助けたりできる術も教えてくれると言ってくれたの」

「持っている力？」

「小学校のとき、そんなに紗枝ちゃんとお話できなかったから知らないかもしれないけれど。私、霊感が強くて。……お母さんは気味悪がっていたから、そんなに人に話したり出来なかったけどね」

みっちゃんの霊感の強さは小学校の時に流行った怪談話で一時期有名だった。信じる人、信じない人それぞれいたけれど、隣のクラスにまで話題になったほどだった。

「私、紗枝ちゃんに何とか助けたくて、灯火を送ったり、他の呪いを遠ざけるおまじないをしたり、色々教わっては実践していたの」

あの黄色い人魂のことを言っているの？ それに紅い鬼に呪いをかけられた時に、何度も得体の知れない何かに助けられていた。

本当にこの鬼女は……。ううん、信じちゃダメだ！

「ねえ待つて。もし、あなたがみっちゃんだとしたら、どうして私

を襲ったの？ みつちゃんはそんな乱暴な子じゃない！」

私は許しかけた気をもう一度張り直し、きつい視線で鬼女に睨み返した。

「ごめんね紗枝ちゃん。私はそんなにいい子じゃないよ」

寂しげに、鬼女は微笑んだ。

「え？」

「私、この世界にきて気づいたの。紗枝ちゃんが妬ましいって」

「妬……ましい？」

私の言葉に、彼女は小さく頷いた。

「この世界にいとすごく怖いし、嫌な思念みたいなものがうようよしているの。でもその気持ち私分かる……」

一度俯き、押し殺すような声で呟いた。

「私、紗枝ちゃんが羨ましかった。優しくて可愛くて明るくて……家族も仲が良くて、友達もたくさんいて……」

口に含んだようにボソボソと話す。

深く俯いているせいか、長い髪で表情が隠れて、艶やかな口元しか見えない。

「一緒にいて楽しかった。だけれど、否定してたけれど、ここに来

てからハッキリと気づいたの。私、私、紗枝ちゃんが嫉ましくて、妬ましくて、仕方ないの！ あんなに……あんなに助けてくれたのに」

ぎゅつと感情を抑えるように、綺麗な口が一度強く結ばれる。そして意を決したように、再度口を開いた。

「私、たくさん気がついたの。お母さんも学校の男の子達も、みんな憎いって自分が思ってる事！」

「みつちゃん……」

「でもそんな恐ろしい考えは、だめだって何度も何度も否定した。私を育ててくれるお母さんに、そんな事を思うなんていけない。男子だって私が鈍いから、イライラしちゃってるんだって。それに紗枝ちゃんはいつも私のこと守ってくれてるのに、妬ましいだなんて」

最低だよ。と彼女が呟く。

「でも愚痴の鬼様は、そんな私を悪くないよって言うてくれたの。ありのままで良いって。怨んで良いって。妬ましく思っで良いって」

救われたと、嬉しげな彼女の表情が言っている。

でもまた、強い口調に変わり、興奮気味に吐き捨てた。

「だけど、私はあの人達みたいに……人の皮をかぶった鬼になんかなりたくない！ だから黒鬼様をお願いしたの」

「やめて……みつちゃん」

「私を本物の鬼にしてくださいって」

顔をあげた彼女の顔はあの般若の顔だった。悲しい、寂しい顔をした、鬼の顔だった。

私は悲しくて仕方がなくて、自分の中で音も無く何かが崩れていくのが分かった。

「みつちゃん……」

私は目を閉じた。彼女をみていると痛い。つらい。
ひどく胸が痛い。

「でもごめんね紗枝ちゃん。私鬼になるって決めた時、ある魚の人に紗枝ちゃんに会わせて欲しいってお願いしたの」

魚さんのことを言ってるの？ 両手で顔を覆いつつも、彼女の言葉に声にしないで聞き返す。

「最初は紗枝ちゃんに逃げて欲しくて、助けに行ったつもりだったんだけど、その魚の人と話しているうちに、どんどん、どんどん嫉妬の感情が溢れだしてしまって。気づいたら」

「そんなこと、もういいよ！」

私は顔を上げ、彼女の口を遮って叫んだ。

もうそれ以上言っただくれない。もう聞きたくない。
それ以上悲しい顔をしないで……。

「ありがとう。紗枝ちゃんはやっぱ優しいね。でもごめんね。その優しさすら、妬ましいの」

「そんなの……」

私は全然気にしないのに。
どうしてそんなに自分を責めたりするの？ どうして謝るの？

「ねえ見て紗枝ちゃん」

両手を広げる。青緑の爽やかな清々しいほどの嵐の色が月明かりに照らされる。伸ばした腕に垂れるのは長い綺麗な髪。

「髪も、顔も、声も。とても綺麗でしょう？」

綺麗な口元が、透明な声を奏でている。

あの般若顔はすでにない。

「みつちゃん……」

「これが新しい私なんだよ」

彼女の声はどこまでも嬉しそうで、顔はどこまでも幸せそうだった。

たぶんそれと同じくらい、私は悲しかった。

もう取り返しが付かないんだと。もう、どうにもならないんだと。

彼女は決めてしまったんだ。

人間をやめることを。

鬼になることを。

その場で泣き崩れる。

私の友達は元の世界に帰ることなく、鬼になってしまったんだ。

開放された、自分の意思で。

第十七怪 黒河に沈む

「時雨」

いつの間にか、川岸にゆったりと見おぼえのある屋形船が横付けされていて、そこから優しい声が聞こえる。

「愚痴の鬼様」

綺麗な顔が破顔する。

着物の裾が優雅に舞うとあたりの空気も舞い上がる。

「そろそろ行こうか？」

「はい」

彼女の綺麗な声を合図に、屋形船から小さな影がいくつも這い出てきた。船から降りてきたのは黄色い子鬼たち。緑の子鬼よりもぷくぷくとして、赤ん坊のようにも見える。

彼らは私の足下で横たわっているみっちゃんの体を見つめると、足早にぞろぞろと列をなして近寄ってきた。

「なにをするの？ みっちゃんに触らないで！」

反射的に彼女の体に覆い被さり、子鬼たちから遠ざけようとした。これ以上なにかさせるものですか！ キッと睨みつけて子鬼達を威嚇する。

「よせ」

首根っこを紅い鬼に掴まれると、大蛇のように身体を腕で拘束され、体が強制的にみつちゃんから離される。

「離してよ！ みつちゃんが！」

「無駄ダ」

鳶色の腕を剥がそうとするが、自分の胴から離れることはない。無理矢理身体を捻って向きを変えると鬼に怒鳴った。

「約束はどうなったの？ 帰してくれるんじゃないの？ ねえ！ 答えてよっ」

鬼の着物の裾をつかんで、何度も激しく揺さぶった。

「別にあの娘を帰すとは言っていないカナ」

肩をすくめて、涼しげに紅い鬼は言った。

私はこの時ほど鬼が憎たらしいと思ったことはなかった。こんな状況でなお、笑みを絶やさない紅い鬼。

なんでよ。納得できないよ！ そう思っただけ鬼の胸を叩く。

叩いて叩いて泣きわめいても、鬼は表情を変えない。

憎たらしい、残酷な紅い鬼。

「この醜い身体も、名前も用済み」

はっとして声が聞こえた方へと顔を向ける。

しゃがんだ美しい鬼がみつちゃんの身体をなでる。残酷に見下す

冷たい視線。優しさも温かさもない微笑み。

「運んでちょうだい」

立ち上がりながら言い放つ。

子鬼たちがみつちゃんを囲んで一斉に持ち上げ、そしてそのまま船へ運ぶ。

「やめてよ！ 何するの！」

子鬼の後を、青緑の背中が追っていく。

凜とした後ろ姿は豪華で誇らしげ。なんの迷いも不安もない。

でも私はどうしても納得できなかった。だってこれは本当の姿じゃないんだもの。みつちゃんはもつと自信を持って良いのに、鬼になんかにそそのかされて、今自分を捨てようとしているんだもの！

「ねえ、みつちゃん！ だまされちゃダメだよ！ こんな世界に残っちゃダメだよ！ 私だって、私だって、みつちゃんが思っているほど良い人間なんかじゃないよ！」

声を張り上げて、彼女に叫んだ。構わず腕の力を緩めない紅い鬼の体を押し退けながら青緑の後ろ姿に訴える。

「約束破ってここから逃げたいって思ったことあったよ！ 自分に嘘ついて、汚いことも考えたこともあったよ！」

彼女は振り返らない。立ち止まらない。まるで私の声が聞こえないかのように歩みを止めない。

「鬼にだまされちゃダメだよ！ みつちゃんは鬼になんかならなく

ても、十分」

「紗枝ちゃん」

私の声にかぶせるように、私の名前を呼ぶ。私が息を呑んでいると、弱い風が二人の間をゆるやかに通り過ぎた。立ち止まった美しい鬼。気持ち少し振り返って呟く。

「ごめんね……ありがとう」

わずかに見えた頬になにかが光ったが、それもすぐに見えなくなる。

また歩きだした背中に、私はもう弱々しい声しか出なかった。

「お願い行かないで……もどって……」

みっちゃん。

彼女の名前を呼ぶも、かすれて呟くほどの声も出なかった。私の声はもう彼女に届かない。どんなに叫んだって無駄なんだ。

鬼に抱えられたまま、私は今度こそ完全に絶望した。うめき声を上げながら泣きじゃくり、小さな子供みたいに体を丸めた。

「おい。紅いの」

「あ？」

船から聞こえた声に、鬼が間の抜けた声を出した。

「ずいぶんと、良い声で鳴くのをお飼っているね」

「お前のせいで可愛がる時間がなかったさ。まったく名の通り腹黒い奴め」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

岸に紅い鬼と私しかいなかった頃、鬼たちとみっちゃんを乗せた船がゆつくりと滑り出す。白い月の下で照らされながら、どこまでも真つ黒な河を進んでいく。

船からは私の気持ちとは真逆の軽快な音楽と笑い声が響く。和楽器が奏でられ、それにあわせて手を叩く音が響き、げらげらと下品な笑い声が船から漏れる。

音がぼやけてしか聞こえなくなり、船の影が小さくなりかけた頃、そこから小さな人影が投げ出される。どぼんと水が跳ねる音。さらに大くなる笑い声。

なんで笑うの？ どうしてそんなに楽しげなの？

今投げ込まれた人影は、なに？

放心状態でそれをただぼんやりと見ていた。自分の中身が空っぽになった様だった。何も感じないし何も思わない。何も無い。

「こんな間違ってる……」

鬼が私を離れた後も、そのまま地面にうずくまって、泣くこともせずに呆然と自分の影を見つめていた。

もうすべて終わってしまったのだ。

完全に。すべて。

終わってしまったのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はぁ。行っちゃったナア」

うずくまる私の横で、鬼が腰掛ける音が聞こえてくる。

私はなにも言わなかった。もうなんの言葉も出てこなかった。頭も心も空っぽになっていた。

「憂いているのナ？」

紅い声が聞こえるも、私は応えなかった。正しくは応えられなかったのだが。もう涙も出てこない。

「良かったじゃない力」

場違いな鬼の明るい声。嫌なほどはつきり私の耳に入ってくる。

「あの娘の望みが叶ったんだろう？ めでたしめでたし」

なに言ってるの？ めでたし？

唇と手がわなわな震える。どちらもぎゅっとさせて、赤い鬼に視線を向けた。鬼は横目で私を見つめ返すと、見下したような眼差しに紅を変えて細めた。

「お前には理解できないみたいだがナア」

「……あれのどこが良いの？」

自分の喉から低い声がでる。今自分はどんな顔をしているんだろ

う。喉元がずしりと重く、熱い。手足が鉛のように重く感じる。
こんなの……幸せなんかじゃない。絶対にちがう。

「鬼さん。私のさいころ、今持っていますか？」

鬼は腕組みをして眉を寄せた。

「持っているが……どうするんだ？」

「勝負しましょう」

私は鬼を睨みつけて、唸るように言った。鬼は無表情でこちらを伺うように見つめてくる。

「私が勝ったらみっちゃんを人間に戻して、元の世界に返してください」

「……よしの方が、俺は良いと思うが」

「私が負けたら鬼さんの好きにして良いです」

「鈴音え」

鬼が呆れたように大きく息を吐きながら首を左右に振る。

「お前さん今なにも見えてないだろ」

「するんですか？　しないんですか？」

私はすごんだ。鬼は無表情のまましばらくにも言わずにこちら

を見ていたが、また呆れたようにため息を吐くと、懷からさいころを取り出した。

「文句いうなよ」

私は黙ってさいころを鬼から受け取ると、辺りを見回す。そして近くにあった小さいが平らな岩を見つけると、さっさとそこに近寄った。

鬼が私のあとに続いて岩の向こう側に立つのを確認し、さいころを両手に閉じこめて振る。念じて出る目を決める。出すのは一のゾロ目、丁だ。

卑怯だと、普段の私ならそう思ったかもしれない。でも今はそんなことはどうでもいいのだ。

「お前はどちらにかける？」

「丁です」

「なら俺は半ダナ」

何度も振るさいころ。両手の中で小さく踊る。

これで良いはずがない。あんな寂しい結末は嫌だ。もう一度明るい陽の下に戻ってほしい。

そんな思いを込めて両手を開いた。

落ちるさいころ。岩の上に転がりくるくる回る。黒と紅の瞳がそれを追いかける。

さいころが次第に勢いを弱めて、やがて止まる。

出た目は……三と二。半。

「嘘……」

息が詰まる。体中が強ばった。
目を見開いて、息をするのも忘れる。

「お前は本当に分かっていないナア」

なんで？

どうして？

「妖が欲しいものを、そうそう手放すワケないだろう」

魚さんは出る目が自在に操れると言っていた。でも、今の鬼の言葉に、信じたくないけれどある考えがよぎる。

本当は『自分が念じた物とは逆のものが出る』サイコロだったのではないだろうか、と。

魚さんは私を帰したくないと言っていた。だから帰る時にだけ使えと言っていたんじゃない。そうすれば、それを望んだ私は帰れないのだから。

……鬼はそれを知っていたというの？

「鈴音」

呆然とする私に上から声が掛けられる。すると突然、胸ぐらを掴まれた。

く、苦しい！

「愚問だが、お前さんの望みは本当にあの娘にとって幸せなものか？」

「なに、を」

「まあゝったく。愚かダナア。子鬼なみの愚かさカナ。まさに驕りの極み」

鬼はそのまま私を片手で軽々と掴んだまま川岸に歩いていく。紅い鬼の手を剥がそうともがくが、やはりびくともしない。

「今のお前を飼っても面白くなさそうだ。雛を飼うのもすぐ飽きそうだしナ」

苦しさにあえぐ私を無視してどんどん歩むが、河の手前にまで来ると、さらに私を鼻先にまで掲げる。

「猶予をやるう。帰るついでにあの娘の結末をみてくればイイ」

ぐつと顔を近づけると、妖しい紅が視界に広がる。霞む目の向こうには妖しい紅。恐ろしいほど妖しい紅の瞳。ニヤリとそれが笑むと

「それではゴキゲンヨウ」

紅い手が、花びらのように開く。ゆっくり、ゆっくり。

それが完全に開いたところで私が黒い水に吞まれていく。

瞳には鬼の紅、次に空の黒、最後に川の闇。手足をばたつかせて顔をだすと、鬼が腕組みしながらこちらを眺めている。

「忘れるなよ鈴音。お前は一時的に帰してやるだけカナ」

鬼の紅の瞳が、刃物のような鋭い三日月になる。

「決して俺を忘れるなよ。決して、ナ」

黒い闇に包まれるも、妖しい対の紅だけは残っていた。河の水面からは想像も付かない激流にもまれ、手足がバラバラにされる錯覚を起こす。

グルリグルリと回る視界。身体が四方に引つ張られる。もがこうとするが身体に水が絡まり上手く動かせない。苦しい。口から鼻から水が入る。

耳は水がうねる音しか聞こえない。上へ下へ体が回り、視界も回る。ごぼごぼと自分の口から気泡が出ると、ゴツンと背中になにかが激しくぶつかった。

鈍い痛みに顔をゆがませ、私は気を失った。

第十八怪 向日葵

意識が浮上したのを感じる。

貧血のように頭がくらくらし、頭の奥がすーっとする。

うつすら目を開くと、映ったのは薄緑のカーテンに白い無機質な天井。そして消毒液の独特な匂い。私はそれらを少しの間、呆然としながらただ感じるに任せていた。

「……はい。308号室です」

カーテンの向こう側から女性の声が聞こえる。細く開けていた目を全開にして頭を上げようとした。

「痛っ」

上げようとした頭に激痛が走る。息を吐いてまた枕に頭を埋めると、カーテンがさっと開き、白い服を着た女性が入ってきた。その人の動きが早く感じて私は一瞬頭が混乱する。脳が外界の動きについていけないみたいだ。

「谷樫さん、気がつきましたか？」

「は、い？」

「ここがどこわかりますか？」

「いえ……」

「ここは病院です。いまご両親来てますから」

完全に面食らってしまった。

全然、この状況が理解できない。

安心させようとしてか、看護師と思われる先程の女の人は優しく微笑むと、無駄のない動きでカーテンの向こう側へと消えていった。病院？　なんで病院にいるの？

何気なく頭に手をやると、布の感触。そこをなぞってみて、ようやく自分の頭が包帯で巻かれているのに気が付く。

「紗枝っ！」

泣き出しそうな声にはつとめる。カーテンが素早く動くと、そこにはやつれた懐かしい顔。

「お母さん……」

「もう、この子は！　心配したんだからっ」

苦しいぐらい強く抱きしめられる。

お母さん少し痩せた？　自分に抱きつく母に、自分もいまだにぎこちない動きをする腕で抱きしめた。

母の背中越しに、覗き込む姿。それは目頭を熱くしたお父さんの姿だった。私と目が合うと少し照れくさそうに鼻をすすり、何も言わずにただ優しく笑った。

「心配かけて、ごめんなさい」

自然と謝罪の言葉が出てきた。こんなにやつれた両親を私は初め

て見る。いつも口うるさいけど明るいお母さん。あんまり喋ったりしないけれど、頼りになるお父さん。二人とも心配してくれたんだ。私はそこでやっと元の世界に帰ってきたんだと実感した。もう戻ってくることに無いと思っていた世界に、戻ってこれたんだ。

母は私から離れると、涙ぐむ私の髪をゆっくり優しく撫でた。

「本当によかった。ずっと目を覚まさないから」

「どういうこと？ 私、どうしたの？」

なにもかも分からないことだらけ。

鬼に河に落とされて、溺れそうになつて。それから、なんにも覚えていない。気が付いたら病院だった。

「覚えて、ないの？」

「うん」

お母さんの探るような目に、不安げに頷く。

まさか鬼に連れて行かれて今まで妖怪の世界にいました、なんて言えるはずもなく。そんなこと話したら間違いなく精神科に連行されそうな気がしたのだ。

お母さんは頭の中で少し整理をつけているみたいで、少し思案した後、話し始めた。

「紗枝たち五人がずっと学校に帰ってこないから、先生とお母さん達で最初探したのよ。それでも見つからないから警察に電話して、ずっと探していたの。そしたら山のほうで集中豪雨が発生したなんというから、もしかしてそっちに行っただんじやないかと思って。消防の人たちにも協力して探しに行ったのよ」

えっと……。

なんだかすごいことになってる。

警察に消防？ 思わず顔が引きつってしまふ。

「そしたら最初、女の子と男の子二人が土砂で潰されたお社で見つかったね。もう泥まみれで凄かったんだから！ それでもまだ紗枝と光子ちゃんが見つからないって、それから一週間近く探し続けてもう搜索も打ち切りになりそうになった時、近くの小川で、紗枝を消防の人が見つけてくれたのよ！」

興奮のせいで母の目が熱を出した時みたいに、爛々と輝いている。早口に話している間も、両手の拳をぶんぶんとさせていた。

「それで、私病院で寝ていたの？」

「三日もよー！」

信じられないと言わんばかりに、首を振る母。

ああいつものお母さんだ。

私はのんきにそんなことを思ったが、次の瞬間はつとして口を開いた。

「ねえ、お母さん。みっちゃんはどうしたの？ 見つかったの？」

母の顔が凍りつく。うつむいて何も言わない。

そっか……。

私はそんな反応を見ても、別に驚いたりしなかった。

見つかっていないんだ。当然だよな。だってみっちゃんは、あっちに、鬼のところに残ったんだから。

今までお母さんの後ろで黙っていたお父さんが咳払いをする。気まずそうに、目を泳がせながら私に言った。

「見つかったよ」

「え……？」

見つかった？

みつちゃんが？ 見つかったって？

目を見開いて父の顔を凝視する。信じられない。だってみつちゃんは……。そこまで思って、私は青ざめた。あの時、河に落とされた人影。もしかして……。

私の視線から逃げるように、お父さんは俯くため息混じりに声を出した。

「見つかったんだ。見つかったんだけど……」

みつちゃんの……彼女の遺体は無残な姿で発見された。

流れが緩やかになった山の中にある川に、泥まみれで浮かんでいて、見つけた警察の人目も目を背けるくらい酷い状態で死んでいたらしい。

葬儀は家族だけで細々と行なわれたそうだ。

母が私にもお別れを、とみつちゃんのお母さんをお願いしたそうだが断られたという。葬儀が終わった後、みつちゃんのお母さんと弟さんは、まるで逃げるように、数日後引越したそうだ。その理

由は後になっても分からなかった。

学校は、私達の行方不明騒動で持ちきりになった。

一緒に連れ去られたはずの同級生達は、鬼については一切話さず、クラスメイト達が聞いても覚えていないと話している。

しかし皆なぜか英雄扱いを受けて、戸惑いつつもまんざらでもないみたいで、得意げに助けられた時のことを話していた。

やがて時間の経過と共にその話題を出す人もいなくなり、ついには亡くなったみっちゃんのことを話す人は誰も居なくなった。数カ月後には、まるでそんなことなど無かったかのように、みんな日常生活に戻っていった。

.....

春、先輩達の卒業式。

暖かい日差しに、優しい春風が花びらを運ぶ。

「紗枝え！ 早く早く！」

「今行く！」

友達の声に靴紐を結びなおすと、彼女達の元へ駆け寄っていく。

校門には花束を持った先輩達。

「私絶対に第二ボタン貰う！ 紗枝も早く好きな先輩から貰わない

と！」

駆け出す友達の背中を見送って私は苦笑いした。別に特別好きな先輩はいないんだけどな。

後輩達に囲まれる先輩達。みんな笑ったり、照れてたり、嬉泣きしている人も居た。そのなかで見覚えのある先輩をみつける。

夕暮れの、薄暗いコンビニの光景。笑う声。

みつちゃんや鬼の世界に行くきっかけとなった先輩。

先輩は他のクラスメイトとじゃれ合って、笑っていた。友達に、もみくしやにされている制服の第二ボタンはすでに無い。もう誰かにあげたのかな。

私は漠然としながら、皮肉に映る、その微笑ましい光景を見つめた。

.....

学校の帰り道。あの神社へと続いていた山道に寄る。

山道は土砂でさえぎられた所までなら、今も上ることができた。

フェンスより向こうは土砂で区切られていて、これ以上崩れないようにブルーシートで覆われている。

フェンスの手前には新しく建てられた小さな社。そこには枯れた花。私は手に持っていた花をそっと、その花と取り替える。両手を合わせる気にもなれず、呆然とその社を眺めた。

さわさわと花をつけた木々が揺れる。静かな悲しい場に木漏れ日が踊る。何をするわけでもなく、私はそのまま突っ立っていた。

するとそこへ、誰かが山道を上ってくる音が聞こえてきた。

え、どうしよう！

なぜか反射的に私は社の裏へと身体を隠した。どうしてそんなことをしたのか、私も分からなかったんだけど。なんとなくここに居るところを、誰かに知られたくなかったのだ。

それにしても誰だろう？ あんなことがあってから、ただでさえ誰もこないこの場所は、さらに人が訪れることは無くなったのだ。こっそり社の後ろから覗いてみる。

え！？　っと、思わず声が漏れそうになり、慌てて口を閉じた。

よれよれになった制服姿。あれはみっちゃんと仲のよかった先輩。なんでこんなところに来たんだろう。

気づかれないように身体を小さくさせて黙っていた。

何かを置いたような音と、乾いた音が聞こえる。それから少しの間、なんの音も聞こえなかったが、先輩の足音が聞こえ次第に遠ざかっていった。

ゆっくり様子を窺いながら社の裏から出てみる。先輩の姿はもう無い。

先輩、何しに来たんだろう。

社のほうへ視線を向けると、私が来たときには無かった小箱と花束が置かれていた。

先輩が置いて行ってくれたのかな。

社に近づいて屈む。私が置いたピンク色の花束と、先輩が置いたと思われるオレンジ色の花束。そして四角い箱。

これってなんだろう。それを拾い、よくよく見てみる。

「あ、手作りのオルゴール」

粗い作りのオルゴール。おそらく学校の課題で作ったオルゴールだろう。蓋には太陽のような向日葵が彫られている。でも、先輩は失くしたって言っていたのに。

蓋を開け中をのぞくと制服のボタンが入っていた。
これは……第二ボタン……？

そして蓋の裏を見て息を呑んだ。

『光子へ お誕生日おめでとう』

不器用に彫られた文字。

その途端、弾けた様に先輩が言っていた言葉が蘇る。

『文化祭に出展するなんて聞いてなくて』
『自分流にアレンジしたくて』

先輩、あれはこういう意味だったんだ。
先生への提出が終わってすぐに帰ったのも、失くしたと言
って文化祭に出展しなかったのも。

制服のボタンの下には、二つに折りたたまれたバースデーカード。
カードの間に挿んであった向日葵の髪留め。
向日葵はみっちゃんの大好きな花。

そして文化祭の二日後は
彼女の誕生日……

先輩……本当は……

私は溢れる涙をぬぐいながらオルゴールのねじを回した。
優しく流れるメロディー。頬を撫でる暖かい風。
木漏れ日が彼女の大好きな向日葵に降り注ぐ。

「みっちゃん……」

私は一言彼女の名前を呼んだ。

終ノ怪 妖しい紅

晴れた青空を部屋の窓から眺める。

どこまでも青い空。白い柔らかそうな雲がぽっかりと浮かんでいる。

「紗枝ー。準備できたあ？」

「はあい」

下の階からお母さんの声。窓を閉めて部屋を出る。

リビングにはいつもより気合の入ったお母さんが、一生懸命化粧ポーチをあさって文句を言っている。

「もう、口紅どこにいったのかしら！ ちょっと、お父さん！ 力メラ持ったの？」

椅子に腰掛けて新聞を広げるお父さん。お母さんの声に『ん』と、聞いているのか聞いていないのか、とぼけた返事をしている。その光景がおかしくて、思わず口に含んで笑ってしまう。

「あ、紗枝」

聞こえた声に振り返ると、キッチンからリビングにお姉ちゃんが入ってくる。ほぼパニックになりつつあるお母さんを尻目に、こっそり私に耳打ちしてくる。

「帰ってきたら私達からプレゼントがあるから、楽しみにしてて」

「本当？ なになに？」

「帰ってきてからの楽しみ！」

お姉ちゃんは悪戯っぽくウインクすると、まだおろおろしているお母さんに近寄って、「まだ化粧台におきっぱなしなんじゃない？」とアドバイスをした。

お姉ちゃんとお兄ちゃん達から、プレゼントなんて。何がもらえるのかな。

なんだか今からドキドキしちゃう。

「ほら準備できたら、早く出なさい！」

やっと口紅は見つかったらしい。

口紅の先を出しながらお母さんが私に言った。

「はい。じゃ、行って来るね」

家族に手を振って、笑いかける。

年季の入った鞆を手にとって玄関のドアを開けた。

あれから月日は流れ、私は今日、中学校を卒業する。
いまだに紅い鬼は私の前に現れていない。

あの出来事が何の変哲も無い日常に侵食されて、今はもう現実味

も無い。

常闇にいた証拠も、妖怪と会った証拠も私には無い。

不確かな私の記憶だけが紅い鬼と私を繋ぎとめている。

いつか私は紅い鬼を、常闇を忘れる日がくるのだろうか。もしそんな日がきたとしても、私は決してあの瞳の色だけは忘れないだろう。

あの、妖しい紅だけは。

終ノ怪 妖しい紅（後書き）

これにて、妖しい紅は閉幕とさせて頂きます。

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

そして、長くのお付き合いお疲れ様でした。

初挑戦で、楽しいこと大変だったこと、挫けそうになったこと、色々ありました。

しかしここまでこれたのも、皆様のおかげでございます。

また、もし宜しければ「面白かった」「つまらなかった」などの一言や、「は良かった」「が良くなかった」などのご指摘頂ければ幸いです。

いつか指摘して良かった、と思われるような物の書き方に昇華できればと思います。

最後に生意気を書いて申し訳ございませんでした。

そして本当に、本当にありがとうございました。

お疲れ様でした。

2011・04・29 月猫 百歩

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689o/>

妖しい紅

2011年11月15日02時37分発行